

佐久考古学会会報 16.1

佐久考古

昭和 48 年 11 月

長野県佐久考古学会

佐久考古学会

○ 発刊にあたって

永年の念願であった連絡紙「佐久考古」が発刊されることになりまことに御同慶にたえません。連絡紙は学術誌ではなく、会員が気やすく発表でき、意見の交換ができる広場であります。私たちの調査・研究を文章表現することはお互の発表、表現の伸展の機会でもあり、まとめをすることになります。常に考えていること、発表したいこと、まとめたいことをどしどし発表する場であります。

長い間、ほしいと待望していた子ども「佐久考古」が生まれました。生んだ子を育てるのは、私たち親々の責任であります。どうかよい子に育つようお互に努めようではありませんか。

東信地区は、県考古学会東信ブロックに組織され、上小では、上小考古学同好会が以前からあり、会員の研修にいそしみ、佐久地域では昭和38年～43年頃まで、県考古学会佐久支部会として学会活動がとり行われ、南佐久臼田町英田地壙古墳、佐久市泉小学校校庭、佐久市深堀遺跡が組織的に調査され、さらに日本考古学協会洞穴調査の一環として委員樋口昇一氏を中心に、南佐久郡芦内洞窟が調査されました。一方考古学会員の多い東信地区ですからこの他に、大学機関に委託された遺跡調査もございました。佐久市一本郷遺跡、蚊月古墳、高畠遺跡、南佐久郡大深山遺跡、小諸市櫛土遺跡、蛭井沢町入山峰祭祀遺跡、茂沢南石堂遺跡、又個人の学術調査としては永豊光一氏の小諸氷遺跡がありました。遺跡報告の刊行されていない遺跡にすみやかに刊行へ、関係者はそく進し、私たちの学習文献としたいものです。

さて、佐久考古学会も各位の協力によりまして学習の成果もあがり、昭和48年度を迎えることとなりました。何分にも前向きのご協力を願い、新年度は更に研究を深めると共に、会員相互の意志の疎通を叶りより良い会にして歩きたいと存じます。

1. 昭和48年度学習計画

- ① 例会学習会を毎月開催する。主として基礎的研究
- ② 調査実施研究
 - ④ 川上村柏垂旧石器遺跡の調査研究（5月中旬）
 - ⑤ 佐久市野沢平岸野地跡を中心とする圓場整備地域の緊急調査（秋）
- ③ 会報「佐久考古」年2回以上発行したい。
- ④ 会費 年額500円その他必要に応じて徴収。

～題字 佐久市平賀武藤金会員による。～

I. 佐久市根々井餅田遺跡緊急発掘調査概報

餅田遺跡調査団

1. 発掘調査場所 佐久市大字根々井餅田地蔵
2. 調査担当者 長野県考古学会委員 黒岩利雄
3. 調査期間 昭和47年10月22~10月29日
4. 調査面積 約500m²
5. 調査方法 餅田堀向(Ⅲ区)トレンチ法
6. 調査参加者

(顧問) 竹内恒、(監修) 関村謙
(執行長) 黒岩利雄
(監査主任) 土屋英久
(監査員) 長野義信、白倉俊男、渡辺直哉、
式藤英、井上了堂、島山直雄、
三石延雄、森田好治、森田定
勝、高橋良士夫、森井博文、
百瀬治郎、小林義男、田中武
正
(地方協力者) 青木勝、青木義雄、池田
豊、市村伸左男、大川朝人、
大友安人、小林義保、小林志
重

7. 調査委託者 長野県政府議会員
8. 調査受託者 佐久市教育委員会
9. 遺跡解説要綱

第I地区(餅田)、遺跡の検出がみられなかつた。昭和初期に発見されたが、水路の一部で発見された程度である。遺物は陶生式土器片少量、土器碎片数枚。

第II区(餅田堀向)検出遺跡(SD-1、SD-2、SD-3) SD-2が遺構を表わす。

SD-1; E、D、Bトレンチに検出される。南北方向で、
溝幅2m8cm、深さ25cm、溝の覆土は粘土混
り粘土質土層。溝底は砂礫層で凹凸激しく、
下部など、埋土も未だある。出土遺物、後期生
式土器片多量、須磨削り少量、土器片はヨーリン
グ(縦縫)を受けている。

SD-2; Cトレンチ、北東-西南方面、幅2m50cm、深
さ40~55cm、上層一茶色粘土層、下層一茶
褐色砂礫土層。出土遺物、後期生式土器片多量、上
部ほど大きいものを見られ、下層ほど比較的小さ
く、小破片で、崩落はレンズ状堆積をなす(自然
堆積)

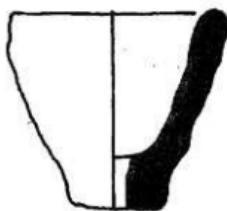
SD-3; A、G、H、Q、I、Rトレンチ、東西方向、湾
曲を描き、東端はBトレンチ内で終る。幅2~3

m、深さ20~60cm、覆土は粘土混り、薄緑色
粘質土層。出土遺物、後期生式土器片多量、一
括(鉢、盆)、小石器手標土器1、土器底、灰領
式鉢、杯等)、石器(四石、瓦器)、充水通宝
(1)、自然遺物、木材片多量、骨片、種子(くるみ
もも)

その他、枕谷の西(8地区)でほかなりの量の後期生式土器
片が褐色土層より発見され、遺跡の存在を考えら
れる。

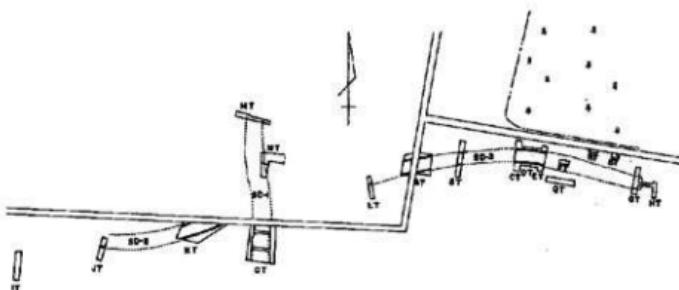
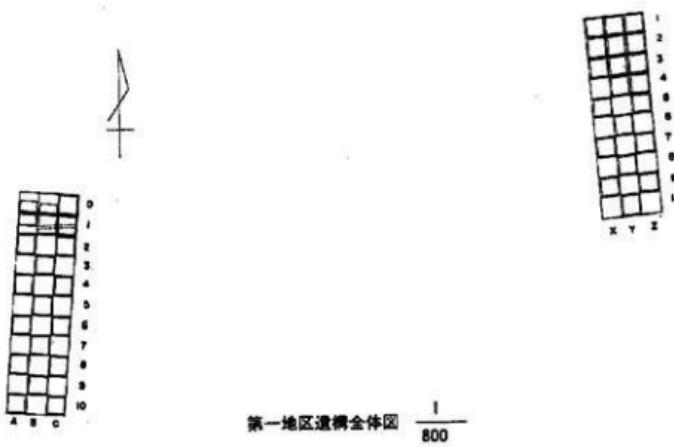
10 調査の結果

- ① 漢代遺構における性別及び性格についての問題点を提起したことは重要である。
- ② 多量の後期生式土器片の出土により、付近に後生時代の大集落の存在が検定できる。
- ③ 後生式遺構中に古式土器器(佐賀式)の存在が見られ、多くの質質な遺物が得られた成果は大きい。
- ④ 時間の制約と人員不足の中において、地元の人たちの協力により、調査がスムーズに行なわれたことを感謝する。



1/1

AT、浦内底下部出土品(小石手標ねこしき)



第二地区遺構全体図

1/800

2. 古墳祭祀の1例

佐久市小田井下前田原古墳群

1.

佐久平野千曲川流域における火山灰の地質「田切り地形」からなり、この地域より遠隔古墳群は著しい分布となっている。隣接する上野方面、あるいは古道（篠山道）より遙かに開拓方面ともと文化的交わりが多いとされ、種々問題点が挙げられてゐる。

昭和47年8月20日～9月30日まで佐久市下前田原古墳等の調査を実施し、このうち2基の古墳に墓葬跡が認められたので紹介する。

佐久平北部の第1地区（註1）には古墳数73基をかぞえ、この地の古墳の調査は、佐久市が国士館大学大川麻衣氏委託して行った昭月古墳（御所古墳未刊）、ただし古墳は1／600にして標高100m（復元）、小諸市吉安古墳（註2）等が知られてゐるにすぎない。佐久平の地形における古墳の構造及び埋葬者の性格を追求する趣旨で調査を示している。

昭月古墳は昭和44年3月調査され、古墳は直径約22m、高さ約4mの円墳で外周壁をめぐらし、中央に大きな石室組みあわせて石の部屋を下前田原古墳の中盤に50～70cm程の深さに河原石を石室の端に積み、外側は石なし、石室の中にはおよそ3人物を置いたもので、石室がガラガラとして破壊されていてが遺物の結果、金銀の金塊、ガラス小玉、土器等が検出された。後円頂部の外側の左右には多数の須弥器、土器等が供物を盛った様なほか、その中に直刀一振が発見された。この古墳は年代的には、7世紀前から8世紀、また9世紀とたつて連続がみされたと考えられ、この古墳での外縁列石は我が国で焼成が極めて少なく、既製した古墳が転用せられたものとの、純然たる地方でみられるから当時の燒成人の技術の一つかである。やがて推定されている。

さて、ここに古墳解説をする上で、墓葬跡の1例と考えられる下前田原古墳を紹介したい。

2.

佐久平における墓葬跡のあり方は、村落の入山地、瓜生坂、面神地、白樺林地が主な所で、道路の立地からもは自然地帯における山岳信仰の特殊性の性格をよく示している。ことに入山時御所古墳の有り五頭郡寄から、和泉町坂越へまでの土器に付出し、瓜生坂での末来勘太守折りが認められた。「古道山道」筋の春日丸跡は坂仰に付けるものではなく、大和朝廷の御所古墳由來する特徴的な意味も含まれるが、この山の名所に集落が置かれ、農耕に從事した古代の村人たちのよりよりの折りの跡もあった。佐久平では、片岡（筑城の大川下、後光和天皇小学校）大字の農地帯に遺跡（註4）、また近年調査を実施した。小道遺跡からも須弥石径1.0cm、高さ11.30mの祭壇が検出されている。さらにこれ等古代の祭祀地、彼等の祭壇へも折りをこめた。（註5）、前述した昭月古墳の遺品のあり方から古墳祭祀でも、古墳祭祀の墓葬跡が、あ

土星長久

るいは呼び下し氏族の追跡記の「まつり」と理解できる。

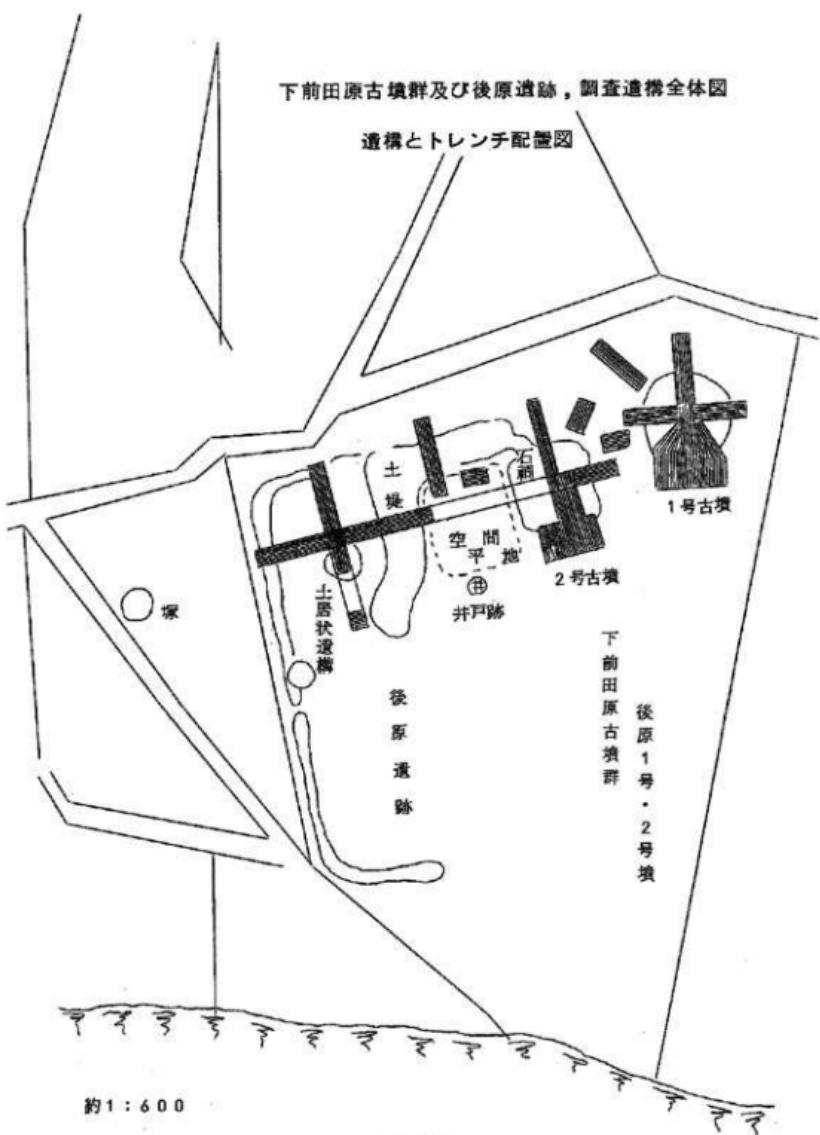
下前田原古墳（註6）は佐久市大字小田井（田代大田井所蔵）に所在する。信越御城跡より西南3kmに位置する。通称下前田原（れいだばら）と言い、水田地帯の北側、信越御城の北側の田切り地形に立地している。遺跡は、土原遺跡、信印原9基、古墳5基（後久保に3基）からなり、昭月古墳等と合わせ古墳群の1支群として、下前田原古墳群として改めて扱った。この地は、信越御城跡高750mの山林地帯に存在する。

浅間山南麓の佐久平北東部は、火山灰地帯に位置し、田切り地形が断崖をなし、後原古墳1～2号墳及び般舟古墳はこの田切り台地上に位置し、後原1～3号墳は少し低く、平地となっているが、この田切り側の田舎の水田耕作は早くから水田と開けたようである。ことに般舟古墳は、佐久平古墳群の時期区分と比べており、いわば、古墳時代の住んでいた頃のものといえる。他の斜面開拓すれば、浅間山麓、馬鹿池口5、塩原4、3、西面6では「馬火穴」「かみ穴」の「よかみ」湯川口の1本木の「金鏡」の3つが從来知られていて、またこの前田原の東方に前田原遺跡、東方に小田井出土、小田井に東に道延寺跡が位置し、古箆山山麓上でもあり、上代から早く開かれて、余糞地、堆肥地が認められ、大川源、中岱に下って前田原遺跡に在るなど佐久平盆地では早くから開けた地域といえる。付近の地形は、俗に古屋敷、前田原（げんたいやしき）、西面遺跡と称され、たなびきと老婆の伝説等で、伝えられている。また古墳群の北側に古墳地、下前田原から平原へ通じた古道である（註7）。

古墳2基、土原遺跡、信印原とそれぞれA・B・C・Dを入力遺跡検索を行なった結果次の第1回、第1表のとおりである。

第1号墳は田切りにより南北割離化せず、南側に立地しややオバカが開拓地の自然地形である。現段丘南北径16.2m、東西径13.5mの円錐地盤高1.75mを計り、略残存の墳丘といえるが、南側に盗掘を受けた跡がみられる。墳頂の天井石2枚が露出していた。発掘古墳は東西、南北化主体部附近を中心とし、B・T・L・N・Sを設定し検出していった。横穴式石室は、傾斜地の地山を利用し、石室主部部を削平し構築されている。

内部構造は、横穴式石室で前に開口し、片袖式（入口より右側に袖がある）となり、天井石の笠室及び奥壁内に打ちこみ開出した。奥門は、2段階で入口両側には、長さ2.8mの列石を左右に構築していた。玄室幅1.3m～1.2m、東壁1.6m、西6m、最大幅1.65m、奥壁幅1.3m～1.2m、東壁1.6m、西壁1.2m、高さ0.98m（未より）を計る。奥壁に2段の円形サークルが天井にどめして検出され、さわやかで美しい周溝（幅5m）が検出された。前面部分からは、墓頭に折り、用いられたであろう土器、須弥器片が一面に見受けられ、石室から出土遺物は検出されなかつた。



第1表 下前田原古墳群出土遺物と遺品

時代	遺構名	型式	主要遺物
古墳前期	1号墳(円墳)	純木棺	土器類灰形、高柄 漆器、かめ、壺 いがれも破片(頭部 より) 鉄鋸片 馬の骨
	高臺式、片袖式 石室プラン	近世以降?	
同上	墳丘上及び周辺部 附近の橋立による 積石下より		
	2号墳(円墳) 高臺式、両袖式三 輪輪郭張りプラン	純木棺	須恵器形、壺 土器類高、他 人骨 9体分内外、直刀、 鉄鏡、切子玉、玉玉、 ガラス玉
中世以降	開口した石室を利用 して石室内上部にC 軸石の横石 2カ所 あり	中世以降	墳丘上より土器片、瓦 水道管
	土居式遺構	中世以降	土居式窓より土器類 土器、瓦上焼片出土
中世以降及び 近世の頃	塚	1・3塚?	土器片

第2号墳は、第1号墳から西へ3m離れ、複数されたもので同様な地盤を利用して構築されている。たゞ墳丘の外折りの時代の構築法を受けていたであろうか、墳丘は方形状をしており、北側斜面は、西側に存在する土居式窓と接しているのが観察される。墳頂の西側には、近世末の複数柱を含めた石祠が設置され、さらに頂上2段で平滑されている。墳頂東西1.2m、南北1.2.5m、墳頂高1.2mを計る。内部構造は、横石式石室で、南北開口し、両袖式玄室で、四輪轍が三輪輪郭張りをともるものであろうが、天井石は全くなく、すでにそのかけられた後、再び風化としてうまれて利用されたものであろう。玄門内部高さ0.9m、幅0.73m、まぐさ石、かまち石が残る。複数部も立石がくずされた他、南部石が残って、土器類、須恵器片が散在する。玄門入口幅1.75m、長さ3.05m、最大幅2.0m、奥幅1.3m、奥高さ1.1~1.4mを計る。墳丘は、物語では1号墳とならざる円錐形ではなく、わずか複数個の小窓(縦石)のからられる。尚且つ丘の東側には径5.5×5.7mの柱穴もししくは豪族ビットが発見された。そこからは、中世土器片が発見されている。石室上部はおそらく崩壊してて、中世頃この石室を利用したが、上部に横石による横石が2カ所みられてい。石室からも土居式窓上1.0~2.00mの高さより人骨9体分が物出されている。複数部立石が残り、土器類を散在させ、この上より切子玉、ガラス小玉等が発見されている。前面部は幅6×1.8mの美方形形状がみられる。須恵器が5つ計されたのであるうう遺物が多く散在していた。

3.

調査の結果2基共に同一時期であり、しかも1号墳では複数箇所は、該月古墳の構造に似せて外側に石室附近を外周せず墓道と埋面を幅6.8m、2段の石積をなし、それより0.8m離れた位置に0.43×0.42mの範囲で整石無地があり、その範囲は土器類、須恵器が破砕され埋設されていた。これに対し2号墳でも頭部部分のみが残り、須恵器は土器片で、須恵器は幅1.1m、長さ5.9mの美方形形状で、こぶし大の整石及び洋瓦石を外石柱となし、祭壇となっていた。遺物は多量の土器類、須恵器が1号墳跡に抜き取られた状態で発見され、破片は東側や西側、奥側に偏在する。中部、東側と3グル1ノリの須恵器の分布を示し、東及び西側の破片は墳頂上5~8cm上の無色褐色土層中に埋設されて検出されている。

調査した遺物は2号出土のもので、その一部で、1の複数土器は前述中央部、2~6の小形器は前述東部窓跡からひとまとめになりて検出され、7の須恵器は前述西側窓跡から出土せず、1号墳跡部上位地2~7は5~8cm高い、複数土器に埋設され出土した。器種の形態は2表に示したが、土器類は高胡組に、2~6の外付黑色施釉の小形器は、平安時中期~末期に算下し、7の須恵器と同じであろう。

1号墳では、ABTのほか、全面焼行を清掃したが、墳丘表面及び周囲では火炎越及び植物が検出されなく、青行からも同様であった。古墳での地盤は大きく3層に、つまり、墳丘焼却前、焼却後、焼却後のように見え、焼却後からあって中世~近世に亘り、同占拠地、墳丘以前は2号墳下では全く検出されなかつたが、墓跡の祭壇に用いられた遺物の場合は土居式窓上位5~10cmあたり、焼却後さらにはその北側壁でくづきつつ高麗瓦が取り扱われた様である。(註8)

1・2号墳の構造はほとんど同時実施されたと思し、墳丘の接する部分も墳丘地形地形で約1.0m離れ、1号墳に周囲が構築されたのに対し、2号墳からは検出されず、距離的にも直線に沿つられて同一時期の構築とすべきであろう。

從つて、須恵器に対する祭壇は、墓前の祭壇と場といえるのではあるまい。そしてその年代は既述した遺物でも示されたが、平安時代中期まで行われたものではあるまいか。

古墳が祭壇の対象となることはすでに先述諸説の説くところであるが、しかしその実態は必ずしも把握されておらず、種々の説がある上で形態があり、墳丘がすべてを祭壇として構築し、埋葬の場をこれに接して構築しているのが監査をみていくが(註9) 乾谷古墳、下前田原1・2号墳の場合、頭部を祭祀の場となし、検出された遺物から、祭祀復了後その祭壇を廃棄した場所と見え、構築及び構築復旧がかつて、祭壇がなされたケースといえよう。

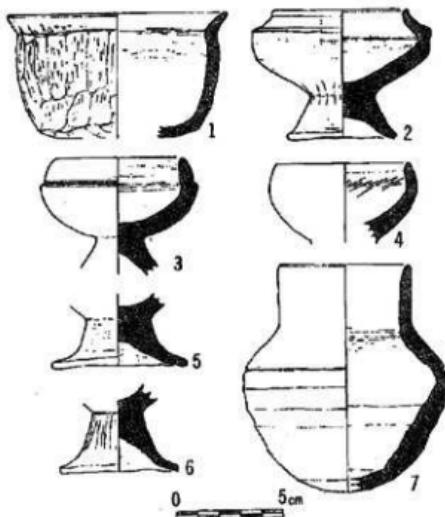
今更の下前田原古墳では、これまで種々の考察説を整理し、改めて多角的調査説と討議し、第2次発掘調査をなし、正式説文に望みたいと考えている。佐久平では古墳調査が少なく、

さらに古墳部墓室の一例であるので、先ずそのご教示を賜りたく紹介したい。尚下前田原古墳跡は佐久市で史跡公園として保存されるとのことである。

第2表

番号	出土位置	口径	器高	底径	胎土	成形	焼成・色調	備考
1	2号墳頂部中央 部	10.3	5.9	—	白粘土 含む 皮質	外面輪削り上まで、底部 筋止輪削り 上部ヨコヘラミガキ 下部タチミガキ	外、褐色	
2	2号墳頂部東側	6.4	5.9	5.1	”	上部ヨコヘラミガキ	外、茶褐色	半欠
3	”	5.9	—	—	”	上部ヨコヘラミガキ	外、同上	”
4	”	5.2	—	—	”	”	”	破片
5	”	—	—	6.3	—	下部ヨコヘラミガキ 底部輪削り	黒褐色	”
6	”	—	—	5.5	皮質 細石粒 多含	”	”	半欠
7	2号墳頂部西側	6.1	10.6	—	—	内外なじ上	淺灰色	”

第二図 後原二号墳頂部出土土器実測図



- 註 1 土屋光久「佐久市久平の後醍醐御跡について」『信濃』22号5
- 註 2 与良清・土屋長久「小諸市と良序氏古墳群の概況」『長野県考古学会誌』第1・4号。
- 註 3 同古墳の著者も参加したが、佐久市文化振興会員竹内恒氏の御教示による。
- 註 4 高橋平治・土屋長久「佐久盆地における奈良朝跡について」『長野県考古学会誌』第1・3号。
- 註 5 福山耕穀「祭と葬の文化—石碑調査報告を中心として—」『日本文化研究別冊』第2・9輯。宮崎治郎「神祇史論」神社本庁神事研究所。
- 註 6 佐久市被窓委員会「佐久市大字小田井下前田原古墳群等発掘調査報告」昭和47年。
- 註 7 一志樹樹「時代山田の古史を探る」御代田振興委員会昭和28年。
- 註 8 永嶋光一・島原健「中岳山系」神道考古学講座第2巻所収
金井道道・望月政治「望月氏の歴史と詩」日本出版貿易(株)、昭和44年。与良清先生の御教示によれば平安時代中期でなければ、佐久平に栄えた古氏族、藤野氏系の定着は当然考慮してもよいといわれる。
- 註 9 及木謙祥「信州和田古墳群第1次調査報告」信州考古学第2号、昭和44年。
吉岡勝哉「古墳時代における奈良出土遺物」『石川県考古学研究会誌』第1・4号。

3. 佐久市高畠遺跡緊急発掘調査概報

1. 調査実行者 東信土地收典美野佐久出張所
2. 調査実行者 佐久市政府委員会
3. 調査場所 佐久市本郷町高畠
4. 調査日程 昭和44年11月27日～12月9日
5. 調査執筆者 団長 岩崎幸也
副主幹 竹内 健
調査員 鳥山、渡辺、藤沢、黒岩、井出、
花岡
及補助員 幸間・他8名
6. 調査方法 2m幅のトレンチ法と5m×5mを単位とするグリッド法併用。
- トレンチ 東より2.0m間隔で南北に3.0mのものをA-B-C-D-E-F列まで設定したが出追跡の結果、途中からグリッド法に変更。西より5m×5mを単位とするグリッド設定。
南北にイ、ロ、シ、ハ、列
東西に1、2、3、4列
7. 調査面積 9.25m²
8. 調査の概要
- (1) 掘出遺構 A 約4.0cmの溝形の石組遺構がH字形に東西長約2.0m、短軸約8mが発見。石組の壁を取り除くと、疊さず排水溝に上木の如きの引抜木が横倒し埋められていた。
- B 塗刷跡? 15? 中柱及びそれに隣接する塗刷跡と見られ、ほとんどが石組で、調査などは全く検出されなかつた。
- 川口若狭舟形舟形と見える所もあるが、一応塗刷跡と見ておくことにした。
- (2) 主な出土遺物
- ① 磨文土器片 1片
② 扇形土器片 3片
③ 土器破片、米切皿片 30片
黒色土器片 etc. 若干
④ 鉄器類、折、高木高台、薬片 etc. 数百片
⑤ 陶器片 数片
⑥ その他、木炭、少量
9. 総括
- (1) この地盤は田園聚落では、須恵器も青磁器のある前期に入れる土器から土解説まで、しばらく探せばだらまちも手元に一升袋たるほど拾えるためにこの遺跡所を発掘したのだが、住居跡は見当たくなかった。
- この点について考えると、街や里、農村のため、道路の脇が選ばれてしまつたのではなかろうか。
- (2) 掘出土器類からは、平安時代中期ごろからのものがかなりあるが、遺構が検出されないので、この頃の遺構とは決定できない。
- (3) 石組遺構は當時中作へた場合より排水の工作法に近いのか?
(土木の遺構と其の調査による時代を明確に差し研究中。)
- (4) 出土の青磁器の時代判定は行なわなかった。
- (5) 用ひられた千曲川系のもののが少くない。
- (6) 塗刷跡?と思われる点で、川の中央の如く溝跡が集まっているが、発掘した上から調べると、ほとんどが土間に大きな孔があり、撒か込んでいたと想はせらわれると見られる点から人工的遺構と考えられる。
- (7) 平安中期頃、千曲川、片川が何度も人間をして暴れただと記される。
- (8) 塚名前に上古子などある点から、平安・鎌倉・幕藩ごろに隨糸のあるものが何時かではなかろうか。
- (9) その他

- イ 年末で寒さは強かったが、天候に恵まれてかなり順調の良い調査ができた。
- 土壌がよく発掘の効力を發揮した。

4. 北佐久郡御代田町下原古墳の調査について

土屋 長久

町の耕作地結合農業基盤工事に伴い、馬鹿口、下原を経て北向町の高瀬川左岸工事の一環として行なわれることになった。下原地盤の昭和5年に調査（八幡一郎・当時の東大講師）をもつて古墳五基があり、国道1号線の開通により、3基が消滅し、今日2基のみが現存している。（昭和5年7月10～7月20）、八幡一郎先生によって、石多く填土であり、一時は帰化人の墓と称される種石形跡の古墳であるまいかと称され、佐久地方、牧場、帰化人の古代史上大切な古墳とされていた。

旧大字村、馬鹿口の下の原の馬糞山の北の堤壠を現存し、内2基（下の原5号墳、第2号墳）は堤壠に入れて3面壁となされ、僅かに石室壁の残骸化したもののが、他の3基は、填土を残す。後者2基、台地斜面沿うで範囲内に一直線に並び、前轍にそれより一段低く平行して東西方向に並ぶ。後者の填土は、傾斜地に残る故か土石が混入し、それに混じた碎骨が残っているものである。3基の埴輪のもの（同4号墳）は過去にすでに盗掘せられ、中央のもの（同2号墳）は昭和14年春等の手で発見し、西側のもの（同2号墳）はまだ残っている。下原第3号墳は全廻するには至らなかったが、奥部近く、埴輪から、文部省に贈り込んだところ、室内に調査を施す土石が剥落していた。これを見ると封土が石室の壁の範囲から剥落したであろう。これを徐々に除く内に馬、犬の骨及び、鶴来鏡、絵罫元鏡等が出土した。これ等は鏡の底面から、或は上位に土中に存在したものであるから、此の填土と直接関係があるものではなく、後回に入るものと解される。

從って後回の砂利層と石室の一部が剥離してたと見なされる。

5. 牧史料にみる施設と性格

- ハ ブルドーザによる表面削平の効果をあげることができた。
- ニ 調査の効率化がよく調査を円滑に行なうことができた。

さらに、振り下ろして直角に進する頃、二体の人骨を発見した。共に頭部を東側に近く置き、一は室の中央に、他はその右側に並び横たわっていた。人骨は腐敗甚だしく、頭骨の顎も認められなかつた。

傷つけられた人骨の複数個に鉄片を認めた。

以上の結果から後世へ空襲等遭ったものと認めて、空襲時に及ぶことなく、発見を中止したのであるが、中軸線は南北定位に示し、両方で開口スリットを判断した。

八幡一郎「馬糞山古墳」「北佐久郡の考古学的研究」

172～173P 昭和9年

本古墳群と近いものとしてめがね塚、あるいは日向代田小田井西面の下原田古墳群がひらめく。そのうち、下原田古墳群のうち、後原1・2号墳、吹屋原の埴輪等が確認され、とくに後原1、2号墳からの石室主室部のうち2号墳から、埴輪品が伴なつたし、人骨が9個以上が検出され、下原3号墳とやむむ状況を示していた。1号墳から馬の骨も検出された事実と共に、後世うめどされ、何等かで使用された生活面が見らか注目される。

土屋 長久

律令による牧が廢された後、國ごとであろう諸侯牧等、延喜式兵部省に見え、時代が下りて治長の立憲に伴い、坐駕大生徒制が分布がみえてくる。

數名の内で、いがも竹の実木、放牧場の施設を立てことによづかしい。東国4カ国（伊豆、武藏、上野、甲斐）は御牧として、牧監、別当、牧司を任じ、八世纪にかけて经营にあたらしめた。国司牧監、別当と共に毎年9月10日を期日として牧で、跡に焼印をなし、周囲を戒してともに署名する。仕事ももつて御馬廻のことにある。從って、古御者や後御の御馬廻が、御馬、寺社で草原地や牧場を利用して放牧されるものと異なり、跡に4歳以上で用いられたものを放牧し、これを1か年御馬もしくは御馬

上代日本での馬牛飼養の歴史は、先述新田・古河出上の御牧場（馬具、地盤）、奈良皇子の土庫等に例からても、五、六世纪頃に馬牛飼養があつたものであらう。朝鮮半島、新羅等からの貢馬、駒馬からも、車馬としての用途としてもその需要が大きかった。大化改新時あるいは奈良ことに車馬及び官道などとの駆使（平均して駆使5～7足）等からも、その馬牛飼養は大きな数となり、上位に於て馬牛が兵器として、あるいは征伐の資糧の供給用馬など、当時の馬牛飼養は、農業の次ぐ生活史があつたものであろう。

可視範囲をされた河原県半田出陣などの住民由来馬牛大骨がみられ、当時牧的な生活がうかがわれる。

なむち修羅の場合は倒産してよく調査す。その普通いう調査は、その春秋及び入京期は各時期で、異っていた。

いわばとしても八世紀中葉から五代の發展された牧地と東國部の一端として、対ニソイ的、開拓が進んでいたといふ様である。ことに高麗國物2、真馬の下限として、建武年間まで騎兵が行ひたる牧場であることは明確である。

牛馬放牧したことには源王が御用臣が石頭跡を見た食首を都道府へかえた事、安南天皇・元人通に詔して都城の大馬、蠻馬並に牛を放つなど、文武天皇四年三月諸道として各地を定め牛馬を放つなど、即ちに全國に設置されたものと思ふ。

上の件の様子は、ハマヤと呼び、臺灣の意で、畜生と同く放すむち家畜の號であり、園とは藩をめぐらした號である。從って牧とは一地の土地を区切り、藩を構えた場所であるといつてよい。そして藩すむち馬を入れておく廻りのかやのことを当番マセと呼び、馬廻は、放牧の字をあてた。それが普通の用語である。万葉集卷四「吉詩の歌ふる馬廻りしめ縄、拂ひこころに縄もなし」巻十二に「有・越しに寄せぬのむれどなほし遠ふらしくむかねつも」。日本書紀卷二五孝明天ノ「結御行あが飼ふ馬が」

6. 土居状遺構より検出されたる土器に関する

青木幸雄

本資料は、8月27日土居状遺構Aトレンジ8より出土した土器片を云う。土器片は口部から底部まで合計9片で器形の約4/1の復原が予想される。細部は一部断続的で形状を呈していると思われるが、しかしながら他に実物に乏しく、より深い研究が必要である事を指摘する次第である。

① 形態

口部はほぼ水平面に直し、口縁部が短く外反し、同内縫の2段さ30度程の突出部舌手が貼り付けられており把手間近部に指輪による印痕が見られる。底部から底部下半にかけて2段の異なるかなめ筋がある。底盤は強力な形態をとり高脚の様台の如く未完成状態をなしており左右に各一窓が設けてある。

② 文様

口縁部の突起による割目を行はる隙間に施文してあり、口縁部から底部に亘る線上に三角形を複数具した刺突文が一列されている。以下底盤まで全くの無文である。

③ 製作方法

器物が外にヨクロ痕が残っており、明らかにヨクロ製法による輪郭方式を施している。外輪は輪郭全面ではなく箇所工具によるヨコナを施して輪郭をととのえている。

④ 器厚

口縁部 約1.0mm 口縁部 約7mm 底盤 約1.4mm 底盤 約1.4mm 底部 約7~8mm

⑤ 後記

上記の如き土器を基して何と呼称したら良いであろうか。従来の研究ならでは内耳土器の複形うんぬんと冠されてしま

き川せざあが飼ふ馬を人見つかせ」とみえ、や後の文献では貞觀18年のことと指すといつており、また格をめぐらす以前に、年貞觀18年(654)漢をも引いたことが見える。櫛状のことをあるから、找付立て造った馬廻をさし、馬はねそらく格の外側に振りめぐらした通りようを意味するものであろう。そして格及びは牧場の造出を停止する同時に、牧場を外部の危機から保護する設備であろう。

貞觀十八年春平山信成御馬廻院下したもので、同書中、御馬二千百七十四匹を記録し、当時植林の動物が十六枚であったので、平均して一枚二百匹近くが放牧されていたようである。牧場設定の標準は全く不明であるが、信成では格の範囲から放牧であろうが、甲斐國では「草田種馬馬廻ク多ク、紫飼御ゴトニマサリ」、紫飼御主生体であったらしく、上野では「御馬數、御馬御正、紫飼廿疋、など三つの比率で馬廻と紫飼を行かねいたことを知る。

馬は「厚さ三分、長さ六尺、五寸の板を以てなす。」当時の馬は板張りの馬廻で、いた事を見る。

まあどううが、本資料均らかに内耳土器の相違性をとは相異するものであらう。大正年間、故島屋昌蔵がカラット落合出土の口唇部直線の二つの耳を付した所謂内耳土器も又問題を引きかかれてあらう。特に内耳土器の確認に際して見出され得られないのである。と同時に内耳土器に関する初期研究時代以来の区別ならば、まず最初に萬葉文中期加利利Bより発見され(萬葉)土解の萬葉、日分別に後続する土解の形態変化していると思われる。いわばにしてもその変遷を経る中世以来であるが、近年までマメを煮る用語「ホクロク」としてその形態をとどめていたのである。

この形態は遺物としてある歴史遺産の中で生活面における文化(土解)として存続してきたのである。その分布は遅れて本州で、中州、関東地方を中心として広範囲に分布している。そして又、日本列島の北緯に位置する北海道において、縄文文化期に出現している。同時に沖縄本島を中心とする沖縄地方に分布する外耳土器及び平安時代における鉢形の外耳器との類似的、形態的比較研究が必要であろう。もちろんこれ等の比較研究が為には、その時間的、空間的変遷を最大限考慮に入れなければならない事は云うまでもない。なまに足ではあるが、「木造船屋」において木舟艤舟が使用したと伝わっている外耳器が2点展示されているのを見出しがた。明かりに高島町出土内耳土器とその形態を一冊しているのである。この名前が有る内耳土器と外耳土器の概念がありにも不明瞭なのが生じた必然の頃りに想起するであろ

う。

今後の問題點

- ① 内耳、外耳土器の標準的、形態的特徴

② 内耳土器と伴出する遺物からの推定

③ 内耳土器の初頭と消滅の時期

④ 水系より注視する内耳、外耳土器の分布図

7. 信濃国塩野牧遺跡

土屋長久

塩野牧は越後守御の佐久三牧のひとつである。

牧領は当時の古文書ではとてつに佐世主城、紫鷹山城、駒ヶ集めの駒ヶ城、さらに朝延より承認された牧領主城があつた。その地名は明らかでないが、牧留、古牧、横口（今日の横口）、横原の地名があり、また横原宿としてみる石碑に駒ヶ石、八幡に牧場の馬の守護神として駒ヶ神社があり、その駒ヶ守護地であったことわかる。そして明治初年貢馬を乞ひたのは正平年間（130世紀）に信濃守がいえてくる。信濃守は朝國最大とされ、ことに望月牧（むかし北朝の時代まで御用馬として貢馬を乞ひておらず御用馬の年貢奉事として行なわれたことはあまりにも有名である）。牧領は西野町の西へ入ると佐久寺町が後世の佐野一族があり、それぞれ一族は地名を冠して名乗り、塩野牧主塩野氏がいえてきて今日御田代村近に人々が居住するようにならぬものとのゆきわんで、平安討伐末より鎌

金時代までの歴史の軍馬は東京の牧場の馬が多く居、いかん、その主要地は信濃であつた。當時の軍馬は佐久の信濃一帯にいた事はいうまでもない。そしてその信濃人、牧人が残した墓が高麗式の古ふんを残したオカで、八幡、西園寺、圓應院に多く分布してつくられた。塩野町の東西は、蛇尾川、開川の自然の境界をなす。けやく谷の高原台地で古昔は耕作の方法で分けられた地名であろうし、馬鹿川は川（うませ）つまり牧場のさくで構成のこととこことり跡を出させた木戸口であろう。今の荒町付近を猪俣村と呼称もされ、この付近にも猪俣があつたのか不明であるが、跡地や口も存したと思われる。

8. 「文様」と題して

青木幸男

今日、私達の周囲には文様を指す、無限大の文様が彼らとともに多種多様に富んだ構造を呈している。これは単に現在のみではなく、人類歴史上において一貫性の系統的構造である。

時代と共に文様も又、形を複数品を授えて変遷しながら現在に至ったのである。本項では、一応「土器」に施された文様より考察してみたい。常日御不可識讀でならないければ何故土器の器腹面に文様を施ししなければならぬのかであろうか？その必要性及びその必然性は精神的構造を成しているものが果して何なのであろうか？確かに原則において土器の文様は器腹の装飾を防衛する為、或いは土器面を堅くする為に施文されたのであろう。この夢の精神的構造についてのが、純文様や早期川上土器土器である。所謂純粋な精神的構造における可塑性としてのボシリタリキヤリヤの意義の上に立脚したものであつたのだろう。しかしながら織文時代初期以降、縄文朝鮮を通じて、既に織文や秦漢文化から徐々にかけて中岳山脈にその影響を及めた邊境文化——その文様のモチーフは、多種多様化を帶びている。これは又秦漢文化土器文化に没落し始めた弥生式土器文化の復興期から後醍醐天皇まで一環として土器の表面に文様を施してくるのが普通であろうか？しかも地域的個性下における特徴性と全國域を跨ぐ普遍的な現象と逆行しながら、或いは形成しながらその生命線を有能させるのである。

元来、人間であるが故にむしろ美意識的感覚そのものがコンスタンツトな文様概念を実現可能することが不可能であったなのだろうか？當時の文化担っていた人々の精神的・精神的なリバーションとして文様概念がどううか。

いずれにしても、計り知れない精神的、空間的尺度の中で共通化的な現象、潜伏現象も一つのだろう。しかしながら土器の形態、文様等、土器形式の藝術学的面面は意義深く、細分と大別がある程度業大成されている。

今後、「土器」の範囲で施された文様について、当時の文化の発展部まで深く掘り下さねば解明はされ得ないだろう。

当時の人々の精神的侧面からその問題が不可決であると思われる。

9. 平原道

原田道夫

下前田古墳群先頭墳を平原へ通る道は、周辺の歴史を探る上に重要である。この地点に、鐵道開拓のものでないかと推定される土手造りが施設されたことは興味深い。御影新田名の通り部屋の形状は、新しく、江戸時代に入ってきたら改修であるから、昔は平原から前田原へはこの道が唯一の便道であることは想像できる。このあたりの範囲が多少残っている御影の壁に至っても、平原と前田原の境界は深く、一矢の歴史書の「前田村の古史を探る」をみても、御影社文書のなかにその一端が現れる。この道を通じての平野城と小田井城の關係や、平原全盛が引条長政の葬りに終ったと

いう。天正16年における小田井城の位置はどうだったのだろう、など。また式田草履城以前はこの地帯も上氏の勢力圏であったのだから、上田を経ておそらく高岡城へも結びた道でもあるのだろう。現状もよく。

だからこの土路がいたとえ、最初は牧場の通路として機能されたものであつても、隣接する前田原にかけて、戰略的な意図をもつて利用された時期もあったのではないかと、想像が果てない。

(注) 平原より前田原へ移った氏族があった。

10. 佐久市岩村田北西久保古墳について

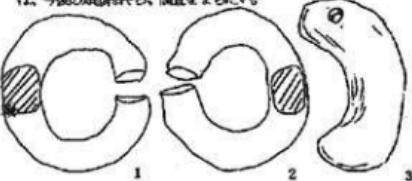
井上行雄

佐久市字北西久保は一本森古墳の西方約15mにして渕川の北岸に位置している。弥生、土師、須恵の土器は一本森と同じ様な分布を示し、特に土鏡文式土器片も発見される。

前田用水へたてて、西に長々井地区に接している。近くに堀切、我妻山、東原等などの古跡が、渕川北岸に位置している。又この渕川の南、長々井字下山道筋にも古墳が散在される。附隨の古墳、戰國開拓の跡、破壊したが、中より瓦刀、勾玉等が出土した。

岩村田方面さと一本森古墳との中間に推出古墳(後円形)。砂利丘で立派な山頂台地(礫が残るのみ)、後側中学校前に田園古墳(後円形)、その西に、古墳として発表されている古墳1基は、今度は築成されたが、これは古墳ではなく、戦國開拓の跡行行為である。この戦国開拓としては、岩村田古墳地にかなり影響される。

古墳1基が存在したが、現在は1基のみ丘陵上の中央部地にあり、現在現地の割合わきに、青銅石2ヶ露出し、主体部と思われる部分には土器の破片も散在しており、馬の足跡にも付かなかった。財物、改修中に金環2、勾玉、鉄製品、人骨等が露出した。1~2は金環、側面金張り型、3は、メノク、橙々色の勾玉、等は、頭部金張りのスプーン状製品、直刀片であろう。スプーン型製品は古墳時代のものと想われるが、佐久平では稀なもの。大分地区では「鉄そり」品の出土もあり、本品については、今後の研究課題や、調査を待ちたい。



11. 信濃の牧場

森泉好治

貴賤の中にいると又何處の貴賤の事が見えてくる。弘化二十四年八月の文に「武藏郡に辛し、信濃郡の良馬を見そなえす。」と記載以下御輿以上に各一匹與ふ。」とあるから、余程以前から甲斐、信濃の馬は、朝廷に御輿の定期がある。而して天皇に入れる事になっていたらしい。嘉慶七年十二月「信濃國」駁使の牧馬風、元八月廿九日にこれを貢す。今十五日に近づく云々とあるが、御輿の馬とは、吉田牧場と云う程の意味に現れる。又佐久の信濃の馬はその十五日から各が生れたとの説もある。御輿の貴賤は、葉月何足とされたあたりから見

ると望月の牧のみがその駁使の牧場でないにしても、この頃に於いて貢を充當されたことだけは事実である。その後はその翌年の八月を御輿の定日として朝貢された事も諸説に見える所である。しかも天皇が御輿の貴賤を御輿に贈られたのが御輿であった。嘉慶十三年官守に由比の貢上等に関する成績が出ていて。即ち「信濃、上野、伊豆等、朝貢に邁す多く公私を用ひ御輿に附なり。運送是れ難し。望らくは御輿非に准じて御輿に利害せらむことなど、御輿に押れて牧人等の通行が行なわれた。矢張り人畜にされば自かし難い事に免れられない。牧場の御輿と共に同人等が駁使足した自

然の勢で前に述べたとおり内閣十三年官符を見。如何に馬の役人が貴賤の勢をかり國司や都司を侮ったかを知ると同時に又、時如何に牧場の盛大であったかを推察し得る。此の当時の様の有様や牧場敷地は嘉慶十八年一月の官符において知事ができる。「貴賤の富貴を得て得するる財物の格、或いは火のため焼け損じ、或いは盜賊取。ここにおいて貴賤の務め會て國庫の益なし。今在る財物牧の利潤二千二百七十四石、格外に財貨して審査に留まらず、唯民衆を告ぐるのみならず兼て又亡失を教す。國司領ら格により財貨し損失せしめざべし。」と云っている。

12. 古屋敷伝承

発掘を見に来ていた。西園敷部屋の木内今朝義氏の話である。このあたりは昔は同家の所用であつて、第2号塚の上の石祠は尾瀬御用材であった。そしてある時期にここへ分家が出ていたのであつたが、御用材の跡に悩まされて本郷落へ移り住んだ。西園敷で一番下はずれの木内和高氏の家で、もとの血脉が御用材地に絶えてしまつて金持氏より入へ居間を教いだと云うが、後御附近を古屋敷と俗に呼ぶのは、かゝってこの歴史があつたからだとか……。

土居の酒場から古墳群にかけての間に木内一族の墓地があるが、その一角に、「宝正元年(昭和10年) 文政四年」(雅大僧)

嘉慶十八年信濃の官牧に馬が二千二百七十四頭居た事を知るこができる。又中村名月の日を以て貴賤せしめられた事からが一種説を得るのであるが、光孝天皇の御生の質料の日には「馬頭鏡に御して信濃の貢物を閲覧し文人を召して詩を賦せしめ愚ふ馬口に置くもの三十三人ある。信濃の駒々ここに致して御定の詩題となる名物となつたのである。

古今 連坂の隕石清水に影見えて
けふややらし望月の駒 (貞之)
【古屋敷】 塙牧社 本村より北大井に亘る一帯の地。馬頭
口は本牧の上野にて下橋より北代田高町なりと云う。

原田道夫

鎌倉大金寺位 安政四年等の石碑を見られるのは、「印塚」が古屋敷に住んでいたと、いまも伝える人のある事に符合しようか。そしてこれは又、この古墳も江戸時代に入つてからの信向山の十三塚だらうとの推定とも一致するだが……。

古井戸が残っているのもここに墨跡があったからであつて、井戸の水は古墳時代などかなり放りこまれたものだと云う。

さて、それにしてこの古墳群は、時代が対して古墳造成されるということから、古墳や、土壇が掘削された跡が、歴史とはこんなものだろうか。

13. 南佐久郡白田町入沢古墳について

三石延雄

入沢古墳群は白田町入沢(日南町入沢)にあり、その数は3基と云われている。そのほとんどが側面に面した上腹、或いは上腹に位置している。そして入沢より上には、古墳の数が稀少である。この様な事から、入沢古墳群は佐久の古墳群で、最も古墳として位置しており、所謂佐久における古墳の演進と云っても決して過言ではないであろう。のも古墳文化が伊那より千曲川水系を越えて進ったとすれば、入沢古墳群は、一番新しい様相を呈している古墳群であるだろう。しかしながらそのほとんどが破壊されてしまつており、原型を現存させている古墳は、基足りとも存しないのである。

南佐久郡にある古墳の調査を見て見れば……(3基の内)

- ① 長方形の玄室のある 1基
- ② 三昧輪形玄室のみ残る 1基
- ③ 片袖形玄室のみ残る 1基
- ④ その他何れにも残る 2基 (内部主導型)

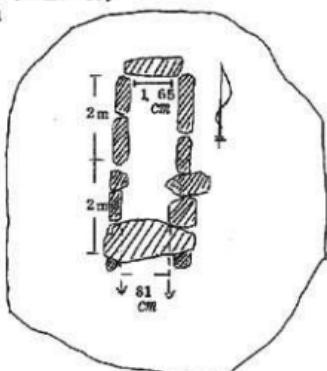
となっている。出土遺物としては、直刀、鉄鎧、矢玉等と記されている。そして民間伝承として、こんな話もある。入沢の日向家の奥庭に位置する古墳で昔から石を動かすたりがると云い伝えられていた。「ある時、若い人達が、この家の石を搬にしようよと運び出したらところ、併間の者がケガをしたり鼻血を出したりしたのである。若い人達がいたり恐れて又元

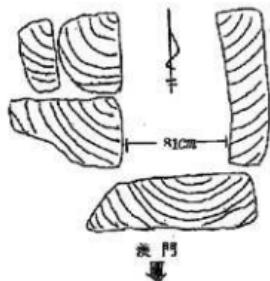
の位置に戻したと云う。その後、この壁の石に手を触れる事は居なくなつたと云う。」

白田町の古墳に関する伝承に似ていると思ひ書いてみたのである。

【西の壁第6号墳】

1





[図一]

第6号玄空構造図

[図一-2]

奥壁及び側壁上面図

(追記)

『後門の石と表道、玄室の石と塙丘円塔部のみわずかに残存する』

14. 信濃の牧場について



らかであるだけに、信濃に關し布告類文書の今日伝えられているものも、殆どこの牧場に掲載するものばかりであるが、その最も古いのは延暦 16 年（797）6 月 7 日の大政官符「信濃國田畠役に公翁田を賜う可乎」と云うのであって、つまり信濃の長官が初めて年俸下限の恩典に附したのである。その結果、田が大判。但し新任の御用耕作が出来ないと云ふことで町令につき稻百二十束（稲米 6 石）の割合（6 月で 3.6 石）で給与すると云うのである。けれども上着者に任じた場合は給与の限りにあらずといふのである。

此の範囲によればその時分まで監査役などはまだ無職であったこともわかる。今より（延暦 175）の官府文書である。

信濃文書に年俸下限があることからてから 15 年目の延暦天皇弘仁 3 年（812）符「諸家の御の領は別に有二百束を領すべきこと」大宝令の規定たる母番百につき 6 例の駒を責任廻出することに關へ、实行せないところから罰金を科すと、納局、駒一石につて稻 200 束、すなわち 10 石の代價を取ることに決定を見えてある。そして、これが信濃御守寺当伊那郡金井治人へ屬する者の通言に基いて大きを見たと文獻は示している。

信濃御の牧手当とは、信濃全部の牧手当であるか、又は駒の競馬場の牧手当であるのか分別ないか、とにかく伊那郡の大領金井治人にはこれに兼掌しておられたのである。

15. 下前田原古墳群と塩野牧

原田道夫

信濃天皇御御定の延暦式直轄の信濃 16 牧中、佐久に隣接するのが望月、長倉の兩牧と共に塩野牧である。駒の革新的位置にあった是れが歴史にもなったのでもちろん御守寺の駒そのものも代表しておられるから。

望月の駒よりおそく出でつれさだるたどるモ山はこえつる
奈良法師

達坂の鶴の清水に影見えてしまや引くらむ望月の駒
紀貫之

君のけむにあう坂山の鶴水も影しづくなる望月の駒
藤原経成

望月の駒にく袖も打ちしめりさまよひにけり御用の鶴
藤原経盛

などの他にもかなり歌られて有名であり、「北山久高詩」には塩野長治先生が、「望月牧比考」の論文を寄せおられた。長倉の牧についても、同じ延暦式に源流された、式内社の長倉社との関連性について多少考察、研究もされてきたようであるが、塩野牧について詳しこそ文獻らしいものはなかった。

「東鏡」文治 1 年の暮に、後白河法皇が信濃御守寺内に付ける年俸大判の庄屋をあげて権限しているが、その中の信濃二十八牧に塩野牧の名も見える。この御守になると牧そのものの形態も変化していくだろうし、私物化していったか、また牧とはなって

その後更に 1 年目の清和天皇の天長 3 年（826）までの同类型的の官名が監査と改められたことは 2 月 11 日の官符に「信濃貴上御御園土等の監査を定むること」（上洛人員）のうち「跡なく信濃、上野御園に各枚監 1 人、甲斐、武藏御園に各主當 1 人、馬四頭 1 人」同時に此の間に信濃と上野にばかり牧場が置かれたことも判る。

それから延暦の天長 4 年官符により甲斐にも、信濃に準じて牧場が置かれる事になった。文德天皇 2 年（850）には信濃に 2 人の牧場を置くことになった。天元以降に 2 人であったが、しばらくの間 1 人にしたのが、又 2 人に復活されたのである。

牧場に対する官職の位置が牧員史以来常に日本の代表的位置にあつたことは史実上の通りである。

けれども信濃の官牧が実際に其盛期に達したのは延暦開闢（清和朝）より延暦式の御用御園とと考えられる。

（延暦式） 佐久越系

新牧一郷、萩牧一郷、塩野一郷、長倉一郷

猪俣一郷、上野西牧（延暦式）望月一郷

（鎌倉式） 井月牧（延暦、信濃の 26 牧の内長倉の向）一長倉

牧・猪俣牧・塩野牧・上野牧・望月牧・新治牧

いるが、すでに竹本來の性格をどの程度現していたかも問題かも知れないが、一応は御園が存在してい事になろう。しかし文獻に詳しく探し得ない以上、この境内と推定される古墳や通称の発掘調査及び考古学的で明確な方法である。この意味において今回の土石量が土石、須磨から鐵器初出のものでないかと思われるものまでの広範囲にわたる事は注目しなければならない。

さてこの近辺に現存する古墳であるが、須磨近くの塩野古墳から、塩野古墳、ぬの山古墳、下原古墳の点を結んで延長的な位置に下前田原古墳群が存在する事実。そしてこれが既に御用古墳にまで及ぶと見られる様に、どうも何か意味がありそうに思われる。この構造と御用御園の構造に近いところを述べておかないか。そんな風出でできただろうか。下前田原古墳群の場所に土石代選地が確認されたが、ぬの山古墳のある所は「夷見塚」なる字名がある。「夷見塚」は、地名として残る土居は遺跡ではないかと想像するのだけれどか。

そして土石代選地が「夷見塚」的性格をもつものであるとしたなら、この追跡から御用御園と覺しき土器が出土した事は、「夷見」に出ていた塩野牧がまだ牧としての形態を備えていたのではないかと想像にもなりうるが、どうだろう。しかもこの綫上の確認された上のものとも繋がる御用古墳に關係あるのではなかいかと思われる「白山御用御園」の、乃も勤にまつわる伝説が残っている事なども中間に位置するこの古墳群も、やはり塩野牧と結びつけて考えたいのだが……。

16. 墓制に関する一考察

青木 幸男

周囲の如く、林田国男は「墓制の沿革について」によって、古墳時代の存在（古墳時代は、時間性としての墓元及び埋葬式としての墓所のことである。）を初めて指摘した。そして林田国男が自身自身したように、土葬や支配者の埋葬されている古墳ばかり埋り込んでいて、古墳墓院を見得ない日本開拓の歴史を想像するものと考えられていた。氏は墓地には埋められた墓と諦め墓とが墓所に相接する現象があり、死者を埋葬した墓地と、死者を祭る墓を二大別して日本の墓所開拓の歴史を始めたのである。しかし、埋め墓と諦め墓とのように別々であろうと、一个所であらうとそのような事は様々な個性や文化生活の必要性において何時でもその程度変わらうる事によらず、また取り上手で評価できることは、農耕民を生とする村落共同体の共生思想にとって、他界の観念は、空間的にと時間的に二重性をもたらせるを得なかつたと云ふ事である。所謂、農耕民にとって生死の観念は、始まると土地の執着を離れては存し得なかつたのだろう。そしてこのような生死の住み分け土地をもつとすれば、村落の周囲、しかも村落の外の土地に求められたのである。それが、埋め墓は空間的な他界の象徴であり、諦め墓は時間的な他界の象徴である。

と云うにすぎないのである。

又、岡田直一は「日本及び我が朝鮮における葬制上の問題」の中で林田の説明的な発見を強調して多謝とも云うべきものと認めた旨記している。

と云うのは、第三次世界大戦後（三十年あるいは數十年経た後）死者の骨は取り出され、お神されて土壇に埋まると云うのである。

死者的骨が土壤に埋蔵した時、現世の人々にとってひとつの他界が実感したかに見える。しかし実際に死んだのではなく、死士骨を粉碎してしまったかに感する。近頃の自己内部に他界が再生したのに過ぎないと云う。

本文は、何故古墳時代は墓制と墓院として遺跡には墓園祭が行なわれたのかと云う墓院の発祥より発せられたものに因ります。同時に民俗学の人達と尋ねられる林田国男氏の古墳時代の墓院の存在に関して、他界觀の変遷よりも、むしろ生死觀式の変遷が葬制の変遷の根柢的基盤本であるのではないかと想させざるを得ない點としてみた。

17. 立科町芦田古町下屋敷遺跡調査概報

小林幹男・鶴丸俊明・青木幸男

1.はじめに

立科町教育委員会は大学芦田古町下屋敷57号所在の下屋敷調査を昭和48年3月23日～4月3日まで実施することになった。

遺跡は御山麓より北流する小河川（立科川）によって開削された長い河床形状の河原地に本遺跡は位置する。本遺跡の西湖は堤防で区切られ、隣接する水田街との比高は多少と思われる。又この土壘は以前より耕作地として利用されて居り、かなりの掘削がなされている。近年は多くの研究者が歴史、八幡一族信託史料、考古学などの資料の充積があり、県立歴史博物館などでも成果があり、古くから著名な遺跡でもあった。

調査対象地は下記の通りである。

- 調査担当者 上田篠谷ヶ丘高校教諭 小林幹男
- 調査幹事員 東京大学理学部人類学教室 鶴丸俊明
- 調査参加者 土屋民久、竹内恒、黒岩忠男、渡辺義義、与良清、白倉盛男、端佐今朝人、青木幸男、白田正正、高村博文、林和男、上村等一、小林桂樹

尚、古堂下遺跡も調査対象にあつたが、8月に終了された。

2. 下屋敷、古堂下遺跡の概要

(1) 下屋敷遺跡

県道小猪白塚線沿いに沿った見玉美佐雄氏宅の敷地と、その範囲の遺跡である。採集されている遺物は、縄文中期後期式・南大原式・縄文中期の加賀利式・縄文後期の組・内式・縄文後期の佐野式・水式などの土器片である。土器の出土量はかなり多く、その他石器、石剣、石矛、石斧、石皿、磨石、定角形磨石系、乳鉢形磨石系、分離刃打製石斧、石器、石器、無窓などの石器類の石器、耳金、纺錐形器の筒形水器、土器類の土器の内側灰、須恵器などの破片である。

(2) 古堂下遺跡

坂尺せきの南斜面に沿った台地で、県道小猪白塚線の東側に位置する。石器や骨器などに利用されている。台地上には、遺物が複数に分布している。採集された遺物は、縄文前期の有尾式、南大原式、縄文後期の加賀利式土器などの破片と弥生後期の南浦式。土器類羽型式の内風、糞便状の杯形土器、台付皿形土器、須恵器の土器片などである。

3. 遺跡の調査概況

調査対象は、地主さんの畠で、南北約2m、長さ4.2mの調査坑(2m×2m)のグリッドを設け、数ヶ所のためし

掘りて、畠の土戻の厚さ、遺構、遺物をあらかじめ確認してから、作業を進みました。

遺跡は芦川の氾濫原の冲積地に位置し、地主元正美田雄氏にはみなみならぬ御恩をレセビアダしました。農耕用土上した大きな石碑等は田舎の神社祠にそなえられています。石碑は当時の集落では、ちょうど今日の両親さんのような村々の首長にあたる様な人々、権威のシンボルとして、おまつりをしたとされ、又、その石碑の信頼によって、追跡からよく選ばれる火除山の頂火と開港があったといわれ、おそらくくい現大する火除山へ山の神々が、しづまると御守をこめられたことでしょう。

この他の土壙は、耕土 30cm その下に礫文の黑色土層、黒色褐土層等で、約 70cm の厚さで、その下から芦川の河原石を主体に、肥石等が発見されました。その頭面の上からも多量の土器片、瓦片、石器、石器、岩器が発見されました。

耳飾りは、今日のイヤリングですが、男性も女性も当時は飾りました。当時の日本人は、幼少の頃から耳孔をあけ、大人になると、やや太形の耳環 3~50mm のもので耳をかざすようでおそらく、大きい美しい耳飾りをづけ、求愛の対象とした男性もいた事でしょう。

石碑は、丸山土質のもので、男性の性別をかたどっていますがこれば、きわめて大きく、この時期は特有で、直径 2.0~3.0cm、高さ 2.0~4.0cm のものでした。ところが、この時期の古墳時代の石碑は、いったん完全に削られ、必ずしも鏡面的に削られているのが見えます。本遺跡の出土品は多く、完全に削られたものがほとんどです。當時の宗教生活は、毎年祭りなどもありました。また、その他の土器類にも、日本神話にもみられる様に、日本の形成は女神でもありました。きっと当時の女性は、生産活動に伴なう、ひとつの信仰として、いのりをこめて作成されたものと理解されます。

さて、本日までに発見された一番むずらしい部分は、砂質の岩場でありまして、人間の頭蓋をかたどり、高さ 50mm の円形のものです。これは、既下では最初の例です。石のかわりに土(べ

と)で作ったものに土偶があります。いずれも人間を形づくり、中には、いろいろの頭に、おなじをしたるものもあります。ひな人形の様なもので、大きい土偶では、松本市女鳥羽に追跡から発見され、これは、最大クラスに入り、今回の発掘と共に砂質に入るものでした。

さて、これ等土偶、岩場にしましても、その性格やら、意味については、この考古学的の頃では、全く判断していません。つまりなく、学術的に努力を重ねるにいたしました。

たゞ、松本市女鳥羽出土の土偶をよく観察しますと、オッパイもあり、女性をかたどっていることは確かで、その女性の生殖器も、きちんと、さちよう面に作られていました。女性生殖器の解説としてとなる学者もいますが、わからぬ事が多いのが考古学である様です。

ごく最近までクレイドロマの「にじの人生」の主人公のあり方にも、おそらく作者は人畜混居の事であったものでしょう。

下巣竈遺跡の墓群は、周囲のイメージは魔力の土人の様な感じを与え、南太平洋の孤島に残るアラウア島大復活の生存石造文化に似ているといえましょう。今日の解説のところの相應は、なんとなしにはよくえましい男女のイメージからしてもうかがうことができましょう。

後の解説ですら、南方の島国の國々から伝わったのですから、当時の日本人が今見る未開拓地のアフリカやニギニア高地人の生活様式を想像できる様です。さすがにして、日本では、日本人のみで土人とねじき日本人の祖先は、その後進化し、大陸の文明を取り入れて今日の名前ある日本民族を形成了。

調査が終了になります。これから遺跡の全容が確定されるわけですが、鐵文問題は県下でも、飯山市野野、小諸市水、御代田町吉平等、調査された遺跡は少なく、且又古石山、岩場等の発見に伴い、学術的にきわめて貴重な遺跡となりそうです。

佐久考古学会規約

第一条 本会は「佐久考古学会」と称す。

第二条 本会は員の在久地方における考古学的な調査研究を相互に協力協力して、更にその発展を目的とする。

第三条 本会の会員は、本会の目的に賛同する考古学研究者によって組織する。

会員は会費年額 500 円を納入するものとする。

第四条 本会の目的を達成するために次の事業を行う。

① 総会(春季)

② 例会(原則として第一土曜日)

③ 調査研究 但し

④ 見学会 場合により例会を兼ねることがある

⑤ 講習会

⑥ 会報「佐久考古」の発行

第五条 本会の運営は、会費と機材収入をもっててある。

第六条 本会は次の役員をおく。

① 会長 1 名

② 副会長 2 名

③ 幹事 若干名

内 総務事 1 名 企画事 2 名

編集事 2 名 全体幹事 1 名

その他 若干名

④ 会計監査 2 名

第七条 本会の役員の任期は 2 年とする。但し監査はさまたげない。

第八条 本会には議題をおくことができる。

第九条 本会の事務局は、小諸市板の上小学校に置く。

附 则 本規約は、昭和 46 年 5 月 29 日より発効する。

以上

佐久考古学会会員名簿

氏名	郵便番号	電話	住所	氏名	郵便番号	電話	住所
由井茂也	384-110	川上 6005	南佐久郡川上村 御所平 御所平	寸田政規	384-	小諸 2-0619	小諸市中松井
由井 明	"	" 81	"	小宮山敷	"	" 2-1069	小諸市八幡町
吉沢忠重	"	" 341	" 磐沢	金井重忠	"	" 2-2681	小諸市足柄
由井延雄	"	"	"	与良 清	"	" 2-2681	小諸市与良
由井佳幸	"	"	"	白倉盛男	383	佐久 7-5032	佐久市岩村田一本柳
由井祐太郎	"	"	"	渡辺重義	389-07	磐井沢 2-4014	磐井沢町高校前
新澤開三	"	"	大槻山	土屋長久	"	" 5-5029	磐井沢町中磐井沢
土屋忠芳	384-132	海ノ口 3592	南佐久郡南牧村 野辺山	小川字一	386	-	上田市綠ヶ丘2, 3,
井出正義	384-111	八千穂北小	南佐久郡小瀬町 東馬込	森島 雄	389-08	戸倉 5-2857	埴科郡戸倉町戸倉
三石延雄	384-06	"	南佐久郡白田町 入沢	臼田武正	380	長野 32-2244	長野市茂音 1, 5, 3 平和荘 (病院方)
奥水利雄	384-04	臼田 3013	南佐久郡臼田町 三反田	高村博立	385	上田 2-8759	上田市天神 3-10 -28兼莊
黒岩忠男	384-03	臼田 2487	南佐久郡臼田町 諫訪	青木幸夫	168		東京都杉並区永福町 2-7-15 國土社
小林秀人	384-08	"	" 下越	野沢高校郷土研究会員			
花岡都夫	384-01	佐久	佐久市平賀	佐々木とよ子	臼田町人越 8		
武藤 金	"	"	"	真山由紀子	望月町御禪谷		
竹内 健	"	佐久 3424	佐久市中込佐太 夫町	中沢次子	佐久市安原		
韋駄盛士夫	"	"	佐久市野沢原町	須江たい子	佐久市駒込		
藤沢平治	"	佐久 6- 6761	佐久市跡部	臼田晴美	佐久市桜井		
畠山富雄	"	佐久 6- 5836	佐久市三塚	木内宏子	佐久市下県		
新村 薫	"	"	佐久市前山泉園 地	小林典子	臼田町田口		
井上行雄	385	佐久 7- 3296	佐久市岩村田砂 田	佐藤八重子	佐久市内山		
佐藤 敏	"	" 2075	佐久市岩村田相 生町	中島君江	南牧村		
森泉好治	"	" 2828	佐久市岩村田荒 宿	菊地すみれ	"		
上原邦一	"	"	佐久市岩村田	石川和子	"		
畠山忠雄	384-21	浅野 8529	北佐久郡浅野村 八幡	青木真由美	佐久市源原		
桜井 栄	384	小諸 2- 1844	小諸市与良	佐々木	"		
土屋 実	"	" 2-1039	小諸市六供	小栗あき子	岩村田榴荷町		

>>>>>>>>>>>>>>

佐久考古学会会報卷1.

「佐久考古」

昭和48年11月30日

編集 土屋長久

発行 佐久考古学会

<<<<<<<<<<<<

佐久考古

上信越高原国立公園<天然記念の保護運動>

浅間山麓 保護協力を望む蝶について

あさまもんきちょう、みやましろちょう、べにひかげの3種は、浅間山系に生息する高山蝶である。浅間山系周辺地域（小諸市、御代田町、軽井沢町、長野原町、嬬恋村）全体が協力して保護しなければ、この種の蝶は浅間山系から姿を消すであろうと思われる。

これ等の蝶を含む、8種については、すでに昭和3年の「長野県史蹟名勝天然記念物調査報告書第9輯」に保護すべき高山蝶として記録されている。しかしこれが実現されていない。

上記3種の蝶について略記すれば

1. あさまもんきちょう（地方型） 原型は（みやまもんきちょう）

本州中部高山帯の特産種、氷河期からの遺跡昆虫

英人ブライヤー氏により1877年（明治10年）浅間山系から採集されたのが世界最初
この時国内産、10数種の新種が記録されている。

・形態；（成虫）翅を開いた時、約5.0cm、モンキチャウにてシベリアでは平地に生息
し、他国では化石となって、これ等遺跡昆虫と称されている。

・生態；食草、クロマメノキ（アサマブドウ） 幼虫越冬

幼虫期間8月～翌年6月まで、群馬県黒豆河原では本種は、明治末を限りとして
姿を消した。

2. みやましろちょう（地方型） 略名 タテノヘテフ シナノシロテフ

本州中部高山帯の特産種で、標高1,000～2,000の地に生息し、幼虫期に集団生活
し、これが業者に幼虫ごと、採られてしまう。1919年（大正8年）に名命、シベリア、

中国北部に分布するものと比較され、変種とされている。

- ・形態；(成虫)翅開長6.5cm、スジグロチオウの仲間。
- ・生態；食草、ぬぎ、ひろはのへびのぼらず、産卵塊は50～160粒、幼虫期間8月～翌年6月(幼虫集団越冬)

3. べにひかげ

高山帯中、分布範囲が最も広く、高山帯に多く生息するが、最近量は少なくなっている。

- ・形態；(幼虫)翅開長4.0cm内外、ジャノメチオウ科
- ・生態；食草 ひめかんすげ、みやまかんすげ、めひしば、
越冬は幼虫 3令で越冬する。

○ その他保護すべき昆虫

1. アサシシジミ(蝶) 浅間山麓(御代田町指定天然記念物)
2. ハヤシミドリシジミ(蝶) "
3. ムカシトンボ(トンボ) 確水峰

長野県小諸市八唐松1457 小畠武一(信州昆虫学会員)

文責 " 絹井沢町長倉3,033 土屋長久(" 「信濃の蝶」編集
委員)

佐久考古学会規約

第1条 本会は「佐久考古学会」と称す。

第2条 本会は会員の佐久地方における考古学的な調査研究を相互に援助協力進行し合い更にその振興を目的とする。

第3条 本会の会員は、本会の目的に賛同する考古学研究者によって組織する。高校生及び高校の研究団体は準会員とし、会費は徴収しない。

第4条 本会の目的を達成するために次の事業を行なう。

①総会 ②例会 ③調査研究 ④見学会 ⑤講習会 ⑥会報「佐久考古」の発行

第5条 本会の運営は、会費と特別収入をもっててある。本会会計年度は4月1日～5月31日までとする。

第6条 本会は次の役員をおく。

①会長 ②副会長 ③幹事(事務局、企画、会計) ④委員 ⑤会計監査

第7条 本会の役員の任期は2年とする。但し兼任はさまたげない。

第8条 本会の会則変更は総会の議決をへるものとする。

附 則 本規約は、昭和46年5月29日より発効する。

1. 原始時代石器の石質について

白倉義男

人類が文化的進化をしつゝけてきた根源は他の動物と異なって道具を使用したことにはじまるとして定説されている。その最初の原始的道具は手ごろな自然石が用いられ、それが用途に応じて順次加工されたり、石質が選定されて打製石器となり、磨製石器となったものである。したがって人類文化の進化は石の文化の進展であるとも言いかえられる。まことに石器時代の出土石器類には石質の差異、加工技術の妙に驚かされるものが多い。近頃は考古学と地質岩石学との提携による石器石質出土層位による時代対比の研究も進歩してきたが、これは極めて最近のことである。

しかしこれからの考古学的研究には岩石地質学的研究が伴なわなければその真相を把握することができないことが明らかとなってきた。

筆者は極めて僅かな見合であるが郷土佐久地方出土石器類の石質について、その概要を述べて参考に供したい。

佐久地方には旧石器時代、衛文時代、歴史時代の遺跡、遺物包含地は極めて多く、標高で650m～1,300m位まで、山地平地台地谷等到る処から出土し、石器の種類としては石拍、石刃類、石斧、石劍、石皿、石盤、凹石、多孔石、石斧、石匙、石錐、石鎌、勾玉、菅玉、丸玉等各種のものを見ることができる。

これらの各種石器類と石質の組合せ分類表を作製すれば次の通りになる。

1. 火成岩

閃長岩	—	磨製石斧
蛇紋岩	—	〃
		祭司用模造品
斑岩	—	〃
玄武岩	—	打製石器、石匙、石鐵
流紋岩	—	〃
		石皿、石棒
安山岩	—	〃
		石皿、石斧、多孔石
黒曜石	—	石鐵、石槍、石匙、細石刃
浮石	—	凹石、多孔石、石錐

2. 堆積岩

チャート	—	石斧、石鐵、石匙、石錐
珪岩	—	〃
粘板岩	—	〃

砂 岩 一 石斧、石鎌

輝綠斑岩 一 " "

3. 変成岩

緑泥片岩 一 石斧、板碑

その他片岩 一 " "

4. 鉱 物

硬 玉 一 勾玉、管玉、丸玉、小玉、平玉、切子玉、耳飾

碧 玉 一 " " " " " " "

水 晶 一 " " " " " " "

メノー 一 " " " " " " "

玉 蘭 一 " " " " " " "

ガラス " " " " " " "

火成岩

岩石鉱物のすべての種類のもととはマグマ(岩漿)が冷却固結したもので火成岩である。これが浸透風化堆積して再生したものが堆積岩であり、これらの火成岩、堆積岩が熱、圧、等の変成作用を受けて鉱物組成が変化したり、組織構造が変わったものが変成岩である。従って火成岩の組織構造を見ることは岩石研究の基本となっている。

火成岩を構成している造岩鉱物は硬度、へき開、膨脹率等の差異が著しいものが多いので、小型鋭利な道具を作るには適していない。閃綠岩、輝沸岩、蛇紋岩は半透視・磨製の美しい石斧に用いられており、閃綠岩は南佐久東部の佐久山塊に露出地があり、千曲川河床疊からの入手が可能である。輝沸岩は原石を他地方から求めたものらしく、その石斧も極めて少ない。蛇紋岩は硬度が低く加工が容易で、でき上りは極めて美しいためか石斧、勾玉の奢侈製品や祭司用禮器が多く見られる。

玄武岩は佐久地方には模式的なものではなく僅かに荒船山、菅平方面に部分的露出が見られ、打製石斧、石匙、石鎌の原石となっているものが極めて少數見受けられる。これは関西近畿方面では打製石器の大きな部面を占めるサヌカイトであるが信州の地域的特色である。

流紋岩は佐久山塊、小県山地に岩脈として所々に小規模の露出があり硬いため石斧の材料となっているがこれも少數である。

八ヶ岳立柱、荒船、浅間等佐久には火山が多いため、いたる所に各種の安山岩が分布しており、その中で緻密で比較的玻璃質のものは打製石器、石皿、門石の原石となっているものが多い。石棒も安山岩のものが多く特に県下最大の長さ2mに余る佐久町高野町の石棒も安山岩である。

安山岩質のものでは、浅間山麓の浮石が加工が容易なためか各種の石器になっているのもこの地域の特色である。

黒曜石はもともと安山岩質のマグマが急冷凝結してガラス質になったものであるが断口の鋭利さと原始時代の技術の巧妙さで成形が楽にできたためであろうか、旧石器時代から各種多方面に活用されている。黒曜石の産地としては和田岬附近と立科山(双子池西)の冷山、八千穀村大石峠が知られているが石器原石として利用できる品質のものは和田岬附近産のものだけである。

黒曜石製石器で今迄採集されたものを統計処理すると和田岬を中心として中部地方全体に同心円的に中心部に濃度が濃くなる分布を示すことから石器時代和田岬の黒曜石は長野県のみでなく中部地方全体の石器資源の中心地であったものと物語っている。

(小諸博物館長)

2. ふるさと小諸市の先史をたずねて

土屋 実

当小諸市内に分布する古代遺跡・遺物散布地の数は東信地方においても、他地区との比較において見る時、有数な部に属するものといえます。従ってその埋蔵文化財包蔵地としての考古学的価値は貴重なものであります。しかしながらこの包蔵地もそれに相応しい行政的配慮と处置を受けていけるわけではありません。このことは誠に現念なことではありますが、現行の国内各地の現況に照らして、極めて悪い状態であるということではありませんが、非常に進んだ包蔵地保護の行なわれている地域を標準にするとそこに格差がいちじるしいということであります。

また一般に民間のこれら埋蔵文化財包蔵地に対する関心も厚いとはいはず、一面からすれば、社会開発の進展のお薄物視する考え方も一部には見られるところであります。

包蔵地の保護よりも、なくすかに遺跡地を跡形もなく破壊して直接的な有益確保の趣性として意に介しない所有者もないわけではありません。公的な配慮のとくかないところ、民間の認識のずれなどの悪い条件の中で、遺跡地は観光行楽地として小諸市を訪れる人々の増加とともに、一時的な興味と関心の対象とされ、案内図などをたよりに遺跡地、散布地にふみ入り、遺品・遺物等を持ち去られるケースが見られます。古代ブームの影響から当市に来遊の学生・生徒などが指導者の引率なしに、興に乗じて、春夏秋冬の季節もなく、田畑に侵入して生産者に多大の迷惑を及ぼしている現況は察心に堪えないところであります。

これら土研究的資料蒐集の場合は少なく、いたずらに出土遺物の散逸を生みだすため郷土遺物の散逸を生みだすため郷土的な立場からすればいかにも惜しいことであります。

こうした環境の中で、われわれの「考古学会」は全員協調して、郷土の考古的研究を継続して行ない、郷土の埋蔵文化財の保護地の発見、先史社会の釋明に意を注いで今日に至ったわけであります。知られることの浅かった当市地域の先史時代の動向をいささか深め厚くすることができた次第であろうと存じております。

このことは、直接には当市誌の編纂にあたって執筆される、「通論」中の社会科学の「小諸のあけばの」の第一章を輝やかしく飾ることとなるはずであります。

会員の研究調査活動の一端にふれてみると、当市内の遺跡地・散布地に臨場して観察調査を永年にわたって続け、必要によっては時に表面採集により遺品遺物の断片までも観察研究を行ない、研究討議もくり返して資料を検討してきたわけであります。

こうした資料は研究後は分類整理されて、地方資料として完璧な保存と保護を目指して市外への散逸を防いでおりますし、市立博物館の展示資料ともなってこの層の厚さをのぞかせているわけであります。

会員A氏の永年の資料調査活動の部分として、遺物散布地、B地を中心に石器・土器の断片中から、硬玉半製品の発見があります。これらは数年間にわたり、個々に発見した石片でありますが、これを整理して比較・研究を進めましたところ、当時の硬玉加工の技術と技法加工技術者の存否、原材料の搬入等いずれも櫛文時代のB地における生活の実態に迫るA級資料であることが確認され市指定の文化財に推薦される価値あるものとされています。

考古学による先史時代の研究は世界的に未開拓の部分が多く、国内の一地方の資料・研究のみをもってしてはいかんともしがたい困難さもありますが、一地方のあけばの時代を現代そこに住むわれわれの手によって「明らかにする」お手伝いをしていくという熱意と友情によって、同志相扶けて活動を続けていきたいと願っております。

(小諸市教育委員会総務課長)

3. 小沼付近の古代史について - 塩野牧を中心として -

与 良 清

塩野山遺跡；住居跡（祭祀跡）1ヶ所、土居状遺構2ヶ所、遺構の存在する浅間山麓は標高1,200mの国有林である。土手の高さ1.5m、基部巾6mの規模で1辺が50m位のほど梯形の囲い状に構築されている。遺構より西へ1km墨林省草地造成で段状に削平された先端から土器類を作り石切りが検出され、祭祀跡とも推定される。地番は塩野字塩野山3,4,6番地、沢の呼称は舟ヶ沢、有ヶ沢といわれる。昭和41年1月、墨林省草地試験場山地支場が建設され、石切り及び

土器が発見されてから注目され、当時、小沼小学校小林俊英、故内堀義國氏等と調査にあたっている。

土堤の跡を平面図にすると何か牧場の跡と思われ、上堤に囲まれた中央には祭祀的な遺構もみえ有ヶ沢には「水のみ場」という地名がある。この土堤状遺構より南方、宇南ヶ原地蔵に高塚様のまむし塚、2基が存し、径20～30mを計る大型のものである。

浅間山麓には、長倉牧、塩野牧、新張牧が位置したが、牧の境は、おそらく沢をさかいとして行なわれた。舟ヶ沢以東が、長倉牧、舟ヶ沢～蛇堀の沢が塩野牧、蛇堀以西が菱野牧と思われ、小諸市乗原（旧御代田町）の御形神社をどう考えるか。

牧場の土堤と、松本市中山、上伊那郡宮田村等にある「猪土手」（近世）の異いは、塩が内側か外側かで区別されるものであり、塩野牧の存在が、前田原までゆくかどうかが問題となる。前田原古墳群等今夏調査を行なったが、後原の土堤状遺構が牧場的な要素とすれば、むしろ官牧ではなく、私牧的なものではあるまい。背後の氏族については今後真面目に扱いたい。

御代田の古代史の上で、古墳の存在がいかなるものであろうか、築造した人々の性格がやゝ帰化的要素がうかぶれるのも、佐久への開拓者（移民）でもある。また御代田町内真楽寺、沼の伝承、源頼朝の浅間岩寺の伝承があり、鎌倉時代の当時は、浅間山がすっぽり信濃國であり、現在の北上州地域は御代田町の文化範囲であり、信濃國三原荘とはその事であるが、天明三年の大噴火で鬼押出し、六里ヶ原が形成され、遺跡はみられない。源義仲の旗上に佐久の波野氏系族はその後離散はしたもの北上州の其1箇村には信濃的な氏族分布をみるとそのなごりであろうか。

（小諸市文化財審議委員長・佐久考古学副会長）

4. 上の城発掘

武　藤　金

はじめに

考古学というと、発掘にたずさわったり、土器をいじったり、石器を集め、形式論や文化編年のようなことをやっておれば、それが考古学のいきかただと考へている人がないでもない。これでは学問ではなく、学にたずさわる人のひとりよがりになってしまい、学問の生命とする真理の探求とは縁の遠いものになってしまう。

考古学が人の遺したものと対象としている学問であるかぎり、研究から人間が脱落してしまったのでは、学としての意味をもたないことになってしまう。あくまでも考古学本来の研究の進めかたは、人間の生活をしっかりとつかまえることだといえよう。

その文化を生んだ人間生活にまでくいいって研究の手をのばさなければ、まったく中途半端なもの

のになって、考古学本来の形態をなさないことになってしまうのではないか。ともかくも僕は、古代人がどんな環境で、どうなくらしかたをしていたかを考えてみたいと思ってこの稿を草した。

実はもっと順序だてて、筆を起したかったが、まだ生れたばかりで弱さもあって、せっかくの希望をみたすことができなかったことを謝して、その先是諸賢の考をまつ。

古代人と自然の周期

昔の人間は、地球が自転しつつ、太陽の周囲を公転しているということを知らなかった。しかし人間は知らなくも自然界は現実にそのようにうごく。

その結果おこるさまざまな自然現象に、人間はいやおうなく、自分たちの生活をあわせてゆかなければならなかった。その昔の人間の最大の問題は、食糧の生産であった。食糧をふやして、人口を増殖させるのが、初期の人類に共通した目標である。その手段として農耕がある。その生産をためめるには、自然界の季節の周期にあわせて、作物の種類を選び、作業をいとなまなければならない。生活に直結した重大事として、自然現象の周期につき認識せざるを得なかつた。

家畜はそれ自身に、自然の周期に適応して生きる自発的な能力がある程度備わっている。家畜とは、それぞれの地域ごとに季節の変化に耐えて、年間をとおして生きられる動物が家畜だった。家畜の種類によっては、たとえば免情、繁殖期が神定の期間に設定され、家畜自身これに応じた生活をみずからいとなむ、さらに家畜自身に移動能力があるから、場所を移すという適応も可能であった。

ところが農作物にとって、季節の制約はずっときびしい多くの作物は、一年のうちのある季節でのみ生育する。その季節に生育をあわせてやるのが人間の責任である。しかも移動能力がないから生育の場所を途中でうごかすわけにはいかない。故に農耕民族は、牧畜民族よりも自然の周期について敏感ならざるを得ない。

そういう初期の農耕民にとり、大空の月以外の周期的にほゞ一ヶ月ごとに微候の女性の月のものは一つの重要な日記の役割をはたしたにちがいない。定期的にくりかえされるのが原則である。季節の推移を告げる能力が女性にのみ先天的にそなわっているわけで、かれらの社会での女性の価値を高めるのに役だったと考えられる。女性すべてが同じ日に月のものがあるのではなく、個人による差がある。当然その中には農作物に関する目盛りとして適した月経周期をもつ女性と、そうでない女性との区別が生じたであろう。

「折口信夫博士」は昔の日本人がこのツキの神秘をどう考えていたかを考察して、神が女性を「召されるしるし」と見なしていた。そして月のはじめは高级王女のツキモノの見えた日をもってし

た。月のたつ日で、同時にこれがツイタチである。神の来る日が元旦であり、縮っては、朔日であると考えた」という説を出している。たいへん突飛な説のように見えるが、もちろん根拠があつてのことであろう。

「古事記」に出ているヤマトタケルノミコトの話の中で、ミコトが東征の途中、尾張の國に立寄ってミヤズ姫と契ろうとされたが、その時は会わずに、約束だけ交わして行かれた。帰りにふたたび尾張の國にもどって、ミヤズ姫のもてなしを受けられたが、その時出てこられたミヤズ姫の着ているものの裾に月経がついていたのである。そこでヤマトタケルが歌をよんだ（歌略）ミヤズ姫もそれに答えて歌を詠んだ（歌略）ミヤズ姫も衣服のすそに、月立たなむよと、みとめ二人が結婚したというのである。

ミヤズ姫は尾張の國の最高の王女であったのだから、ヤマトタケルノミコトは神として王女を「神の嫁」にしたのだとみれば折口先生の説のようになるわけである。

同じ「古事記」の雄略天皇のところにも、采女（うねめ）の捧げて来た盃に楓の葉が落ちてきたのを怒って殺そうとした話が出ている。葉っぱが盃におちていたからといって殺そうとしたというのは、ずいぶん乱暴な話だが、楓の木の下に女性が忍みこもる習わしがあってのことらしい。今ではほとんど見られなくなつたが、女性が月のものを見た時、その期間だけ家族とは別の建物にこもって、別人の生活を送る習わしは各地にあった。

伊豆の島々ではこの小屋をヨゴレ屋と呼んでいるように、その期間は女性はけがれているからだというのが理由であった。

愛知県北設楽郡などではヒゴヤとかタヤといい同溫美部なんかではカリヤといったが、それをツキニヤという所もあった。月のもの聞こもっているからそう呼んだと思われているが、あるいは楓小屋の意味だったのかも知れない。それは「万葉集」卷十一に（歌略）という歌があるように、楓の木の下で女性がこもる習わしがあったと思われるからである。

さて、殺されようとした三重の采女は、新嘗の祭りのためにこもっている建物の傍にも、楓の木が生えていたのだ。そういうて弁解したので、やっと許されたと「古事記」は書いている。

新嘗の夜、男を遠ざけて女性ばかりが忍みごもりしたことは「万葉集」卷十四にある。歌だととか「常陸風土記」の富士と筑波の話をみてわかるが、その新嘗の祭りにこもる建物の傍に楓の木があったのである。

結局、月のもの期間女性がけがれているから家をはなれて忍み小屋の生活を送ったのでなく、その期間は神に召されたとして、神をまつるために、神聖な建物に忍みこもったのがもとの意味ではないかと考えて、いわばその期間だけ「神の嫁」となるのである。

考古学的に

わが国において、巫が存在した確実な証左は、卑弥呼より古い時代については、文献の上からでは一つもない。母系氏族や、母權社会の存在を立証する記録もない。そこで考古学的資料によって縄文時代の女神土偶の存在を似てそれを巫、巫をわが國における発生の時点と考える見方がある。

中略

縄文文化も中期になると、始原的な素朴な農耕としての深耕が開始され、耕種社会が母系的、母權的社会の出現の可證性を示すものであり、したがってそこに巫女の存在を考定することは充分認め得る条件をもつ。女神土偶はたしかにそうした社会構造を示唆している。

その土偶が、呪的信仰を母胎として、発生した呪的宗教的な遺物であることに疑わないが、例えば多くの土偶にみられる豊満な乳房や、肥厚な腹部、巨大な女陰の露出誇張的な表現は、巫ではなく、妊娠を表象したり、または女性の生殖力を表象することによって、安産の護符とか収穫の豊饒を祈念する呪物として、それを身につけ、それを祭具とすることによって、目的を達することができたとした。

接触呪法や模倣呪法の信仰に発する対象物と解すればよい。そういう土偶が縄文時代を通じてその終末まで存在するにつれて弥生時代になるとまったく姿を消すのは、そうした始原的呪術信仰がすたれて、弥生時代になってから信仰形態に大きな変革がおこったことを示していると考えられる。

とにかく巫が祭祀を専ら司り、あるいは神がかりすることによって、一般的に信用を博していたことは、弥生時代において存在した事実である。

こうした古代日本の神がかりの巫の活動はわが古代社会に相当大きな主動力を發揮していたという事実を認めなければならない。

(佐久市平賀)

5. 佐久平の庚申信仰について

佐藤 敏

1. 庚申縁起

抑も大日本國、我が朝人皇四十二代文武天皇の御宇、大宝元年の庚申の年、正月七日庚申の日四天王寺行法尊記上人の庵室へ、年の頃十六、七ばかりの童子が淨衣を着し、忽然と来たり給うて、僧都に告げて言うに、我はこれ帝釈天から天下って来た、当寺は仏法最初の靈地である。それ故に庚申の法をあまねくひろめよとの勅旨である。天竺、震旦にも、もっぱらこれを修行し崇めるのである。其れ三界の衆生は迷い多く覺りは少ない、これによつて現世にも災厄

を受け、後生には惡道に沈む、此の縛を解みて給うて庚申を待ち尊むものは現当二世の諸願を成就するという。(中略)

千時延宝八庚申歲仲冬初　一

施主泉賀之内比田村　理左エ門尉

2. 庚申塔の種類

板碑型・光背型・板状納型・狗型・山状角柱型・角柱平頭型・角柱各種頭型・笠付型・丸(円)柱型・笠付丸(円)柱型・立体丸彫り型・自然石型・翁庚申

3. 異型の庚申塔

五輪塔型・宝冠印塔・層塔・灯籠・狛犬・石祠・關廬大王

4. 文字だけの庚申塔

A 単に庚申塔だということを表示したもの

庚申・庚申塚・甲申當・庚申謹・庚申碑・甲申塔・庚申塔・庚申燈

B 庚申の主導の称之方を示すもの

庚申神・表面金剛王・道祖神・庚申尊・青面金剛神・本朝道祖神猿田彦大神・庚申大神・青面金剛明王・庚申山王大権現・庚申天子・庚申三層神・靈神・青面金剛・帝釈天王釋・孝心謹・青面金剛尊・申田彦大神

C 供養のためと記すもの

申待供養・奉修庚申待供養・奉修念庚申供養・庚申供養・奉礼拝供養庚申塔・奉納庚申供養候・庚申待供養・奉造立庚申待為也・奉修庚申供養延也・庚申供養仏・奉修庚申供養候・奉待庚申供養一結成就所・奉待庚申供養・奉修庚申供養・奉修庚申供養一基所・庚申構満座所

D 祈願および所願成就を表現したもの

奉待庚申供養・諸願成就所・奉造立青面金剛心願成就祈所・奉造立庚申供養諸願成就所・奉建庚申口口家内安全祈所・終日 天下和順 日月清明 風雨以時安 厄不起 國家民安 兵才無用 今日結衆等庚申二座成就為現 当二世所願 円滿也・奉造立庚申供養の宝塔 各願成就修

E 二世安樂と表現するもの

奉造立庚申供養二世安樂所

奉待庚申供養石塔二世安樂

F 二世説を示すもの

絶三 影仇 横伏三層塔 速得二軒塚 徐武僧之罪 三層罪

昭和48年度佐久平発掘調査要覧(その1)

6. 佐久市岩村田上の城遺跡緊急発掘調査概報

1. 調査概略

1. 調査に至るまでの経過

佐久市岩村田上ノ城地蔵は岩村田地区南方に位置し、佐久平を流れる湯川の北に臨んだ田切台地の縁部で、同一台地上には、上ノ城遺跡、一本柳遺跡、東一本柳古墳等の遺跡が存在する。

上ノ城遺跡は長野県教育委員会埋蔵文化財包蔵地調査カードに登録され、弥生後期から土師、須恵など平安時代にわたる遺物が検出されている。またこの遺跡の既出資料としては、昭和45年に佐久教育会館建設工事に際して土器完形品が数個体出土している。

今回、この地域が国道141号線改良工事により遺跡の破壊が予想されるため、佐久市教育委員会は事前調査を行なうべく、7月11日市教委、建設事務所立ち合いのもとに、県教委指導主事、桐原健氏と佐久考古学会員、井上行進氏、佐藤敏氏らによる分布調査を行ない、緊急発掘調査実施を決定した。昭和48年7月28日、佐久市役所において現在問題式及び打ち合わせ会を行ない、調査担当者に野沢北高教諭(県考古学会員)藤沢平治氏をもち、7月29日より発掘調査実施にふみ切った。

2. 調査構成

・ 発掘調査参加者

藤沢平治(調査担当者)

七星長久 小林幹男 川上元 白倉盛男 武藤金 三石矩雄 新村薰 佐藤敏 井上行進
森泉定勝 森泉好治 青木幸男 曰田武正 高村博文 林幸彦 太田敬吾 小瀬義男 福島邦男
広瀬忠好 田中達朗 鶴舎行進 森山公一 矢島 百瀬新治 林和夫 上原幸安
川島雅人 前原豊 鴨下幸也 藤井裕紀枝 清野利明 小林秀人 小池哲芳 前田順子
西沢やよい 増沢利定 小原ひさ江 多田井幸視 菅田実 疾信武 林文典 松本文一

浅間郷土史研究会員 上田染谷丘高校OB 野沢南高校OB

野沢南高校郷土史班 上田高校郷土史班 上田染谷丘高校郷土史班

佐久高校生 岩村田高校生 北佐久農業高校生

野沢北高校生 浅間中学校生

(地元協力者)

河原田まつ子 掛川つや子 清水しづ子 速藤静代 岸しげ子 並木翠美 井沢しま

関かめよ 小林ふさ 小林みよ

(事務局)

細萱教育長 小山教育次長 高畠課長 小須田係長 木内捷

(見学者)

森編修 米山一政 小栗擦治 奥水利唯 宮脇野沢北高校長 土屋助役

佐久考古学会員 佐久市教育委員 佐久建設事務所 東中学校生徒 岩村田小学校生
徒 三井小学校生徒

・ 調査の場所

佐久市大字岩村田字上ノ城2595~3111の1番地

・ 調査の目的

国道141号線改良工事により、本遺跡の破壊が予想されるため、工事前に緊急調査をし記録保存する。

・ 調査の概要

調査対象地域、上ノ城地蔵約8857m²(249G)をグリッド(3×3m)による平面発掘調査を行ない調査報告書を作成する。

所要日数 107日 延べ人員 1,852人

・ 調査日程

1973年7月28日~11月18日

・ 調査委託者

佐久建設事務所

・ 調査受託者

佐久市教育委員会

2. 遺構及び遺物

1. 検出遺構及び遺物

○ 検出遺構

時代	型式	遺構ナンバー	合計
土器時代	鬼高 期	H-01, 10, 14, 15, 16, 18, 20, 21, 22, 28, 30, 32, 37, 38, 52, 高床式倉庫	住居址 15 特殊遺構 1

時代	型式	遺跡ナンバー	合計	
土師時代	国分期	H-03, 04, 05, 07, 08, 09, 11, 12, 13, 17, 19, 24, 25, 26, 27, 29, 31, 33, 34, 35, 37, 39, 40, 42, 43, 44, 45, 46, 47, 48, 49, 50, 51, 53,	住居址 34	
土師時代以降	?	I地区 - 土括状遺構 86 溝状遺構 2 II地区 - 土括状遺構 20 溝状遺構 1 III地区 - 土括状遺構 25 溝状遺構 4	土括状遺構 131 溝状遺構 7	

○ 出土遺物

・ 銺文時代

加曾利E式（中期）土器片 2, 石鍼数点

・ 弥生時代

岩村田式（後期）土器片数点

・ 土師時代

土師器 - 葵 梓 直 匙 杯 蓋 把手付楕型土器 台付小型把手付楕型
土器 鉢 外耳等多量

須恵器 - 大形壺 壺 杯 台付杯等々多量

陶 器 - 灰和

土製品 - 粘土車 土鉢

石 器 - 凹石 石鍤 砥石 磨石 軽石製品 ロウ石製品

鐵 器 - 鐵 刀子 鐵斧 その他不明な鐵製品等多量

その他 - 墨書き器 墓文土器 神功開宝（古錢）

・ 土師時代以降

宋銭 元銭等種々の古錢多量

常滑片 内耳片 砥石

・ 自然遺物

骨片 骨粉 種々の炭化物

2. 各遺構について

○ 住居址

本遺跡で検出された住居址について次の4つに関して簡単にまとめてみる。

I 平面規模及び平面形態について

本遺跡での住居址の規模は、1辺最低1m80（H-25号住）から最高の9m50（H-10号住）という大きな振幅をもつが、全体にはほどろく～4m付近の規模のものが最も多い。又5m以上の規模をもつ住居址はほとんど鬼高窓の時期とみてもよいことがわかる（本遺跡において）。平面形態については、方形、隅丸方形、隅丸台形、不定形等種々の形態があることを観察できる。

II 周溝、住穴、壁高について

本遺跡においては、周溝及び柱穴をともなう住居址は少なく、周溝をともなう住居址はわずかH-3号、32号、37号、52号住の4軒だけである。又柱穴においては住居址内外に1つともなわない住居址（国分期のものが多い）が多くあり、どのように家を構築したのだろうという問題を提示している。さらに壁高においても、鬼高窓の住居址であるがH-37号住のように80cmもあり、私たちが実際に昇降してみたのであるがちょっとやそっとで昇り降りはできないのである。そこで当時の入口施設に特殊な構造があったのではないだろうかと推測するわけだが、残念ながらそれに対する積極的な所見は得られなかつた。

III カマドについて

カマドの研究において本遺跡での資料は非常に貴重なものを我々に与えてくれた。特にH-108号住のようにほとんど当時のまま完全に残っていたカマドをもつ住居址にも遭遇した。今まで整理した段階で本遺跡でのカマドを簡単に分類してみると次の4つに分類できる。

A形態 ほど直方体に加工された砂岩質凝灰岩を両袖の芯に使用し、そのまわりを粘土で固くするために作られており、北壁のほど中央部に構築されている形態をいう。

（鬼高窓の住居址に伴なうものと思われる）

B形態 カマドのほとんどを（煙道部まで）角礫質凝灰岩を加工した割り引で作られており、北壁のほど中央部に構築されている形態をいう。（国分期の住居址に伴なうものと思われる）

C形態 作りはB形態によく似て石を主体としているが、B形態にほとんど使用されてい

た割り石は部分的に使われているのみで、自然面を残す石も使われている。さら
にB形態と最もちがう点は、構築されている位置が東壁のやゝ南より存在すると
いうことである。(図分期に伴なうものと思われる)

D形態 上のA, B, C形態に残さないもの

以上、簡単にまとめてみたが、今後の整理にさらに精密な分析をおこない改ためて上ノ城
遺跡のカマドについて報告をしたい。

N 覆土内における礫群の存在

本遺跡において、覆土内に多量の礫(河床礫)が存在する住居址が約10軒ほど確認されて
いる。この礫群(磨の集まりを仮に礫群と呼ぶことにする)は、ほとんにぎりこぶし大の礫が
ほとんどをしめ、その中に頭大もしくはそれ以上の礫が少々混入する状態に存在し、覆土内
における状態から人為的なものであることは明らかである。またこの礫群は住居址の床面上
り少し浮いており、このことから廃絶後そんなにたないうちに何かに再利用されたのではないか
と思われる。

礫群内より出土する遺物としては、ロウ石製品、手摺土器、丸底の須恵器のツボ(焼成後
に底部に人為的に穴があけられている。)等が出土している。何か特殊な遺物が多く、祭祀
的なにおいもするわけであるが今後の検討にまちたい。

このように住居址覆土内における礫群の存在は、住居址の廃絶そして利用という点に関して
大きな問題点を提示している。

以上、概略してみたが各住居址の種々のデーターについては次の表を参考にされたい。

※ 表についての説明

主軸方向 カマドの長軸方向をさす。なお方向は次の記号にしたがう。

N 北 S 南 E 東 W 西

平面プラン 方形 H 隅丸方形 SH 隅丸台形 SD

不定形 Fとする

カマド 上の記述Ⅲにしたがう

番号	住居区	地図	グリッド	主軸方向	カット	平面プラン	プラン規模		壁高	調査期間	柱穴	周溝
							NS	EW				
H-C1	I	カ・キ・ク-1.2.3.	N W A	SD		3m50×4m	61		8.24～9.2		X	X
H-02												
H-03	I	オ・カ-2.3.	E C H			3m×2m90	20		9.8～9.30		X	X
H-04	I	キ・タ-8.9.	N ? SH			4m70×4m20	38		8.7～8.14		X	X
H-05	I	キ・タ-8.9.	? ? ?			4m × ?	54		8.7～8.14	O	X	
H-06												
H-07	I	ケ・3.4.	? ? ?			?×2m70	20		8.28～8.31		X	X
H-08	III	D-E-3.4.	N B H			2m80×3m40	52		10.10～10.27		X	X
H-09	III		N ? H			3m60×3m50	50		10.10～10.27		X	X
H-10	I	オ・カ・キ-8.9.10.11.	N A SH			9m50×9m10	48		9.15～10.4	O	X	
H-11	II	ナ-ニ-2.2.3.2.4.	N B SH			3m80×3m	20		9.15～9.16		X	X
H-12	II	ナ-ニ-1.4.1.5.	E C SH			3m30×3m80	13		8.17～8.24		X	X
H-13	II	ド・ナ-8.9.	? ? ?			?×3m50	21		8.19～8.25	O	O	
H-14	II	ナ-ニ-1.2.1.3.	N A SD			3m10×3m50	48		8.24～9.9		X	X
H-15	II	ニ-ヌ-1.0.1.1.1.2.	N A SD			3m50×3m80	50		8.24～8.53		X	X
H-16	II	ヌ-ネ-1.1.2.1.3.	NNE A SH			4m70×4m50	53		8.22～8.30	O	X	
H-17	II	ニ-ヌ-1.2.1.3.	? ? ?			3m40×?	28		8.22～8.30		X	X
H-18	I	ウ-エ-3.4.	N A SH			3m20×3m70	60		8.28～9.11		X	X
H-19	II	ヌ-ネ-1.2.1.3.	? ? ?			? × ?	?		8.22～8.29		X	X
H-20	II	ト-1.2.	? ? ?			?×2m20	47		8.31～9.7		X	X
H-21	II	ネ-ノ-1.3.1.4.	? ? ?			?×4m50	53		9.6～9.10		X	X
H-22	II	ヌ-ネ-ノ-2.2.3.2.4.	N A SD			5m70×5m70	60		9.11～9.19		X	X
H-23												
H-24	I	オ-カ-1.0.1.1.	NNE B SH			4m40×3m30	10		9.8～9.9		X	X
H-25	I	エ-オ-1.1.	? ? ?			1m80×?	23		9.10～9.12		X	X
H-26	I	エ-オ-1.1.	? C ?			2m40×?	16		9.10～9.12		X	X
H-27	I	ウ-エ-オ-8.9.1.0.	N B SH			6m50×6m40	48		9.14～9.27		X	X

作戦番号	地 区	グリット	主軸 方向	ウ ド	平面 面 積 ラ ン	プラン規模	高 度 (cm)	調査期間	柱 周			
									月日～月日	穴	溝	
H-28	II	ト・ナ・ニ-2223.24	?	?	SH	5m70×5m10	32	9.16～9.18	X	X		
H-29	II	ナ・ニ-23.24.	?	?	SH	3m×5m	33	9.17～9.19	X	X		
H-30	II	ト・ナ・ニ-2223.24.	N	A	SH	5m70×5m10	35	9.18～9.22	X	X		
H-31	II	キ・ノ-16.19.20	ESE	C	F	3m80×3m10	20	9.21～9.25	X	X		
H-32	II	ニ・ヌ・ネ-19.2.021	N	A	SH	6m70×7m	71	10.7～10.16	O	O		
H-33	I	ツ・タ・チ-12.13.14	N	B	H	4m20×4m70	30	9.20～9.26	X	X		
H-34	I	シ・タ-10.11	N	?	SH	3m80×4m30	23	9.20～9.30	X	X		
H-35	I	シ-15	?	?	?	?	X	?	58	9.24～9.30	O	X
H-36	I	キ-10.11	E	?	SH	2m70×3m20	23	9.10～9.25	X	X		
H-37	I	ス・セ・ソ-10.11.12 タ-10.11	NNW	A	SD	7m×7m60	80	10.2～10.16	O	O		
H-38	I	コ・サ・シ-10.11.12	N	A	SD	7m50×7m70	50	10.5～10.27	X	X		
H-39	I	ケ・コ-10.11	N	B	H	4m50×4m20	25	10.5～10.9	X	X		
H-40	II	ニ-20.21.3-20	ESE	C	SH	2m80×2m90	30	10.8～10.10	X	X		
H-41												
H-42	I	サ-14.15	?	?	?	?	X	?	60	9.24～9.30	X	X
H-43	I	ク・ケ・コ-11.12	?	?	F	3m60×2m20	45	10.5～10.13	X	X		
H-44	III	E・F-5.6	N	?	H	5m20×3m40	39	10.11～10.18	X	X		
H-45	I	ケ・コ・サ-11.12.13	NNE	B	SH	4m80×6m	40	10.5～10.24	X	X		
H-46	I	ク・ケ・コ-11.12	N	?	SH	4m50×4m50	45	10.5～10.25	X	X		
H-47	III	C・D-7.8	N	D	H	3m50×3m50	32	10.29～11.3	X	X		
H-48	III	D-2.3	NNE	?	H	3m10×2m90	40	11.1～11.3	X	X		
H-49	III	B-1	N	E	?	?	3m70×?	25	11.5～11.9	X	X	
H-50	III	D-E-3	NNE	?	?	?	3m20×3m50	19	11.2～11.4	X	X	
H-51	III	A-B-4	ESE	?	SH	?×2m50	23	11.5～11.15	X	X		
H-52	II	テ・ト・ナ-17.18.19	N	W	D	5m70×6m	53	11.8～11.12	O	O		
H-53	II	ツ・テ・ト-16.17	N	W	B	?	5m60×?	13	11.8～11.9	X	X	

次に種々の事情により検出できなかった住居址に亘地区に亘-55号(ナ・ニ-19)、亘-56号(ヌ・ホ-19)、亘地区で亘-54号(7-12)の3軒を確認し、又亘地区においてブルトーザで破壊されるさい亘-57・58・59号の存在だけ確認することができた。

3. 発掘の成果と問題点

本遺跡は、七月下旬から11月中旬までという長期間にわたる大規模な発掘調査を実施した古墳住居址49軒、高床式倉庫1軒、土塀式遺構131カ所、構造遺構7基等の遺跡を検出し以下でも最大級の遺跡の一つであることが確認された。

又遺物の面においても住居址内より良好なセットとしてとらえられる土器群の出土、後漢時代に作られ全国的にも珍らしいといわれる五銖錢の出土、我国で、和同開珎、万年通宝について三番目に古い神功開寶の出土にさらに神事に使ったと思われるような把手付鍵頭土器出土等……の貴重な資料が得られた。

検出された住居址においては、豊富な資料をもとに平面規模、平面形態、壁高、主軸方向、カマドの形態等の個々のデータと住居址内より出土した遺物との関連を検討することにより住居址形態（大きな意味での形態）時期的特徴を把握することができるよう思える。

さらに今回発掘した上ノ城遺跡では弥生時代の遺構が確認されず、同一台地上、西方約500mはなれた一本柳遺跡では弥生時代、土師時代（鬼高周）の兩東落の存在が確認されている。一本柳遺跡と考え合わせて同一台地上における聚落の移動、発展などの問題にもふれることができよう。

加えて、佐久平における土師時代の解明においても、本遺跡の資料と西近津、中道、北近津とを合わせて考える時、土師時代の編年の資料がほどそろったといえよう。

最後に、7月～11月までの5ヶ月間にわたる間、調査遂行にあたられた佐久市教育委員会並びに参加者各位には深く感謝する次第である。

（藤沢平治　高村博文）

7. 佐久市岩村田西一里塚遺跡発掘調査概報

… 弥生後期環濠集落 …

1. 調査地 佐久市岩村田西一里塚地籍1620～1621番地
2. 調査目的 長野県営佐久市北部地区酒場整備事業及び小規模河川改良事業により、この遺跡が破壊されるので、事前に緊急調査をし、記録保存をする。
3. 調査方法 2×2mのグリッドによる平面発掘調査

4. 調査面積 240グリッド 960m²
5. 調査日程 10月29日～11月30日
6. 調査委託者 東信土地改良事務所
佐久建設事務所
7. 調査受託者 佐久市教育委員会

I 調査の動機と調査に至る経過

市教委では、渕川の小規模河川改良事業に関係して、昭和48年7月11日、県教委文化課指導主事の桐原健氏と共に、調査員生泰敏氏、井上行雄氏、それに市教委木内捷氏の4名にて分布調査を行なった。その結果、西一里塚遺跡においては遺跡の破壊は避けがたく、事前調査をし遺跡の記録保存を行なうことを決定した。

その後、調査計画の具体化をみたものの、7月下旬に開始された上の城の緊急発掘調査が長期間にわたったため、上の城の調査期間中、10月8日と12日に調査担当者藤沢平治氏の立会いの下で、ブルドーザーによる表土削平、また15日には、遺跡が湿地であるため、仮排水溝を設置するなどして、17日に、藤沢平治氏、高村博文氏に調査対象地に、グリッド設定のための基準杭の打ち込みを行なった。

上の城遺跡の關係もあり、一段落したところでようやく、10月29日の本遺跡の調査実施に至ったわけである。

<発掘調査参加者>

藤沢平治(調査担当者 野沢北高校教諭)

土屋長久	武慈金	三石延雄	井上行雄	森泉定勝	新村薰	木内捷	佐藤敏
被辺重義	黒岩忠男	新津海三	白倉盛男	小林秀人	高村博文	臼田武正	
鷹下幸恵	森井裕紀枝	林幸彦	川島雅人	大橋広行	吉川喜一	岩村田及び平	
塙地区住民	上田高校生	岩村田高咬生	野沢北高校生				
(調査協力)	百瀬新治	小原ひさ江	矢口忠良	山岡栄子			

II 西一里塚遺跡の位置の環境

西一里塚遺跡は、耕田遺跡北側の細作地一帯に位置し、東方100mには通称銀鬼塚が存在する。

本遺跡の位置と環境については、「耕田遺跡調査概観」(S48.5)の耕田の位置と環境を参考にされたい。

尚、西一里塚遺跡の標高は 684.7 mである。

III 造構及び遺物

<検出遺構>

弥生時代後期堅穴住居址 (Y-1~11)	11軒
々 土 坂 (D-1~7)	7基
々 堅穴状造構 (T-1)	1基
構 状 遺 墓 (K-1,2,3,4,5,6,7)	6基
環 漆 (K-5)	1基

<検出遺物>

(上器類)

後期弥生式土器片多量(岩村田式) リング箱 50ヶ

壺 壺 高杯 杯 盆 蓋など

(原形に復元可能なもの 20数個体)

土製品 土匙 2

上製円盤 2

(石器類)

凹 石	5
磨製石斧(始刃)	1
磨 石	4
敲 石	2
輕石製臼玉	1

(自然遺物)

骨 片 • 骨 粉
炭化材
炭化米

(本遺跡で特に興味深いことは、環濠内住居址に切り合が認められ、さらに、濠内からはレンズ状異色土層中より、遺物が出土している。岩村田1本柳遺跡では全く切り合がなかったがここで、該期彌生式土器の分類により、千曲川上流域の、後期文化が把握される。さらに岩村田式の細分も可能になった。)

≪西一里塚遺跡演出遺構一覧表≫

遺構No.	平面形	長軸方向	規模(長×短×奥)	炉 坂	複合関係	備 考
Y-1	隅丸方形	北北西	480×440×10cm	方形台状 焼上のみ	D-1,K-2,3,4 に切られている。	周溝あり
Y-2	〃	北	?×590×15	pitあり	Y-3,4を切って いる。	貯蔵穴
Y-3	〃(推定)	西(推定)	?×?×16		Y-2に切られて いる。	
Y-4	〃(推定)	北北西(堆)	?×?×12		〃	
Y-5	〃	北北東	600×430×10	土器 埋設炉	Y-7,6を切り K-1に切られている。	
Y-6	〃	北	680×490×17	〃	Y-5,7 K-1に切 られている。	貯蔵穴
Y-7	〃	北東	585×490×8	〃	Y-6を切り Y-5 D-2に切られている。	
Y-8	〃	西	470×425×16	〃	Y-11を切り Y- 9,10に切られている。	
Y-9	〃(推定)	北西	?×390×5	〃	Y-8,10,11を切 っている。	
Y-10	〃(推定)	北東	?×490×7	不明	Y-8,11を切り Y- 9に切られている。	
Y-11	〃	北西	595×500×21	土器 埋設炉	Y-8,9,10に切られ ている。	
T-1	椭円形	北東	250×225×15	燒 土		
D-1	隅丸長方形	西	160×120×36		Y-1を切っている。	炭化物
D-2	円 形		190×180×31		Y-7を切っている。	炭化物 骨片
D-3	円 形		60×60×7			
D-4	隅丸長方形	西北西	270×220×25			
D-5	椭円形	北	80×70×30			
D-6	半円形	北北西	265×125×50			
D-7	椭円形	西	200×165×45			炭化物
K-1		北	巾 深さ 長さ 90×27cm×20m 以上		Y-5,6を切って いる。	
K-2		北	30×30 (10m 以上		Y-1を切っている。	途中で
K-3		北	20×30) 上		〃) 一致

遺構No.	平面決	長軸方向	規模(長×短×壁)	炉址	複合関係	備考
K-4		北	35×55cm×6m 以上		Y-1を切っている。	
K-5			350~390×90× 以上			
K-6		北北東	150×40cm×6.5 m		K-5に一致	
K-7		北北東	105×35×?		△	

IV 発掘調査の成果と問題点

西一里塚遺跡は、その南に隣接する耕田遺跡を昨年10月に調査した時点において、弥生時代後期大集落の存在が推定されていたが、今回の調査で、それが環濠集落として把握されたことは、意義深いことである。環濠の内側に住居址群、さらには墳墓としての性格を持つであろう土壙群の検出をみたことは、弥生時代後期の集落構造を解明する上で、多量の良好な出土遺物と共に、貴重ともに高く貴重な資料を得ることができたといえる。

検出された堅穴住居址をみると、1軒を除きそのほとんどが切り合い関係を示しており、環濠内を同一空間としてとらえた場合、同一集落内における住居の変遷を把握することも可能である。

また一単位の住居址から出土する土器にも型式的差異が認められ、したがって、本遺跡出土の遺物は、その細密な分析をすることにより、他の単独資料を型式的に比較検討することができる対象とも成り得るであろう。

佐久地方における後期弥生式土器は、藤森栄一氏が昭和11年岩村田式という型式を設定した後、資料的に埋められ、まぼろしの土器と成りつつ、現在にまで至っているが、近年佐久においても発掘調査が盛んとなり、新資料の増加をみる折、西一里塚遺跡における成果は今後、地方の弥生式文化研究を発展させていく上で、その原動力となろう。

今後、遺物等の整理が進められるにつれて、新たな問題点も出てくるであろうし、また、より一層明確にもなるであろう。発掘調査において成果が上がるということは、それだけ多くの問題点を遺跡から見出し、解明することにあると思われる。

最後に、1ヶ月もの間、厳しい寒風の中を調査遂行に与えられた参加者各位には、深く感謝する次第である。

(白田武正)

V 環濠について

今回、西一里塚遺跡で検出された堀は、幅3.70米、深さ0.9米を計り、溝の断面はV字状よりも、溝底が凹み、錐状となり、溝底近くで多くの弥生式土器が発見されている。

この堀は集落の北部及び北東部の確認にとどまつたが、昨年10月調査をみた耕田遺跡地盤（註1）が南溝りとなつていて、やはり、溝状遺構の検出をみており、ここでは幅2.75～3.95m、深さ0.24～0.4m、図上想定をすると、検出されている溝のカーブからして、梢円形もしくは、馬蹄形が考えられる。

環濠は福岡市の比恵遺跡が著者であり、かなりの遺跡で発見されている。関東地方では、横浜市戸塚区上船尾遺跡で（註2）、集落址と共に検出をみており、ここでは、環濠は南北9.5m、東西6.5mの南北に長いほど長方形を呈し、断面はV字状で、溝底に凹みが認められる部分が多い。溝中出土の弥生式土器の器形は、壺、台付甕、高杯、壠など多くの出土をみている。そして環濠内の集落址の北方に方形周溝墓、3基が位置している。

西一里塚、耕田両遺跡の環濠は、検出が全面に及ばず、また集落址も一部分ではあったが、環濠と集落址の間に土塁墳墓5基がみられ注目される。県下の類例としては、飯田市座光寺原遺跡（註3）が最初の発見であり、座光寺原遺跡は弥生後期の集落址で、溝と共に20戸を単位とした遺跡で、環濠は幅3.6m、深さ0.45mを計り、断面はV字溝を呈している。

今後の弥生後期集落址を追求する上で基礎的な良い資料となろう。

註1、佐久市教育委員会「岩村田耕田」郷土の文化財5

註2、鈴木敏弘編「そとごう遺跡調査報告」昭和47年

註3、1962年6月26日 信濃毎日新聞

（土屋長久）

8. 南佐久郡臼田町三分井上遺跡調査概報

I 調査の動機と調査に至る経過

昭和48年度臼田町諏訪整備工事が開始され、工事中の5月1日、臼田町在住の小林秀人（小諸商業高校生）により住居址の断面露出が発見され、佐久考古学員竹内恒、三石延雄、町文化財調査員清水忠二、教育委員高橋武氏等が5月1日～3日にかけ精査したところ、住居址一軒、伴う和泉式土器3ヶ他土器等片が発見され、付近一帯に埋蔵文化財包蔵地が存在する事が判明された。そこで臼田町教育委員会は、すぐに遺跡発見届を国へ提出するとともに、文化財保護を考慮すべき記録保存の計画が立てられた。

その後、11月21日付教育委員会及び工事関係者は、佐久考古学会へ遺跡調査の記録保存を依頼してきた。そこで急きょ12月1日(土)に委員会を佐久市野沢公民館で開き、本遺跡調査を受理すると共に調査団の編成を準備し、2週間で実施する事に決定した。調査団は18名の調査員で行ない、遺構検出作業を年度内に終了し、遺物整理、図面整理、報告作成等は昭和49年度予算で行なうこととなった。

1. 事業の場所；南佐久郡白田町大字三分子井上193番地
2. 事業の目的；西場整備が行なわれ遺跡が破壊されるので工事前に学術調査をし記録保存をする。
3. 事業の概要；調査対象区、井上193番地総面積約1,404m²(3×5mグリッド156)を発掘し調査報告書を作成し、記録保存する。ただし、遺物整理、図面作業は、昭和49年度予算で行なう。
4. 調査日程；昭和48年12月7日 調査回結式及び打合せ会(白田町公民館)
12月8日～17日 発掘作業
12月18日～20日 遺構実測作業
昭和49年 4月 1日～10日 遺物整理、図面整理作業(予定)
4月11日～30日 調査員報告書原稿作成(予定)
5. 主催者；南佐久郡白田町教育委員会 事務責任者 井出節人(白田町公民館)
6. 調査団；団長、由井茂也(会長)、副団長、奥水利雄(副会長)、主任、土屋長久
調査員、由井明、新津明三、井出正義、三石延雄、黒岩忠雄、小林秀人
武藤金、竹内恒、藤沢平治、新村薫、佐藤敏、白田武正(信州大学生)
高村博文(信大生)、林幸彦(国学院大学生)、川島雅人(国大生)、青木幸男(明治大学生)
7. 調査協力；白田町文化財審議員、白田町郷土史研究会、野沢南校郷土研究会

II 井上遺跡の位置と環境

井上遺跡は大字三分子井上193番地に所在し、小森線白田駅の南東800mに位置する。千曲川右岸の河岸段丘に遺跡は立地し、標高780mを計る。付近には古墳が存在し、特に入沢古墳群など、佐久平古墳分布の南限を示し、井上遺跡付近には昔、ここに池があり姫の入水伝説を伝えている。

白田町の遺跡の発掘調査は、芦田洞穴、英田地畠古墳、月夜平等の調査が行なわれていて色々興味深い報告がなされている。

III 遺構及び遺物

1. グリッドの設定；調査地に3m四方のグリッドを南北にA～J、東西に-1～11とし、156グリッドを設定し、平面発掘調査を行なう。

2. 後出諸遺構

時 代	型 式	遺構名	規 模	主 要 遺 物
古墳時代(前)	和泉式	H-1号址	プラン 1辺4.2m	罐(2)、壺、甕形土器
	鬼高式	H-2号址	4.65×5.15m	壺、甕、甕、滑石製品
	"	H-3号址	4.02×4.02m	高杯、杯、壺、甕
	"	H-4号址	5.35×5.25m	甕、壺、甕、小形壺
		筒状遺構1		弥生式土器片、土師器片
	"	" 2	幅 0.95~1.05m. -1.66m	"
		土 坪 1	0.65×0.75m. -0.05m	土師器片、鐵文土器片 (早期)
	"	" 2	1.4×1.1m. -0.68m	"
	"	" 3	1.4×1.05m. -0.24m	"
	"	" 4	2.1×0.95m. -0.42m	"
	"	" 5		"

IV 発掘調査の成果と問題点

古墳時代前期の和泉式土師住居址4軒からなる集落址の一郷を把握した事は、佐久平では今回が初めてである。佐久市泉小学校校庭造成に伴い、和泉式の土師器を多く検出したものの遺構が発見されていない。今回良好なセットの土師器と共に該期の生活様相、窓穴の構造及びカマドのあり方等確々貴重な資料が得られた。

佐久平の土師器の様相は、今回の井上遺跡の資料が加わる事で、和泉、鬼高、真間、国分各期にわたり、佐久市上ノ城遺跡、同中道遺跡、同一本郷遺跡、同盛田遺跡等の資料から、佐久平での土師器の編年が、その概要が整ったわけである。

又、耕田遺跡では五箇所の遺物も発見されている。包含層から鐵文早期土器片が出された。

井上遺跡の窓穴及び生活文化に付随しているであろう、土塙、溝状遺構も興味があり、ことに窓状遺構2は弧状を描いており、円形に検出されると思われたが、一部分の検出になったもののその性格等は今後の個例をまつことにし、数少ない古墳時代、和泉期、鬼高期の住居址群を検出し得た事は大きな成果といえよう。

(由井茂也 土屋長久)

9. 北佐久郡軽井沢町発地

江戸坂下遺跡緊急発掘調査概報

I 調査の動機と調査に至る経過

昭和48年度埋蔵文化財分布調査として遺跡台帳の整備をしていた、軽井沢町教育委員会に、12月10日、軽井沢町大字発地、上発地在住の佐藤一二三氏が畑を耕作中多数の繩文式土器が発見されたと町教委に報告があった。その報告は12月14日、土屋に伝えられた。遺物は全て縄文中期初頭の土器片であり、該期遺跡の単純遺跡であり、良好な包蔵地と推定された。

この遺跡を重視した町教委は分布調査の一環として住居址が存在するかの確認の為、緊急発掘調査をする事に決定。12月17日～25日までの10日間、調査期間をさき、緊急調査の手続きを早急に固め申請した。調査は土屋長久を調査担当者とし、12月17日（月）軽井沢町教育委員会職員、次長山口良造、高橋勝、佐藤和人、佐藤好雄氏等5名で調査し、包蔵地の包含層の確認を行なった。さらに12月19日（水）、晴、藤沢平治、土屋長久は、現地を清査し竪穴の存在する付近を巡回し、つゞく12月25日（火）、晴、武蔵金、佐藤敏、井上行雄、三石延雄、森泉定勝、高村博文、臼田武正、佐藤和人、土屋長久等9名で調査を行なった。

1. 調査場所；北佐久郡軽井沢町大字発地字江戸坂下2141番地

2. 調査目的；農耕により遺跡が破壊されるので、春さきの農耕以前に学術調査をなし、記録保存する。

3. 調査の概要；畠地2141番地地蔵約540m²の、散布地に幅2m×長さ4mのトレントを5ヶ所入れ、遺構検出を行ない、縄文中期初頭の遺構が発見された場合、昭和49年度計画で再度調査を行なう。

4. 調査日程；昭和48年12月17日～25日

5. 主催者；北佐久郡軽井沢町教育委員会

6. 地主；北佐久郡軽井沢町大字発地 佐藤一二三

7. 調査参加者；藤沢 平治 県考古学会員 藤沢北高校教諭 佐久市跡部

土屋 長久 日本考古学協会会員 御代田町教育委員会 軽井沢町中軽

武蔵 金 県考古学会員 佐久市平賀

井上 行雄〃 佐久市岩村田砂田

佐藤 敏〃 佐久市岩村田相生町

三石 延雄〃 南佐久郡臼田町入沢

森泉 定勝〃 佐久市岩村田荒宿

高村 博文 県考古学会员 信州大学生 望月町望月
臼田 武正 グ グ 佐久市下桜井

II 江戸坂下遺跡の位置と歴史的環境

江戸坂下遺跡は、信越線中條井沢駅南方4.5kmの発地盆地に位置している。

この盆地は浅間高原の平坦南端、独立峰、風越山(1,015m)丘陵と八風山(1,315m)山系とによって、緩傾斜の漏斗状地形を形成している。三角形盆地で標高800~900mの高原地にあたる。周辺からは湧水地点が豊富で、それ等は寒まり、温泉となり盆地中央を北西に流れ、発地川となり、北端湯川に合流し、浅間山中腹に源泉をなす湯川はさらに西流し、佐久平へ流下する。

遺跡は三角形盆地の北側八風山丘陵の江戸坂山の南傾斜に立地している。付近の遺跡には(註1)杉瓜遺跡、中尾敷遺跡、木中、高町遺跡、上郷遺跡があり、ことに中尾敷では2重の高さ6m、巾8mの土居とその掘り、鉄斧、鐵鎌、刀子、石臼(平安中期)が発見され、又木中から高町には、段状遺構、土累、L字形状土堤があり、礎礎(ゼンダナ)と呼称され、この地を林道改修の折には、五輪塔、古錢、人骨が発見されている。

上郷では、地下1mから壺に入って支那鏡1貫500枚、宋、明、元のもの47種が発見されている。

以上が周辺遺跡の概略であるが、茂沢南石堂遺跡は、発地盆地の西端尾根の裏側に位置し、江戸坂下遺跡から西方4.5kmに位置している。付近の考古学的調査は七度が行なっているので、それにたよりたい。(註2)

この発地地方に人々が集落を営んだのは、歴史時代に至り、明らかとなり、平安末~室町時代にかけてのことである。木中、高町の段状遺構、又その山頂を高城(たかじろ)と称し、山城を残し、当時栄えた事があったであろう。今日「発地千軒」と伝承し、7寺8堂があったと伝えられている。

しかし、付近に文献史料がなく、わずか岩村田大井法華堂文書中に、誓願の事が文明2年(1470)にみえるのみで、中世、山城及び城遺構が牧場的な要素が多分に強いが、背景の氏族については全く不明となった。

最近の平林宮三氏「千曲の浅瀬」によれば(註3)佐田姓相木氏の消長を考察している。相木氏が長倉を領していた事は、昭和5年、栗原英次により(註4)指摘されているものの、しかば、桜井沢、御代田、横根付近まで及んだ、長倉郷及び長倉牧の内、どの地域に、相木氏が居住及び所領したかは、今日まで不明となつてきている。長倉の中心地である室町期の豊昇付近につ

いては、御代田町文化財審議委員大井豊氏が、「郷土史考」にくわしく述べております(註5)梨沢の長倉城及び長倉氏もその存在が明らかであり、梨沢城の大井氏、その隣側が長倉領主兼長倉牧奉行の居城である長倉城等、付近に、依田氏が所領したという古文書がみえる。

長倉氏についてふれれば、嘉慶4年の大宮造営目録には玉垣三間後としての長倉氏が出ており、そしてそれが天正6年の大宮前宮造営帳には、瑞應三間、長倉之内、横垣、発地、杏樹の三ヶ所となっている。

また諏訪神社御符札古書には

- ・ 寛正3年(1462)壬午宮頭 長倉河江木入道常栄
- ・ 文明8年(1476)加 須 長倉御符札三貴 阿江木新左エ門尉光康
- ・ 文明14年(1492)長倉郷 阿江木源朝康
- ・ 文明18年(1496)長 倉 阿江木源達延

など出ており、この阿江木氏は、平林によれば、南佐久郡北相木村の坂の上に本城を、明応9年(1500)に築城したもので、山の渓谷や、相木川の流れを巧みに利用した平城であり、依田姓であって、芦田氏、平尾氏、平原氏と共に登場し、その氏族の消長は、永享12年(1440)から出現し、すでに室町中期以前に依田氏から芦田、相木氏が分派したといわれる。

文安2年(1446)阿江木入道道永が、桜井氏と共に布施村を支配し、阿江木氏居城址は正方形の土居と堀が今日残っている。その後相木氏は、天文10年前後に武田氏に落つり、武田氏滅亡の直後、小田原の北条氏に沮し、郷里を亡命し、主として上州方面に蟄居した様である。以上が相木氏の消長である。

望月牧の朝廷への貢馬は、後醍醐天皇、建武年間(1331年頃)まで行なわれ、その後信の牧は地方豪族により馬が飼育され、軍馬として大きな経済力をもち、武士階級の発生にも伴ったが、相木氏の所領した地域は、布施、長倉共に、牧場の存在したところで、発地中屋敷、高城等長倉にあっては、発地方が考古資料とよく合致し、発地～茂沢付近の室町期の文化は、相木氏にかかわる諸遺構及び文化として扱ってもさしたる事はなかろうかと推定される。

江戸坂下遺跡と直接に関係はなかったが、発地付近の歴史的環境として、相木氏の長倉所領の位置について今回扱ってみた。

III 遺構及び遺物

1. 2×4mのトレンチを主に、遺物散布地である江戸坂下地盤にA～Eトレンチを設定し、遺構検出にあたった。
2. 遺構は、今回の範囲からみられず、出土した遺物は次のとおりである。

時 代	型 式	遺 物 内 容	
縄文時代前期	諸儀式併行	深鉢形土器片	少 量
ク 中期初頭	梨久保式併行	土器・深鉢形土器片	多 量
		石器・打製石斧	3
		凹石その他	少 量

IV 発掘調査の成果と問題点

縄文中期初頭の遺跡での住居址の検出例は、東北信にあってはあまり多くない。

北信濃、飯山市連、深沢遺跡（註6）、戸倉町羽呂、蝶葉遺跡（註7）等が顕著となっており、とくに後者の蝶葉遺跡では全般的に新潟県地方における縄文式土器と類似する要素が強いとされている。

今回行った江戸坂下遺跡は、遺物散布範囲を調査したが、遺物の包含層の把握に留ったが、これも、縄文中期初頭遺跡の立地及び生活文化を知る上でよい経験となった。

来春さらには付近を精査して、調査を計画だてたい。縄文土器片は、いづれも小片で、わずか器形を知り得るが、破片には全く、まめつは観察されない。遺跡の北側がすでに、江戸坂山に接し遺物の流下は考えられない。

本調査に伴い、発地付近の歴史的環境、特に長曾郡阿江木氏の居住地について考古学的にふれた。発地付近の中世史解明の1資料となれば幸甚である。

註1. 長野県教育委員会「入山跡及び經井沢地区」『西鉄線復線化等開発地域埋蔵文化財緊急分布調査報告書』35～42 p 昭43

土屋長久『經井沢町の遺跡』經井沢町教育委員会 昭43

註2. 上屋長久『信濃長倉牧址にある上氏牧場遺構 - 発地中屋敷遺跡 - 』『長野県考古学会誌』第9号 昭45

註3. 平林富三『信州佐田姓相木氏考』『千曲の漫瀬』62～79 p 昭48

註4. 萩原英治『信濃庄園の研究』 昭5

註5. 大井 登『郷土史考』(一)～(六)御代田町時報 昭47～48

註6. 長野県飯山北高校地歴部『深沢遺跡研究概報』 昭41

註7. 関 孝一『長野県埴科郡戸倉町蝶葉遺跡の調査』『信濃』III、18の4

（藤澤平治・土屋長久）

10. 佐久市大字三塚字東野沢田三塚遺跡発掘調査概報

I 調査の動機と調査に至る経過

昭和48年度県営佐久平(2)地区は場整備事業が開始され、工事中の11月県教委文化課より、市教委へ三塚遺跡が破壊されているとの通報があったので調査するよう連絡を受けた。急き上佐久考古学会員藤沢平治、土屋長久、臼田武正の三氏と市教委木内捷の4名で精査したところ、住居址の1軒、それに伴なう鬼高式土器片多量を発見した。

その結果、三塚地籍においては、遺跡の破壊は避けがたく工事前に調査をし、記録保存を行なうよう県教委へ要望した。

その結果、12月5日県教委桐原健指導主事の来市をみ、遺跡現場にて、東信土地改良事務所北沢氏、土地改良区常任理事野村氏、佐久考古学会員藤沢平治、土屋長久両氏、請負者小林建設(株)小林氏、市教委より高畠社会教育課長、木内捷の8名で協議の結果記録保存する事を決定し現場での発掘作業を1月末日を以って終了させる事、また今回の調査は発掘作業のみとし遺物整理、報告書の作成については49年度に第二次調査として改めて契約する事を条件に東信土地改良事務所と佐久市教育委員会は12月19日付を以って発掘調査委託契約を締結した。

調査団の構成について市教委は佐久考古学会長由井茂也氏に依頼し、1月5日佐久考古学会は発掘担当者に藤沢平治氏調査主任に土屋長久氏を決め1月13日(日)より調査実施することになった。

1. 調査箇所 佐久市大字三塚字東野沢田477-1番地
2. 調査目的 県営は場整備工事が行なわれ、遺跡が破壊されるので工事前に学術調査し記録保存する。
3. 調査概要 調査対象区 東野沢田477-1番地約200m²(3×3グリット)を発掘調査をして学術報告書を作成し記録保存とする。但し遺物整理、図面作業、報告書作成については、49年度に第2次調査として改めて契約する。
4. 調査日程 昭和49年1月8日 ブルトーザーによる表土削平
※ 1月13日 調査団結式及び打合せ
※ 1月13日 発掘作業
～24日
※ 1月25日 遺構実測作業
～26日

5. 調査委託者 東信土地改良事務所
6. 調査受託者 佐久市教育委員会
7. 調査事務局 佐久市教育委員会
8. 調査団
- | | |
|------|--|
| 顧問 | 由井茂也（佐久考古学会長、日本考古学协会会员） |
| 団長 | 野沢平治（〃 総務幹事、県考古学会員） |
| 調査主任 | 土屋長久（〃 企画幹事、日本考古学协会会员） |
| 調査員 | 白倉盛男 井出正義 由井明 白田武正 高村博文
武藤金 三石延雄 井上行雄 森泉好治 森泉定勝
嵐山富雄 草間富士夫 |
| 調査協力 | 野沢北高校山岳部 野沢南高校郷土研究会 |

II 遺跡の位置と環境

本遺跡は佐久市大字三塚部落の南に接する三塚字東野沢田477-1番地に所在する。本遺跡西方約750mに片貝川が南より北に流れ、東方約1,500mに千曲川が流れ、この両川の間に篠高地が形成され、日田方面より野沢中学校をとおり、さらに本遺跡から北に流れており、その最高部に本遺跡は位置し、標高669.7mを計る。

本遺跡の所在する三塚地籍は、西方に泉小学校遺跡、鶴田遺跡、北に三千束遺跡、市道遺跡、南西部に中道遺跡が登録されており、更に野沢地域、桜井、岸野、前山、跡部の各地域、特に片貝川流域は弥生時代から古墳時代にわたる遺跡が多数存在している。

本遺跡を含む三塚地域は、上巣の古い時代（少なくとも和泉期）より終末期（圓分期）に至る集落遺跡が存在することは三塚及び上記遺跡より確認されている既出遺物によっても明らかであり、今回の調査をも一地点である。

III 遺構及び遺物

3m×3mグリッドを南北にA～J 東西に1～16とする160グリッドを設定、平面発掘調査を実施し、住居址5軒、土塀2、の遺構を検出した。

〈住居址1号〉

南北720cm×東西725cmを計る比較的大形の住居址であり、破壊された石組のカマドを検出。

出土遺物

土師器 カメ、ツボ、コシキ、ワン、マリ、ツキ

須恵器 カメ、ツキ、ツボ

滑石製臼玉(1)、木器、骨片、骨粉、歯、土模丸玉

<住居址2号>

南北3,90cm×東西3,90cmを計る

北側より破壊されたカマドが検出された。この住居址は3号住居址の中に、すっぽりと入った状態で検出された。

出土遺物

土師器 カメ、ツキ

須恵器 カメ

滑石製臼玉(3)、凹石、刀子、骨片

<住居址3号>

東西6,20cm×南北6,60cmを計る

南部北側に、2号住居址が営なまれ、北側壁にカマドが検出され、特に土器片が多量に出土している。

南壁は道路にかかるため検出できなかった。

出土遺物

土師器 カメ、小形手挽

須恵器 ハソウ片

凹石、砥石(2)

<土塙1号>

南北1.6m×東西3.2m、深さ50cmで1号住居址の東壁を切って存在し、1号住居址の廃絶後、営なれたことは明確である。次に記す出土遺物から考えて墳墓としての性格のものであろう。

出土遺物

土師器片少量、古錢(明道元宝)、铁製直刀、刀子、骨粉

<土塙2号>

南北210cm×東西147cm、深さ23cm、つぎに示すように、土塙1号とやや異なり不整形で、3号住居址の東北部に位置している。埴土の状態は、一時的に人工的なものであり土塙1号と同様である。

<遺溝外出土遺物>

遷文後期土器片少、弥生後期土器片少、土師、須恵器片、かわらけ、古墳（伴存酒室、瓦和酒室）、滑石、滑石軸車、武石、鐵鍬

IV 発掘調査の成果と問題点

本遺跡の自然環境から考えて、西方の山麓地帯から流出する水は、片貝川をはさむ低地をうるぬし、農耕地として治水技術の発達しない時代から充分に利用され、佐久地方における最も少ない水田地帯として重視された所であろう。

位置のところで述べたように、本遺跡は三塚地域に広がる集落遺跡の一部であると考える。今回の調査において（遺跡整理、調査をまたねばならないが）鬼高明より当分期の住居址とすべきられる。

泉小学校遺跡と、共に考えると少なくとも和泉朝より当分期に至る時期の集落が認められていたと考えられる。又この上野岸の集落遺跡が現在の三塚部落の東にも存在したことは明らかであり、すでに工事の行なわれた南側にも存在したものと推測される。

遺跡遺物の性格については、今後の書物整理調査にまたなければならないが、1号住居址の出土遺物から当時の生活用具のセットを知ることもできよう。しかし住居址と土器との関係はこの調査で考えることは困難であるが、十数や白玉季の出土遺物から精神的な面にまで及ぶる調査資料を得ることができたことは大きな収穫といえよう。

文献資料のないといってよいこれら遺跡の時期における人々の歴史を知るために、彼らの活動した地域の調査を全面的に行なうことによって、より明確になると思われるが、更に精神的自信を知るうえに重要な遺跡であると推測できる。

例年になく寒寒での調査となつたにもかかわらず最後まで調査に努力していたといった発掘調査参加者並びに調査員諸氏に専ら敬意を表す次第です。
(藤沢平治・木内捷)

編集後記

佐久考古第2号は、2篇を小値考古学会誌第1号に貴重なレポートがあり収録しました。ここに明記します。その他、武蔵、佐久河会員の意見及び資料を載せました。佐久平は各地域で、今年も、行政路線という記録保存が毎月の様に行なわれています。諸先生、会員及び新規考古学生のたえまなき努力により学術調査として行なわれ、今後佐久平の原史・先史時代研究の資料となると思い、その要覧としましました。

天然記念物の保護についても費いました。引継ぎ次号の原稿を事務局までお送り下されば幸いです。(N.T.)

佐久考古 No.2 昭和40年11月1日
編集者 藤沢平治・土屋長久・臼田武正
発行者 由井茂也
発行 長野県佐久考古学会
(佐久市藤部藤沢平治方)

佐久考古

SAKUKOKO THE SAKU ARCHAEOLOGICAL SOCIETY

目 次

- ◆「佐久考古」発刊にあたり……………由井茂也(1)
- ◆昭和50年度・51年度調査概報……………(1)
- ◆学会行事……………(2)
- ◆環浅間高山蝶保護対策協議会発足……………(2)
- ◆市道遺跡調査報告書刊行会……………(3)
- ◆(研究発表)長野県における古式土師器の成立…花岡弘(3)
- ◆岸野村誌刊行会発足……………(4)
- ◆編集後記……………木内・土屋(4)

— グ ラ フ —

岸野榛名平遺跡、群馬県矢継遺跡、平根菖蒲平遺跡

佐久市後沢遺跡及遺構全体図

岸野滝ノ峰古墳出土剣(復元図)

いち 市道

長野県佐久市市道遺跡調査団

(団長 藤沢平治)

長野県佐久市市道遺跡の発掘調査

本書は、昭和49年7月31日より9月20日までの52日間にわたって発掘調査された、長野県佐久市大字三塚に所在する市道遺跡の調査報告書である。

古墳時代後期鬼高郡を中心とする10軒の住居址、堅穴状造構等の発掘から、当時の人々の社会・生活を明らかにしようと試みた。

調査は遺構と遺物の関係(遺物の出土状態)に焦点をおき、その観察、データ化に努め、分析を進めた。

また、土器器については、詳細なる観察に基づき、縄年研究、土器作技製術等に新たな視点から示唆を与えるものである。

本書の分析に使用した基礎資料は、別図、遺物台帳として呈示してある。

主要内容

I 発掘調査の経緯

V 第9号住居址土の炭化米

II 遺跡の概観

VI 市道遺跡出土の土器器について

III 略序

VII 市道遺跡の調査および記録方法について

IV 遺構と遺物

附 総括

〒384-01

長野県佐久市大字三塚

佐久市教育委員会

電話 0267-62-1211

(内線 317-2)

- 体裁 = B5判・上製・函入・本文横組346頁・図版61頁・別図6図
- 領価 = 6500円 送料500円
- 申込方法 = 郵便振替長野9135番
- 申込先 = 佐久市教育委員会

市道遺跡調査報告書刊行会

信濃佐久平古氏族の性格とまつり

A5判 上製函入 260頁

価格 3000円

土屋長久編著
A5判 上製函入 260頁
価格 3000円

古墳による古氏族の追求

上野国に隣接する信濃佐久平の末期古墳群を対象に、浅間高原に連なる中部高地佐久盆地の群集地に確執し、大和朝廷影響下の古墳群から古氏族の挙出、特に東国四ヶ国(甲斐・武藏・上野・信濃)に設置された勅旨牧(官牧)等の、軍事的馬文化を基礎とした古墳群の挙出によつて、末期古墳群にみる大和王朝勢力の侵出をとらえた佐久アジールの崩壊。著者他五名による論文一式を収録。

内容

序 大場裕雄/序 由井茂也/小澤市与良/古墳群研究会

与島清/土原透久/佐久市岩村田東一本柳古墳、竹内恒、土屋長久/浅井村吉一/古墳の調査/畠山忠雄/北佐久郡

望月町吹上山の神古墳について、土屋長久/祭祀ある古墳の一例——佐久市下前田原古墳、土屋長久/佐久盆地における祭祀遺物について、藤沢平治、土屋長久/佐久市岩村田東一本柳古墳、藤沢平治・高村博美/信州佐久平の後期古墳群について、土屋長久/信濃ににおける横穴式石室の崩壊に關する問題、土屋長久/台面古墳の成立とその性格、土屋長久/信濃佐久平の古氏族の性格——佐久市岩村田東一本柳古墳の調査、木内徳、土屋長久他七篇、別刷、上代官牧分布図

丁三九五〇

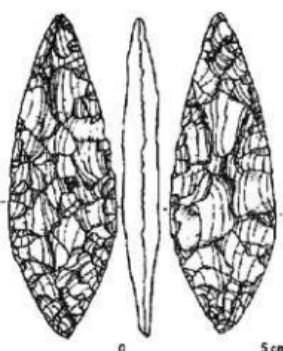
信濃佐久平古氏族の性格とまつり刊行会

西林(○六七四)五〇一九

群馬県宮城村天縫遺跡

(所有同村前原豊)
(実測・白石浩之)

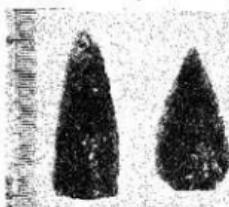
(1:2)



平根菖蒲平遺跡

岸野棟名平遺跡 ↑

昭和52年7月18日、岸野村誌調査
による遺跡調査で木葉形尖頭器と
して確認された。(1:2)
(畠山・武藤・土屋による)



和和29年5月信濃史料調査折
郡内で最初に確認された旧石
器時代尖頭器 (永峯光一、
樋口昇一氏による。)(1:2)

佐久市後沢遺跡 ↓

昭和51年6月より52年6月まで、台地約4000m²
を対象に全面調査、方形周溝墓等が発見された。
弥生時代の文化庁、重要遺跡でもある。



台地遺跡より浅間山を望む



弥生式の焼失住居址(第7号)

岸野港の跡地(復元図)(1:3)

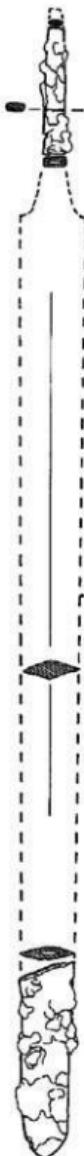
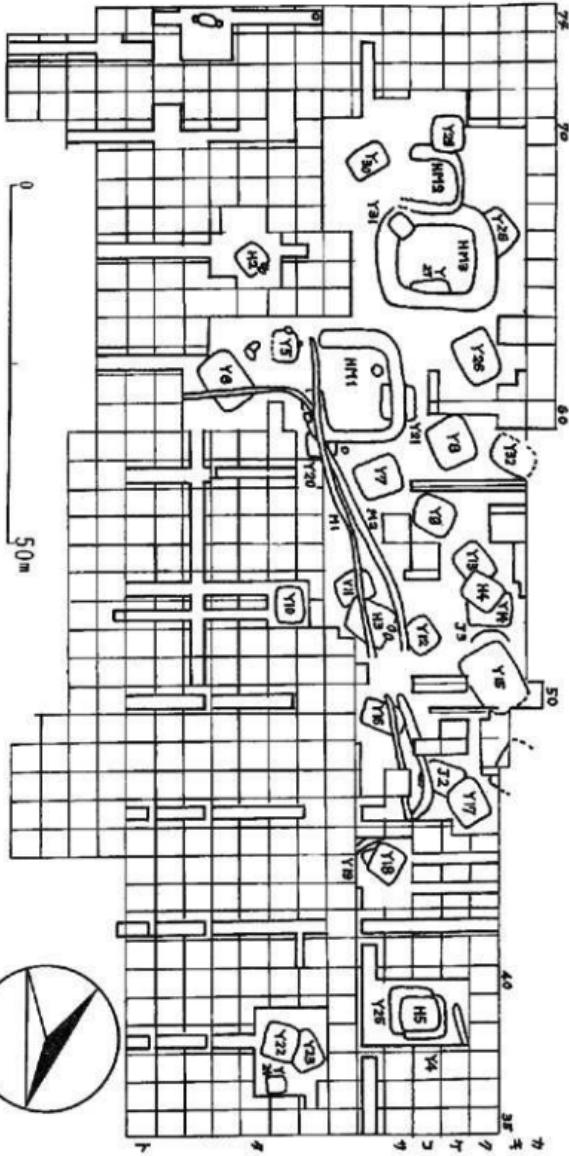
左久平では跡が確認された最初のもの(復元は、少し小型であるかもしれない。) 土団

後沢遺跡遺構Ⅱ地区全体図(3月15日現在)

暫定式後頭遺跡が半で、尾根に連なる台地上に墓が位置している。
住居跡を切っており、該町遺跡では意識ある遮断。(後沢遺跡No.3より)



50m



弥生時代		古墳時代	
第Ⅰ期		第Ⅱ期	
5 佐久市伊勢宮遺跡出土 (小諸市火山博物館蔵) (1 : 2)	2 立科町中原上遺跡 (羽田氏藏)大塙弘行著測 (1 : 3)	3 久山式土器 1 ~ 4 (立科町中原上遺跡) (羽田氏藏)大塙弘行著測 (1 : 2) 3 (1 : 3)	4 10~14 佐久市道遺跡 (第1号住居土内) (1 : 3)
6~9 佐久市耕田遺跡 白田武原圖 (1 : 2)	1 11 12 13 14	7 8 9	5 6 7 8 9 10
佐久平古式土師器 (佐久考古No.3) 花岡弘付図			

「佐久考古」3号の発刊にあたり

(佐久考古学会長 由井茂也)

佐久考古3号を発刊する運びになった。改めて頗みると昭和48年以来1、2号とつづいて発刊されたが、そのあと切れ目をつくった。それはどんな理由だったか、とにかく3号の発刊が決ってホットしたのであるが、ホットしたらまた切れ目を作るかもしれない。これから活動のためにもあれこれ考えたい。云うまでもない「佐久考古」は、佐久考古学会の活動の足跡であり、歴史の一里塚である。

「佐久考古」をみると会員の生々の足跡があり佐久の考古学的全容が親しみ深く肌に伝えられてくる。「佐久考古」はその内容はすぐれて豊富で重要な研究の成果であることは云うまでもないが何か一つ気がかりがある。それは編集を担当者だけに一切の負担をかけているという点である。

担当者の行動半径をはずれると何もなくなる。まかせばなしで安易に眺められていたためではないだろうか。

「佐久考古」は、佐久考古学会の外にあるものではない、会

員の中には調査や研究に便宜な機関にあるもの、正反対の立場にあるものがあるのは当然である。また、地域も広いしたいへんであるが、行動半径を固定させない方法を担当者と全会員が心がけなければならないのではないか。会員の交流を一段ときみにつけることも大切だろう。

佐久は埋蔵文化財の宝庫であり非常に重要な地域である。一面に於ては日々に破壊されてゆく遺跡の数が増し、平地も丘陵も山野も且てなかった大規模な開拓で環境も地形も過去の自然の姿を失ないつある。今日は調査研究とともに文化財の保護も重要な仕事となっている。佐久考古学会は、地域に於ける文化財関係の機関や研究者同好者との連携を図って活動の輪を拡げなければならぬ。佐久考古学会「佐久考古」の発展に大きな期待をかけ発刊の挨拶とする。

◇昭和50年度・51年度調査概報

1. 家地頭1号古墳

- ① 遺跡所在地 佐久市大字常田字家地頭337の1-339の1
- ② 調査委託者 小城市大字森山39の1西山水植
- ③ 調査受託者 佐久市教育委員会
- ④ 調査面積 約800m²
- ⑤ 調査原因 地宅造成工事により開発前の学術調査保存
- ⑥ 調査期間 昭和50年10月19日～10月31日
- ⑦ 調査担当者 土屋長久
- ⑧ 調査参加者 (50音順)

土屋長久(団長)、井上行雄、今井正晴、白田武正、大橋

広行、川島雅人、木内捷、佐藤敏、白倉盛男、花岡弘、林幸彦、藤沢平治、前原豊、三石延雄、武藤金、村山好文、森泉定勝、協力(浅間中学校生徒)
⑨ 調査概要 円墳、片袖式の横穴式石室、石室はN-13-E、塚原岩屑流残丘上に横築、既に盛土もなく、主体部は露出。出土品は、円筒埴輪片(5)、形象埴輪片(4)、切子玉(2)、滑石製(3)、ガラス小玉20、馬具(雲珠)(1)、鐵(2)、須恵器片、土師器片、骨片、寛永通宝20

◇昭和50年度・51年度発掘届件数

発掘期間	遺跡名	遺跡所在地	時期	発掘の原因	主体者	担当者	備考
10・16～10・31	家地頭1号古墳	佐久市常田家地頭	古墳	個人宅地造成	佐久市教委	土屋長久	報告書近刊
11・20～51・1・31	跡 部 町 田	佐久市跡部町田	古墳～平安	圃場整備	*	藤沢平治	
11・12～12・31	細 田	佐久市鳴瀬細田	古墳	*	*	*	
5・2～5・18	県	北佐久郡軽井沢町長倉	弥生	国土地手造成	浅間古代(研)	森島 錠	信濃考古 No.35
7・19～52・3・31	後 沢	佐久市小富山字後沢320	縄文	宅地造成	佐久市教委	藤沢平治	
11・8～11・30	下 吹 上	北佐久郡望月町協和	縄文	学術調査	望月町教委	森島 錠 福島邦男	信濃考古 No.42

2. 跡部町田遺跡

- ①遺跡所在 佐久市大字跡部町田227番地
②調査委託者 東信土地改良事務所
③調査受託者 佐久市教育委員会
④調査面積 約2,200m²
⑤調査原因 稲荷園場整備事業による開発前の記録保存
⑥調査期間 昭和50年12月1日～12月31日
⑦調査担当者 藤沢平治
⑧調査参加者 (50音順) (以下同)
藤沢平治(長井)、井上行雄、今井正晴、白田武正、大橋広行、川島雅人、木内捷、黒岩忠男、小須田盛風、小林悦雄、佐藤敏、白倉盛男、花岡弘、林幸彦、三石延雄、武藤金、森泉定勝、野沢南高等学校土石班(石井恭子、白田秀美、川村文子、菊地由紀子)、(浅間中学校生徒)
⑨調査概要 住居址5軒、土坑2ヶ、溝状遺構1ヶ。住居址はいずれも、鬼高期に比定される。1号址(4.3m × 4.5m × -26cm)隅丸方形、2号址(3.3m × 2.5m、-26cm)隅丸長方形。3号址(4.8m × 4.1m、-20cm)隅丸方形。4号址(5.2m × 5.46m、-45cm)同。5号址(4.6m × 4.3m、-20cm)同。1・2号址に多量の炭化材、土器は、甕、壺、等。特に1号址から滑石製品2ヶ、5号址から小形手づくね上器が検出された。

3. 綿田遺跡

- ①遺跡所在 佐久市大字鳴瀬字細田、3258の1・2、3259の1、3260の1、3261の1、3262の1番地
②調査委託者 東信土地改良事務所
③ 受託者 佐久市教育委員会
④調査面積 約600m²
⑤調査原因 稲荷園場整備に伴う、開発前の発掘調査保存
⑥調査期間 昭和50年11月11日～11月30日
⑦調査担当者 藤沢平治 (佐久考古学会副会長)
⑧発掘調査参加者 井出正義、井上行雄、白田武正、木内捷、黒岩忠男、佐藤敏、島田恵子、白倉盛男、土屋長久、新津開三、花岡弘、三石延雄、森泉定勝、武藤金、与良清
⑨調査概要 土坑遺構4ヶ、溝状遺構1ヶ。土坑は、1号プラン(1.56m × 1.20m、-0.39m)隅円形。2号(3.04m × 1.14m、-0.8m)半円形、3分(2.50m × 1.30m、-0.44m)小判形。4号(2.08m × 1.40m、-0.65m)横円形。5号(2.5m × 、-0.7m)長方形。いずれも出土遺物なし。溝状遺構(幅3.4m、-0.6m)は、光沢の壁が出土している。

4. 後沢遺跡(埋蔵文化財包蔵地第168号)

- ①遺跡所在地 佐久市大字小宮山字後沢320番地外
②調査委託者 佐久市開発公社
③調査受託者 佐久市教育委員会
④調査面積 約4,000m²
⑤調査原因 市公社宅地造成事業に伴い、事前に試掘調査をなし、本発掘調査をし、調査記録保存
⑥調査期間 昭和51年6月24日～7月7日(試掘調査)
昭和51年10月3日～昭和52年6月21日
⑦調査担当者 藤沢平治

⑧調査参加者 藤沢平治(団長)、林幸彦(主任)、川島雅人、佐藤敏之、井出正義、小林ゆり、前原豊、井上行雄、佐藤敏、三石延男、今井正晴、白倉盛男、武藤金、白田武正、島田恵子、村山好文、土屋長久、森泉定勝、木内捷、根本かもめ、与良清、熊谷滋美、八町利佳子、黒岩忠男、花岡弘、小坂井孝経、福島邦男、野沢南高校郷上級、野沢北高校生、小諸商業高校生、北佐久農業高校生、浅間中学校生徒、福島英子(事務)

⑨調査概要 遺構は縄文前期(6軒)、中期(1軒)、弥生中期(2軒)、弥生後期30軒。時代不明が2軒。方形周溝墓3基、土坑17ヶ。特に東信地区では始めての方形周溝墓をみた。これは千曲川水系に13基、天竜川水系に41基、縄文前期の住居址は開山式の良好な土器が検出され、又弥生式住居址第7号址が焼失住居址として検出をみ、完全に近い土器が約20点出土し、今後弥生式土器の縄文の基礎資料となるだろう。

◇学会行事 昭和51年度・昭和52年度

●学習会(於 浅間会館)

林 幸彦「佐久における旧石器文化について」3月13日
土屋長久「佐久平における古墳について」

●市道開通式(於浅間会館)

土屋長久「佐久地方の古墳と集落について」昭和51年3月
F・I・田 武正「佐久地方の後期弥生時代」昭和51年8月

●入門講座 昭和52年2月20日(於 浅間会館)

藤沢平治「縄文時代入門教室」

高村博文「遺物の実測技術について」

●学習会(昭和52年3月20日)

藤沢平治「縄文土器の文様を中心として」野沢会館
高村博文「後沢遺跡の方形周溝墓について」遺跡現場

●講演会

丸山敬一郎「佐久地域分布調査の成果について」
昭和50年9月5日(於 浅間会館)

森島 稔「長野県における旧石器時代」

昭和51年6月13日總会(於 広域事務所)

○佐久市公民館(午後1時より)(於 浅間会館)

「佐久の誕生から現代まで」昭和52年

①白倉 盛男「佐久のあけぼの(浅間山と佐久)」1月29日

②藤沢 平治「佐久の原始時代」2月6日

③土屋 長久「佐久の古墳時代」3月19日

④与良 清「佐久の中世から近世まで」4月9日

⑤与良 清「 」(後) 5月7日

◇環浅間高山蝶保護対策協議会発足

高山蝶の保護について、No.2で扱ったが、昭和52年4月19日(於軽井沢町)小諸市、東部町、真田町、御代田町、軽井沢町、長野原町、権兵衛村の文化財蓄積委員会、文化財係において、浅間山々巣の高山蝶・植物の保護について、パートナーを強化する事になった。群馬県でも昭和52年4月より群条例により保護指定を行った。

◇研究発表

『長野県における古式土器の成立』

花岡 弘

近年、いわゆる古式土器の研究が隆盛をきわめていると言える。これは、開拓による資料が増加してきた事、墓制との関連、特に方形周溝基、茎生期古墳の問題等に起因するものと思われる。

こうした中において、本稿は、長野県における古式土器の成立について、県下出土後期弥生土器及び古墳代前期の土器群の編年研究によって解明しようとするものである。

現在、県内各地において、古式土器の資料は増加しつつあるが、その成立に関して考究された論考は少なく(註2)まだ不明な点が多いと言える。

資料分析には、現時点までの正式な発掘調査による土器を中心として、更に既存資料の補足を加え、その型式学的分析を主に行なった。その結果、既に先輩がその指摘を行なっているけれども(註3)、後期弥生土器に接続する土器群を構成する要素が次の三点に帰納されることが看取されたわけである。

I. 県内の後期弥生土器のカタゴリーに含まれられるもの

II. 東海系(特に東海地方西部)の上器群

III. Ⅱの土器群よりも広い分布を有する土器群

特に、Ⅱ、Ⅲの土器群は、四つに区分した地域(千曲川流域、松本地方、諏訪地方、天龍川流域)において、共通する要素として認められる。又、Ⅲの土器群はI、Ⅱの土器群に後出するもの、換言するなら、I、ⅡとⅢは時間差を有するものとして把えることが可能である。

次に、編年に関しては、大參義一氏の東海地方西部における後期弥生土器から古式土器群の研究成果(註4)及び畿内における諸成果(註5)を採用することにより、分析資料を第Ⅰ期～第Ⅲ期の三時期に区分することが可能となり、県内における後期弥生土器から古式土器群に至る推移を把握することができたのである。そして、第Ⅲ期をもって土器群の成立とした。すなわち、第Ⅲ期から古墳時代の開始

を考えたいと思う。

県内において、古式土器を出土する住居址は、重複する例がほとんどないが、今後の調査により、重複する例あるいは資料の増加が予想される。それに伴い、施設が割りきれる可能性も大きいと言わねばならないが、基本的には変わらないものと思う。

最後に、論文指導にて御指導・御謹賛頂いた小林三郎先生、有益な御教示や御心を頂いた桐原 健、丸山徹一郎、日田武正・大橋広行の諸先生、先輩、本稿発表に際し種々便宜を図って頂いた上屋長久氏、資料収集に際し、お世話を頂いた多くの方々に心からお礼申し上げる。

1. 従来、南関東の和泉式土器以前、或いは小型丸鉢を中心とする祭礼的性格を備えた一群を呼称していたが吉岡康鶴氏の言われるよう、「弥生式土器の地域性と器形を繼承するグループに設定するのが妥当」と考えている。本稿では、第一、二期の土器群を呼称したいと思う。

2. 桐原 健「信濃における古式土器の位置」信濃第18卷第8号、昭和42年 この他、岩崎卓也、篠沢 浩、宮沢恒之の各氏が地域的編年と関連して論究されている。

3. 前掲註2の桐原氏の論文の他に、湯川悦夫・加納俊介氏により指摘されている。湯川・加納「古式土器の研究(1)」

小田原考古学研究会誌第7号 昭和51年

4. 大參義一「S字状口縁上器考」いちのみや考古No.13 昭和42年

「弥生式土器へ－東海地方西部の場合－」

名古屋大学文学部研究論集(史学)XLVII 昭和43年

5. 安達厚三・木下正史「飛鳥地域の古式土器」考古学雑誌第60卷第2号 昭和49年

笠置雅雄「大和における古式土器群の実態」天理市布留遺跡出土資料、古代文化第26卷第2号 昭和49年

石野博信・鶴見尚功「繩向」昭和51年

◇市道遺跡調査報告書刊行会

顧問 清沼勝(佐久市教育長)

会長 篠沢平治(調査団長)

副会長 上屋長久

委員 吉木秀男、今井正晴、日田武正、大橋広行
川島雅人、木内捷、花岡弘、林幸彦、猪原
農、武藤金、村山好文

事務局長 高村博文

会計監査委員 高畠五男(社会教育課長)、桜井長夫
(社会教育係長)(昭和52年7月22日)

・国際観光都市、軽井沢で避暑される考古学関係者

昭和初期、日本列島に旧石器時代を予測した、M・G・マントー氏が、軽井沢にマントー病院を開業、富平遺跡等調査。晩年北海道へ渡り、アイヌ研究を行う。報軽井沢外人墓地に永眠。

昭和28年軽井沢の文化人により文化協会創立。これによると、三笠宮殿下、三上次男、坂本左近。近年では、齊藤忠、丸茂武重、放大谷哲麿、の諸先生が過世された。町の依頼で、三上氏の飛鳥山石室の調査は、学術調査であった。

又、佐久市、出身の先生には、岩崎卓也氏、信州に近親者がいる、金井塙良一先生がおられる。本年度は、小出義治氏が、別荘視察に来軽された。

◇佐久市岸野村誌刊行会発足（昭和50年より53年まで調査）

昭和50年5月、旧岸野村（明法22年、根岸村と伴野村が合併）内の原始時代から現代まで各分野にわたり学術調査を行ない、村誌刊行会が発足した。50年5月より53年3月までを調査期間とし、考古、古代歴史、出土品、土器長久、武蔵金の三氏が委嘱を受けた。

同地区は、県台帳に遺跡として26ヶ所記載されていたが51年8月31日～52年7月18日の調査で、約30遺跡を確認し10ヶ所近く、遺跡が追加された。（文書では48ヶ所）

岸野には、彦彦王古墳と伝承される日向の御陵や、古東山道のルートもあり、三氏を主に、広範囲にわたり、学術研究を行うという事です。

岸野の問題点のある遺跡

(1) 横名平遺跡：根岸の沓谷部落の河岸段丘上（標高650m～700m）から先土器時代の木葉形尖頭器（高さ1.5cm幅4cm）が発見された。（グリフ参照）（ケイ岩製）

(2) 滝の峰1・2号墳：昭和45年6月26日、県教委の丸山敏一郎氏を指導に、新幹線内分布調査折、高橋久兵氏が剣片

を提出されたことから、あるいは、「剪方後円墳」など多くの期待の中で、測量調査がなされた。判然とはしなかったが、今のところ、佐久平では、両刃のある剣出土の明確な古墳で、6世紀初頭に降下しないと考えられている。

(3) 休石 遺跡：昭和34年4月道路改修の折、須恵器の大甕の中に、須恵器耳壺が入って発見され、故原田諭氏の説明メモが残り、火葬墓の1種と考えられる。同遺跡からは、すでに大正期、八幡一郎氏の「南佐久郡の考古学的調査」に3ヶ所にみえる外、以後あわせ、大甕（口径55cm、高さ60.5cm）6ヶ、円耳壺1ヶ、須恵器2ヶ出土しており、この様な火葬法をとる例は、幕下は、もとより、中部地方にも例がなく、県外へ調査中である。古墳文化は主として群馬県と密接なつながりもあり、現在、編集中の太田市への研修も計画されている。

尚夫頭蓋の実測は前原豊氏に力をわざらわした。また火葬墓については、近郷藤原氏、早川氏、丸山敏一郎氏、桐原 優氏の教示をうけた。

（十屋長久）

編集後記

○学会会報第3条、5により「佐久考古」を編集しました。会の動向や、学習計画について、「佐久考古通信」があり良く、会員のきびとなり充分役割を果し、会員60余名と共に学会は、県下でも東部上信国境に接する多くのポイントをなす佐久地域のサークルとして成長し、調査、研究に、この佐久にも新しい活動家の会員が増加してきました。開発と保護というきわめてむずかしい時でもあります。「佐久考古」を学会誌にという声も多く、昭和46年発足以来7歳（年）を経て、ここにひとつ元服をさせ、社会教育という大きい視野から、学会活動を推進してゆきたいものです。それが最も会員各位の皆様に是非力添えを願っています。

○埋蔵文化財パトロール隊（佐久町）

今年は、新進跡のみでなく、遺跡全体の埋文白書作成をする年次です。埋蔵文化財保護に全会員が協力し、佐久体制を確立しよう。バトロール長に移動もありましょうが、ひとつ、全会員で話し合い、より良き佐久町の発展をしたい。本分では、一応目的をもち編集し、研究発表、調査講習、新しい遺跡調査の紹介等を扱いました。今年度は、前年度からの後沢遺跡（方形周溝墓の保存）、同遺跡（9月より）「市道報告書」の刊行。上板井北の調査、2案に分かれての調査。緊急発掘も年々規模が大きくなり、台地あるいは、微地形の高處一帯が調査対象となり、文化財行政、研究調査の面からも、大きくその方向が、ひとつの目的に向って動きを始めた観がする。長期にわたる調査には、ケガや身

体には充分気をつけよう。依頼する原稿もあると思いますが次号の原稿をお寄せ下さい。

（木内）

○「佐久考古」No.1～No.3まで、収録原稿や資料が、会長由井先生の指連のとおり、佐久平でも、やや北部がりであり、No.2では、小諸市地区の会員の増加と文化財保護普及を主にした。No.4ではひとつ、川上村の「信濃大深山遺跡」の大骨の刊行もあり、南佐久郡を主に編集したい。ご協力をお願いしたい。

夏の蛭井沢は、大学の考古学の諸先生が多く、ぱたりといたり、急に電車を受け、本当にとまどう。我々もしっかりした、調査や、本報告にたづきわりたい。

佐久の諸文化の特徴性から、これ等諸先生を会へお迎えして、学習しても良いのではないか。

○ひとことで「学会誌」の創刊と、いってもなかなか大変である。報告書、資料紹介、その内容についても諸問題がある。初に会員の皆様のご協力をお願いします。

市民、一般へ、普及の役割を果した佐久市、小諸市、御代田町の「郷土の文化財」は、資料集、又写真等のみやすい冊子であった。

これらの冊子と「佐久考古」、「市道」等が教材あるいは郷土史料として活用されることを願いたい。

尚、本号の発行には、佐久印刷所のご協力を厚くお礼申し上げる。

（土屋）

(近刊紹介)

『平賀氏城跡』

平賀氏城跡保存会編

A5 約100P 非売品

会長 武藤 金

県史編纂委員 米山一政『平賀城址について』
付 平賀氏史料

県史跡指定(昭和46年)を受け、地元に保存会が結成され
文化財保護事業のひとつとして本書が刊行

『家地頭1号古墳』 宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書

B5 約50P 非売品

団長 土屋 長久

発行 佐久市教育委員会

佐久市で始めて検出された埴輪出土の古墳、塚原泥流残丘にき
づかれた塚原古墳群中、最大の墳丘を持ち上野国と文化的交渉
のなぞをとく。

書籍

活版印刷(上製・並製)

パンフレット

オフセット印刷…写真製版より一貫作業

古文書、実測図などの複製にクイックシステム

(少部数の印刷に最適・僅かな時間でできます)

佐久市野沢町原 (株) 佐久印刷所

電話 (02676) 2-0074(代)

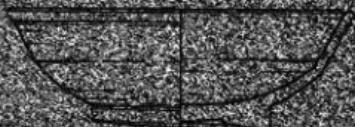
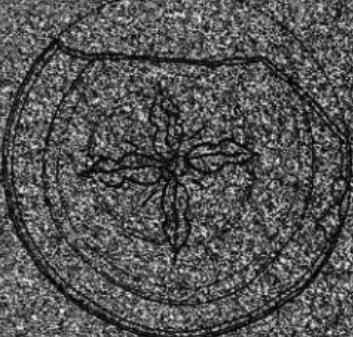
—タイプライター—写真植字—活版—オフセット—

佐久考古 No. 3 昭和52年9月1日
編集者 木内 捷・土屋長久
発行者 由井茂也 (〒398-14
佐久市上村御所平)
(電)02679-7-2401
発行 T385
長野県佐久考古学会
(佐久市岩村田住吉町1,040の7)
(電)02676 8-0617 木内 捷方
印刷 銘佐久印刷所

長野県佐久考古学会

佐久考古

SAKUKO: THE SAKU ARCHAEOLOGICAL SOCIETY



市道

長野県佐久市市道規則

監修者：佐久市長
監修年月日：昭和四十年九月二十一日

監修者：佐久市長
監修年月日：昭和四十年九月二十一日



昭和43年度地点



須恵器出土状況



調査状況(その1)



調査状況(その2)

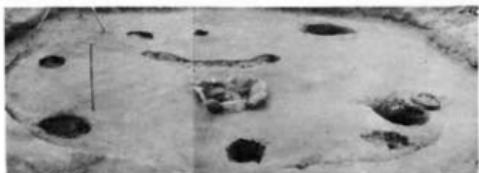


焼成り炭化層と配石址



左同(その2)

長野県岸野休石遺跡



長野県北佐久郡御代田町池尻遺跡



長野県北佐久郡御代田町南畠遺跡

1. 岸野榛名平遺跡の調査

川島雅人・佐藤信之

遺跡の位置

榛名平 (Harunahira) は、佐久市大字根岸字榛名平 3,274 番地に所在する。遺跡は杏沢より東岸の河岸段丘上に位置し、先土器時代から、弥生・古墳時代までの複合遺跡である。後沢遺跡でも、試掘調査報告では、片貝川東岸の洪積層中にあってこの傾向にある。範囲は、段丘上、平面 (図上) 約 40,000 m² となっている。標高 687 ~ 697 m、千曲川との水面からの比高は、約 120 m となっている。

調査の経過

榛名平遺跡の調査は、昭和50年より現在まで 4 回の経過をたどり、今回分布調査の一環として表面踏査が行われた。

昭和50年 8月31日 台地表採の既出物調査。

昭和52年 7月22日、8月21日、29日 出土地点確認。

昭和52年 9月 遺跡範囲確認。

昭和53年 3月18~19日、榛名平坪の内 $\frac{1}{2} 5,000 \text{ m}^2$ を対象に表面採集による踏査を行ない分折尚、遺跡の立地には、由井茂也・林茂樹氏の所見により、前原豊・永峰光一・小林達雄・大橋広行・藤沢平治・島山忠雄氏の教示・指導をうけた。この調査は岸野村誌考古資料の調査の一環であるので、その責任の所在を明記したい。

確認された遺構・遺物

今回調査で確認された、遺構・遺物は、1 古墳時代・古墳跡 2 基、2 弥生・古墳時代上器片、3 先土器時代石器類を確認した。

1、坪の内第 1・第 2 号墳で、昭和46年台地最頂部に佐久平農協岸野支所により、ち臺舎有所が建てられ、その基礎工事中、縄文時代前期・古墳時代上器片が整理箱 2 ケ分出土したが、遺物は砂層にあり、器片はまめつが苦しい。

2、弥生・古墳時代の榛名平台地 No.2 ~ No.3 に顕著な分布をみ 100 m につき約 50 という、Standing Crop を示している。古墳との関連が考えられる。

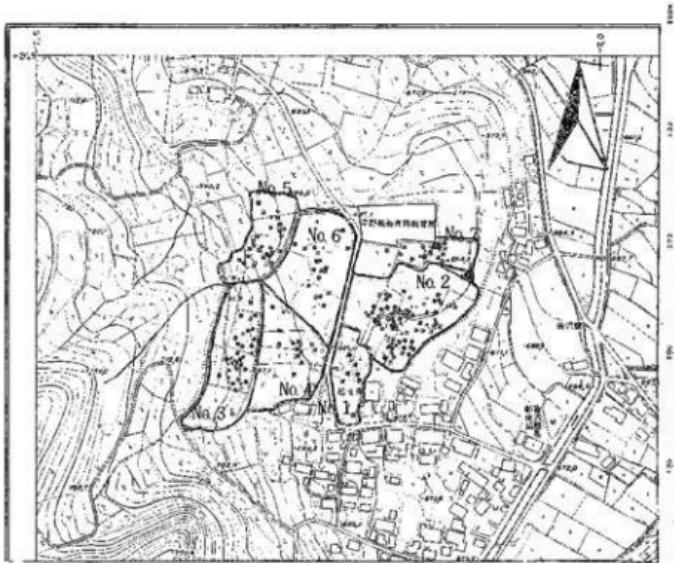
3、先土器時代、付近一帯の先土器文化は、既に地名表では、西の窪、赤名木坂が知られているが、ようやく確認された。付近一帯の表採集は地主により採集にかかわり、桑畑造成であ

る。珪岩（チャート）のフレイクの密集地点がNo.7で、木葉形尖頭器採集地点と一致する。

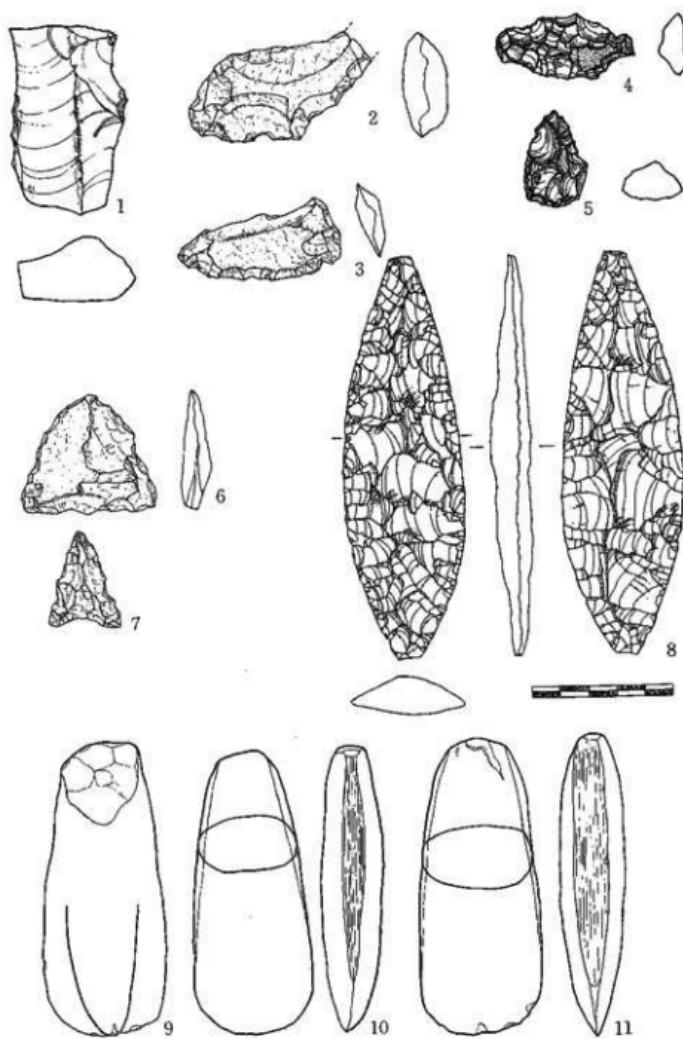
白倉盛男氏の地質的所見では、珪岩は付近に産地がなく、遠く、南佐久郡の千曲川上流地域とされ、珪岩は、柏垂遺跡と類似するといわれる。

層位

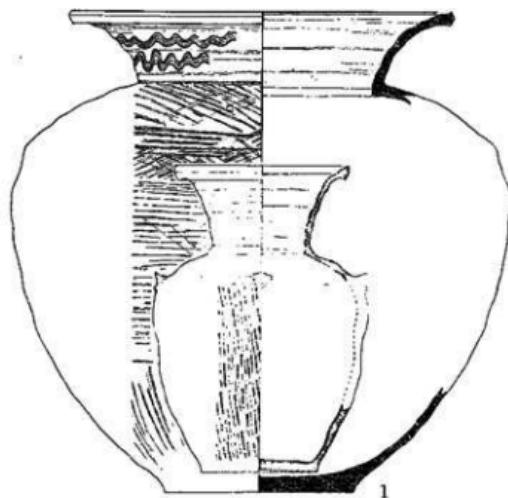
榛名平遺跡上、すでに岩盤（地山）が地表に露出し、明治～大正期の桑畑造成中耕作に伴い、削平され、きわめて浅く5～10cmを計り、文化層の把握は次回計画している。



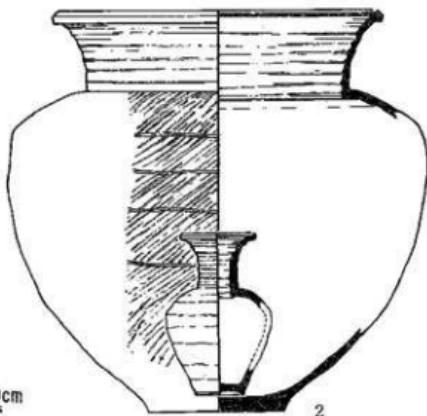
第1図・榛名平遺跡地形図(1:50000) ○縄文△弥生□土師×須恵・石器
◎チャート・フレイク●古墳跡



第2図 棚名平遺跡(2, 3, 6, 7, 9~11) 西の淀遺跡(1, 4, 5)(1:2)



1



2

0 20cm

第3図 休石遺跡(昭和43年5月出土品)(1:8)

2. 岸野休石遺跡の調査

土屋長久・武藤金

遺跡の位置

休石遺跡は、佐久市大字根岸字休石 番地に所在する。遺跡は千曲川の南岸段岸段丘上、標高 650 ~ 660 m に位置している。昭和初年から完形の須恵大甕が出土した遺跡と知られていたものの、その性格は判明しなかった。その出土地点は、宇宮川 (miyagaw)、字大長田 (Oosada) にかけての 1,000 m がその範囲である。

調査の経過

休石遺跡の調査は、昭和43年5月、県道岸野線の改修工事にかかわる。火の雨塚古墳付近より、埴輪、この地からは大甕3ヶの中にそれぞれ、長頸壺・甕・藏壺器が入って発見された。
(第3図 1・2)

その後、昭和46年5月 県分布調査 桐原健・竹内恒・土屋長久・木内捷

昭和50年5月 県新幹線工事内分布調査 丸山徹一郎・白田武正・高村博文・青木幸男の調査員によりその範囲がつきとめられた。そこで、岸野村誌刊行会が主体となり、確認調査が昭和53年3月18日~21日にかけ行われた。

調査の概要

昭和43年5月に検出されたという地点に、A~GG1~10G、280m²を対象に確認調査を行い、大甕が正位で埋没していたという、外部施設、及び、副葬品等の追求にかかった。

B3Gにおいて、明瞭に砂層、検出地点の土層位が認められ、付近一帯を精査したところ、地表より、1~4mで、長頸壺・土師甕・壺、提瓶が一直線に並び、さらに、土師器高台付高杯が、ふせた状況で3ヶ検出された。この面は、厚さ5mの炭化層(焼土文り)上にあって、加熱を受け、きわめて固い状況であった。

配石は、大甕周囲に列状で、配石趾内は、10~18cmとその炭化層は、厚くなっている。石の岩質であるが、片貝川流域のものでなく、千曲川に求めたといわれ、佐久町付近の岩石であるという。配石止、焼石上に、鉄鋤(1)、釘(1)、直刀片(1)がみられた。

まとめ

須恵器の年代から、10~12世紀に比定され、また既出物の藏壺器は、東国独特のものからして、本遺跡群は、径10m位の範囲を砂を埋った、火葬墓群と解される。砂層の確認されるのは、

台地全体には及んでいなく、今回の確認調査にもとづき、付近住宅造成等の諸開発が進んでおり、緊急記録保存が急務であろう。

この調査にあたり、次の諸氏の教示・指導を受けた。記して感謝の意を表したい。

永峰光一・桐原健・関孝一・丸山敏一郎・畠山忠雄・大井隆男・白倉盛男・由井茂也・臼田都雄・木内捷・工藤源藏・藤沢平治・遮那藤麻呂・小林重義・能登健・岡村和重・木内義一・上野源司・市川貞雄



第4図 棚名平(上)・休石遺跡(下)の立地

3. 塩野下藤塚の調査

山本太郎・大沢俊雄・堀竜源

遺跡の位置

下藤塚遺跡は、御代田大字御代野字下藤塚I,061番地に所在し、遺跡は浅間山(標高2,542m)南麓の丘陵尾根中、標高880mに位置している。

縄文後期散石住居址が確認されている。この地を広域農道が通過する工事内となっている。

1,000m²が遺跡の範囲である。浅間山第3外輪山の火口までは、図上8kmを計る。

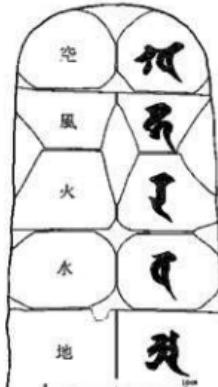
調査概要

下藤塚は、その名の示す、塚があり、古墳らしい様相はみられない。昭和48年度町内分布調査に基くのであるが、時又681番地より「石がん」1ヶが表記されていたことによる。(第5図)確認された五輪塔婆は、火-1ヶで地点に、50%の農業用水道管工事が行われたので、あるいは、この折出土したかもしれない。現在、旧小沼小に2基、又、真楽寺境内、多くの伝承を有する、甲賀三郎の大沼の清掃が約10年前に行われ、石造五輪塔婆5基が発見された。

まとめ

この地域は、上代、塩野牧址となっている。佐久平でも早くから開拓が進み、浅間山に、真楽寺が開基され、中央文化との交流があつてのことと推定される。字名に古牧・駒留・塩野・馬瀬口等、うかがわれ、後世、山麓に住した牧人の塩野氏族が、後世下り、交通路のかなめの、字上小田井に構築したのが、「小田井城址」とみる学説もある。いづれも該期、古文書がなく、中世有形文化財、美術工芸品等を以って調査したが、第2次・字上寺場の真楽寺廃寺跡、法印房の沢等年次計画をたてている。

「石がん」は県下で2例目でありが、今回地下構造は把握されなかった。



第5図 下藤塚遺跡出土石がん
(1:4)

4. 児玉池尻遺跡の調査

桜井為吉・尾台卓一・小林五郎・土屋長久

遺跡の位置

池尻遺跡は、御代田町大字御代田字池尻3637番地に所在し、地目は芝地。台地上、及田地周辺台地約1,000m²に縄文中、後期の大集落址がある。標高771m²を計り、付近に源泉もあり、言い伝えによる“玉の池の内”児玉の池が付近に存したと考えられ、この台地の西方2kmの田切り越えに、中世小田井城址が位置する。

調査の経過

池尻遺跡は、分布調査では、旧御代田小学校郷土資料室遺物から、縄文中、後期の散布地として、昭和40年度登録したが、その後地主大井忠太郎氏より、農耕中にトラクターに、石がかかり炉石が発見された。

昭和52年11月10日 御代田 大井忠太郎氏より発見届 11月11日山本太郎・土屋今朝男
土屋長久氏確認 53年2月28日 国へ発見届

53年2月28日 “緊急発掘調査の為、試掘調査の通知を行う。

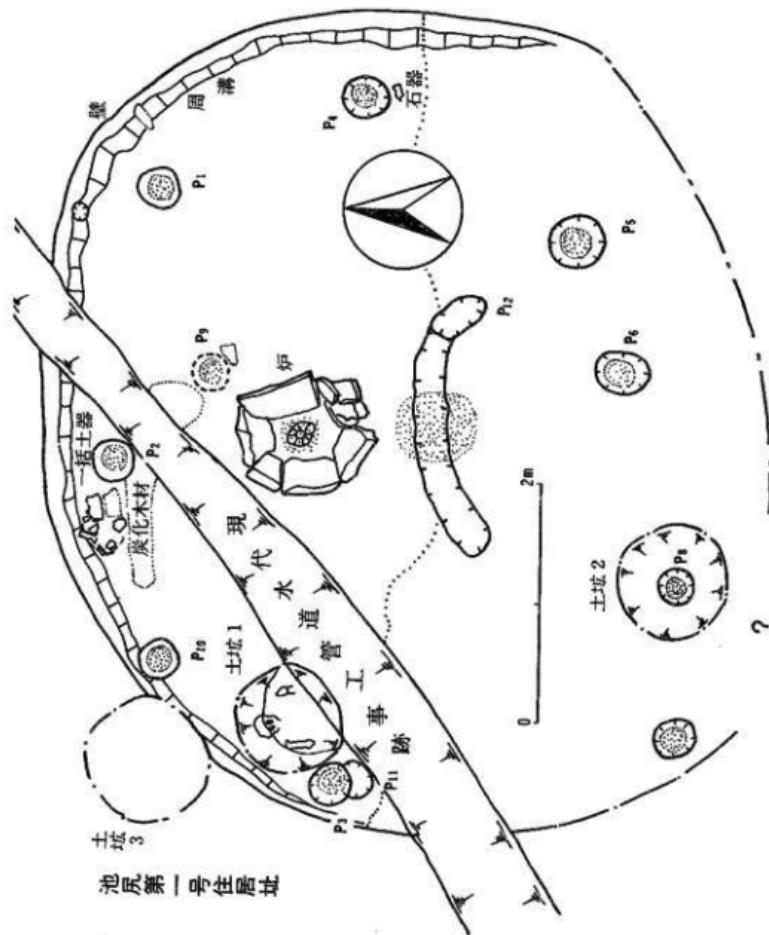
53年3月25日～31日 確認調査

53年4月28日～30日 第1住居址内 人骨調査 指導型アリマンナ医科大学 森本岩
太郎氏 遺構の検出に伴い、耕土が浅く、農耕破壊が早いので、今年度町は、台地500m²を
借地とし台地全体の集落址追求のために、緊急発掘調査の計画が立てられた。

層位

1番大きな関心は、人骨出土の層位

- ①住居址の生活面前に當なまれていたこと。
- ②焼失を受けていて、床下・柱穴址・土括上炭化層が3～5cm堆積していたこと。
- ③土括2には、焼失にかかる柱跡が観察されたこと。
- ④土括1～2号址のプランが、床面下にあって、新しい年代の堆積土層が、土括内から、検出されなかった。以上のことから、人骨は“縄文人”的貴重な資料である。
- ⑤土括内 黒褐色土層のレンズ状堆積が観察された。



5. 草越南畠遺跡

大井豊・柳沢文人・林幸彦

遺跡の位置

南畠遺跡は、御代田町大字草越字南畠495番地に所在し、昭和43年度、同地西側、追分道堀一帯 20,000 m²が、構造改善事業（条理制の現代版）が行われ、当時、追分道添遺跡は、地元文化財審議委員柳沢博氏の力添もあり、史跡指定候補物件となっていた。当時から、古代人の遺物に深い感心と理解を寄せていた、草越の荻原範仁氏により、この台地一帯 40,000 m²上の出土遺物を表揚されており、打製石斧が著しい分布をみているのが興味がもたれる。標高 800 m を計る田舎り台地上である。（第4図）

遺跡の調査経過

昭和51年8月20日県教委の紹介により、教委土屋長久・文化財審議委員内山俊雄、荻原範仁氏の案内で出土地点をつかみ、密集地点を把握するが、客土事業の為、遺跡の破壊はなしということで、パトロールカードで3ヶ所の発見届を提出する。

昭和52年11月1日 国庫補助の2年次にわたる客土改良から、天地返しによる、県補助「モデル地区」事業となるに及び、当然、遺跡の破壊は考えられるに至った。

昭和52年11月3日 遺跡の開発と現状にて、至急県教委埋蔵文化財係へ報じ行政指導を受け11月6日に、指導主事派遣申請の手続をなした。

昭和52年11月6日 役場大會議室にて、今までの既出遺物を600分の1土地公図でチェックし、今年度、土地改良の行われる範囲を、県教委・地教委・伍賀農協担当、町産業担当者 文化財審議委員小林五郎・内山俊雄・荻原範仁氏で午後1時～6時まで協議する。内堀教育長・桜井課長欠席。

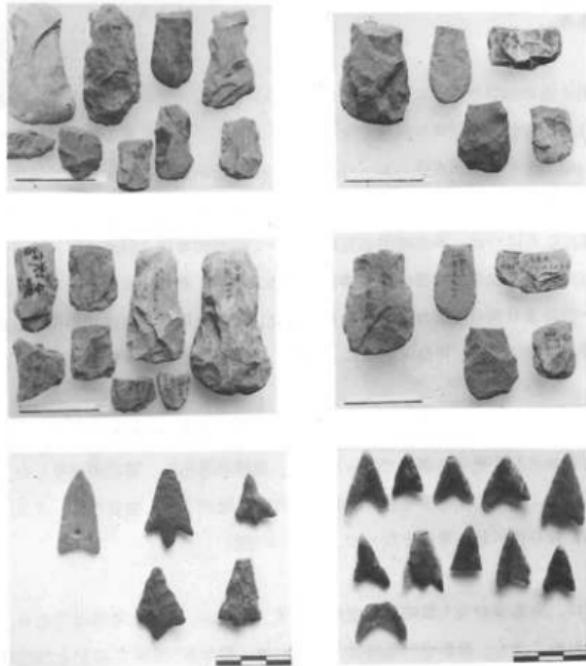
昭和52年12月10日 県教委へ桜井課長出張し、草越付近には、遺物は散布していないので、土木事業にかかわる、遺跡保存は行わないむね打合せてくる。

昭和53年2月2日 土屋・県史刊行会・県教委文化課へ出張し、天地返し上地改良が2年次にわたり行われ、53年度では、広戸付近が該当し、事業前の記録保存について指導を受ける。

遺構・遺物

追分道添・西畑・南畑3地籍の内、南畑へA～C T.（幅2.0m）を入れ、遺構・遺物の検出にかかる。耕土下、軽石交り黒色土層につきあたり、この黒色土層が遺物包含層となっているものの、遺物は、広範囲に分布しており、集落趾の密集地は判然としない。宮平地籍の標高よりりや、高いので、広戸寄り地籍に遺構の可能性はある。

又、字芝地で、近世まで、芝しか生えず、一名“芝観音塚”と呼称された地点の確認を行ったが、厚い客土中にあり、把握できなかった。これが、古墳であれば、大きい意義となる。



第8図 草越、追分道添・南畑・西畑遺跡
既出遺物（線長さ10cm）

6. 豊昇宮平遺跡の調査

前原豊・内山俊雄・小林ゆり

遺跡の位置

宮平遺跡は、御代田駅（信越線）より上東南方向4kmに豊昇部落ある。この東側丘陵50mに位置する。標高800mを計る田切り台地上、東西200m、南北200m、40,000m²がその遺跡の範囲である。

遺跡の経過

宮平遺跡は出土遺物の豊さから古くから地方人の話題となっていた。以下略記する。

明治14年村誌にも記述。同37年同地佐々木朝次郎氏・大井宅藏氏等の発掘と以後時々の調査・収集活動。昭和5年軽井沢在住のM・G・マンロー氏の調査、翌6年八幡一郎氏の調査。昭和初年に入り県史跡に指定（戦後解除され、現在町指定史跡になっている。）戦後先土器時代の研究が活発になるにつれ、本遺跡出土石器について昭和20年代「信濃史料」編集のため調査が数回行われた。その後周辺の農地改善事業のため工事中、敷石住居跡の一部が露呈し、昭和42年上原邦一氏により敷石住居址1ヶが発見された。この上原氏調査は10年後でも正式報告がなく、町教委の依頼により、川島・前原によって、縄文後期土器のみ整理を行った。

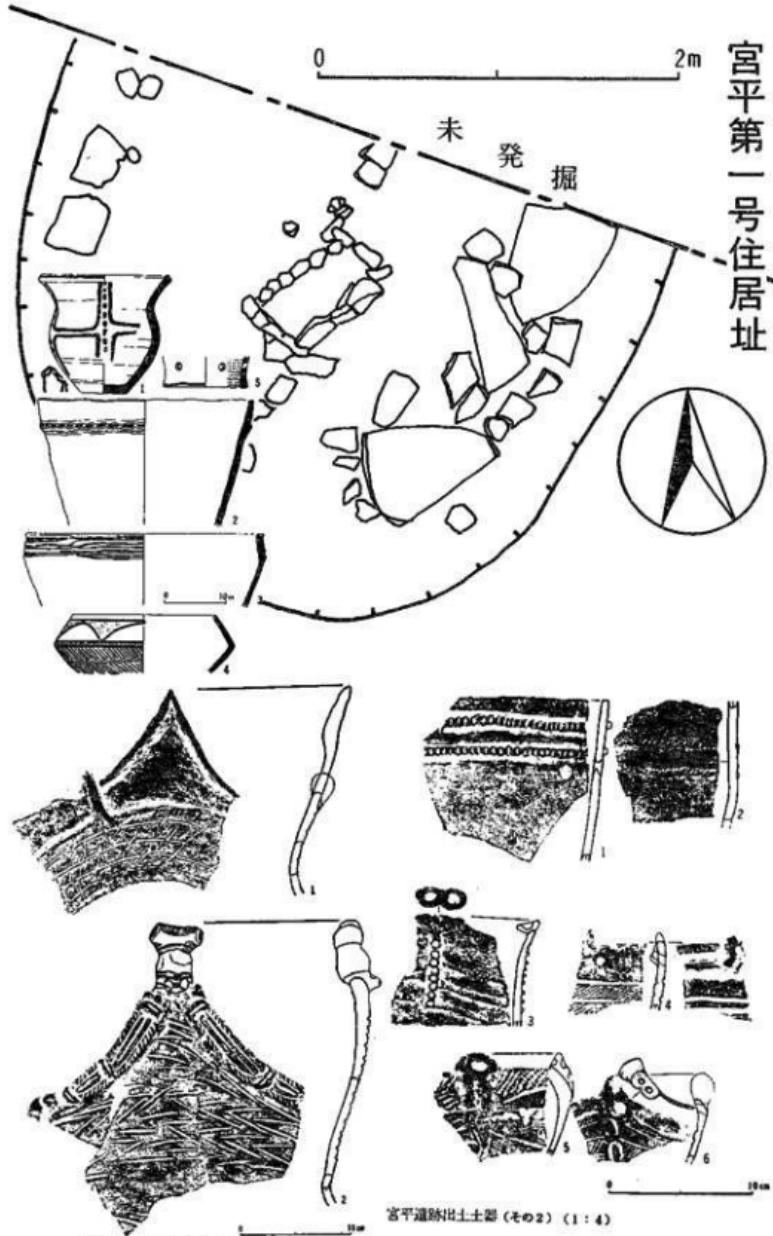
調査概要

土地改良に伴う、台地中央を南北に走る農道を補装工事の事業が行われるので、昭和42年、上原邦一氏調査地点が不充分の調査であったので、遺構の露出と、周辺調査をした。
東西・南北に、幅1.5mのTをT字形に入れ、竪穴住居跡が2軒、発見され、A.T.北側を、試錐のところ、敷石住居跡の検出となった。（第9図）

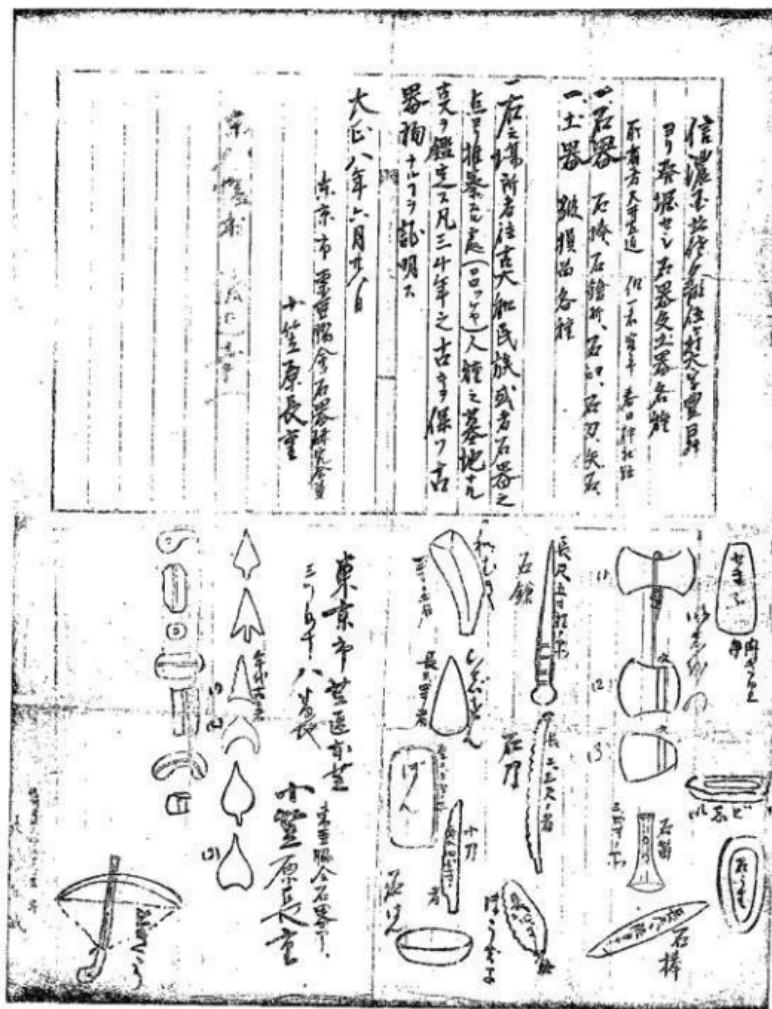
まとめ

1. 台地2万m²に、生活面が先土器時代～歴史時代までに及ぶ、複合大集落跡である。
2. 耕土が、きわめて浅く、農耕中の遺物は、今も台地一帯から“ザル”にひとつは簡単にひろえる。
3. 補装工事は、遺跡を破壊する可能がある。

宮平第一号住居址



第9図 宮平遺跡出土土器



第10図 宮平遺跡大正時代出土品古書（大井篤義所蔵）

7. 家地頭第1号古墳の研究

土屋長久・前原豊・川島雅人・林 彦

古墳の位置

浅間山火山第2外輪山噴火泥流地域が、その古墳群の所在で、湯川をへだてた対岸に、三河田大塚が所在する。標高 696m、火山性自然丘が多く、往古“塚原”と呼称されてきた。小海線、中佐都駅より南西 1km に位置するのが、本古墳である。図面上では、前方後円墳ばかりの、古墳地帯である。

調査概要

すでに墳丘は、畑で削平され、宅地造成に伴い、赤色の地山が露出し、石室主体部も一部が、残存していた状況であった。地山上、径約50m、高さ 8 m を計り、堆定墳、上円下方墳形式の横穴式石室である。

調査の概要

この塚を削平し、住宅地造成で破壊されるので、事業前の記録保存である。

出土遺物

副葬品は埴輪と胴地金張りの雲珠等がひとときわめだった。

①前庭部に墓前祭が認められ、大甕・横瓶がうちくだかれて検出された。一時、ドット集成が必要

②埴輪が伴ったが、樹立あとがみえなかった。

③墳丘敷設が確認され、上円下方墳が堆定される。

④玄室断面に、持送り技法がなく、断面長方形であること。

古氏族の佐久平開拓地

佐久平 400 基近い古墳中、調査のみ 16 基は、その分布をみると、湯川流域及び以北に位置している。

佐久平の終末期古墳を研究するに、少數古墳でその推論に危険性はあるが、従来との玄室中心の調査法から、墳丘・墳丘外・周溝・前庭部・古墳の中間跡等、精査されてゆく中で、開口した古墳での、や、もすれば、石室資料の資料集めのそしりもまぬがれないが、副葬品は、原位置から検出されず、“この勾玉どうして、ここからでるの?”よくきかれる素朴な質問を追求することこそ、やがて、解明されるであろう。基礎的事項ではあるまいか。

“この地に移動し、佐久平の浅間山高原地帯に開発にあたった古氏族は、どんな性格で、政治的意図があったのであろうか”

(仮定A)

- ①上州碓氷郡八幡付近の豪族、帰化系の物部氏族と推定される。
- ②馬匹を伴い、物部的な軍団編成が可能であること。
- ③東山道沿いであること。
- ④上州の国府付近から、白雪の浅間山がよく遠望されること。

埋葬者の性格

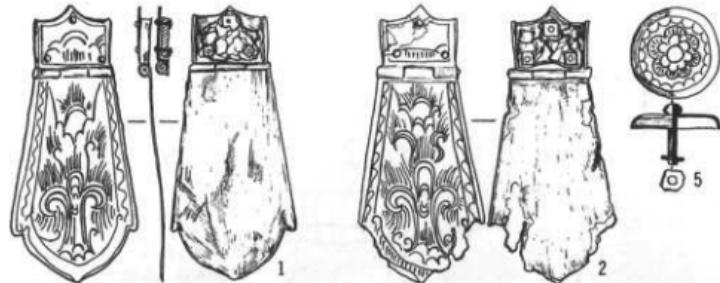
- ①馬具の銅地金張杏葉が出土していて、佐久東一本柳古墳副葬品が、美術工芸品としてもすぐれている。
- ②前部、祭壇施設の古墳が絞月古墳、下前田原後原1・2号墳、耳取大塚にみえること。
- ③玄室に胸張りが多い。
- ④佐久地方では、焼かれていらない 墓輪が伴うこと。
- ⑤後世、古氏族の伝承的な“高良社”多胡社が祭祀されていること。
- ⑥農業生産に適さない。火山泥流域に移住してきたこと。
- ⑦望月・岸野に、彦狭島王古墳の伝承を有すること。

調査の成果と古代史上的問題点

以上の考古資料の一一致は必ずしも偶然の一致ではない。今一度集成し、言究したい。

町内緊急分布調査で検出された遺構・遺物

遺跡名	地番	構築物	遺物	備考	調査対象(m)
下藤塚	塙野字下藤塚 1061番地		石かん 立輪塔石 1ヶ 1ヶ	上藤塚には、無住居 居住か確認されてい る。 (未発掘) (広域農道予定)	広域農道1,000m に集落址がある。
池尻	御代田字池尻 3637番地	堅穴式住居址 土址 4軒 4ヶ	縄文中筋末葉深体 石包丁1ヶ 鉄、摩製石斧各1ヶ 打製石斧 後化本材 人骨 1ヶ 1体分	第1号住居址が既失し ている。 第1住居址、第1号土 塹をのぞいて未発掘	台地1,500m に集落址がある。
南郷	草越字南郷 495番地	包含層	縄文時代 中期末葉 打製石斧 石 繩 摩製石斧 土器片 34ヶ 16ヶ 2ヶ 20ヶ	試掘トレンチA-C いづれも包含層によ り、広範囲に遺物が 出土。	台地、その範囲は4 万m ² に達する。
宮平	豊井字宮平 1152番地	散石住居址2軒 堅穴式住居址 2軒	縄文時代中～後期 深 繩 土 個 石 繩 石 化 打製石斧 2ヶ 3ヶ 6ヶ 1ヶ 6ヶ	第1号散石住居址 他は未発現	台地2,000m ² に集落址がある。



0 5 cm

長野県佐久市東一本柳古墳出土品

駿河国上石
田村古墳出土品



0 5 cm



青森県八戸市鹿島沢古墳出土品
(江坂輝彌氏提供)

第12図 東国における古墳出土の杏葉集成(Ⅰ)(1:2)

文化遺産は大切にしなさい。

この遺跡は永遠に残されるに至る。

町内民衆である、古代人の

約150万円以上に及ぶもの

これ、開発期間、約三ヶ月、調査費

本県余例により、開発前に発掘調

例、西城山麓一帯が開発に至る。

器（中・後）。

11、西城東道跡：合地、繩文土

（前・中・後）、石器也、須恵器。

10、海沢通跡：合地、繩文土器

9、大沼通跡：合地、土師器。

8、土器、土師器、集落址と想わる。

7、細尾根跡：合地、繩文土器

（中）。

6、狸屋通跡：合地、繩文土器

5、庄内半、土器、須恵器。

4、西鶴込通跡：合地、繩文土

（地化）、石皿。

3、上原通跡：合地（別荘子

器（中）、集落址。

2、山口石器跡：合地、繩文土

（中）。

1、渕五通跡：山麓、繩文土器

（中）。

遺跡の状況はつきの通りであら。

れられる。

財を重視し、保護の対象が検討さ

れていた。

き文化財保護法では、この帶の遺跡文化

の集落址であることが判明した。

古墳時代（今から五千年前）で

もなされた。この付近には久平郡認定

古墳四十五ヶ所にて基づいて、町、

町、市教委、県教委、予定路線

が、跡間山麓一帯も、町、遺跡



点部分遺跡（No.1～11）繩文土器は1が細尾根（小林羊寿氏蔵）、2が
広畠（内堀典浩氏蔵）、土師器12～18は細尾根（小林羊寿氏蔵）
広域農道付近遺跡の分布（実線広域農道路ルート）



調査遺跡の位置

第13図 休石遺跡の位置と周辺遺跡の分布 (1:50000)

1. 休石遺跡
2. 棚名平
3. 滝ノ峰
4. 西ノ窪
5. 御陵古墳
6. 後沢遺跡
7. 家地頭1号墳
8. 岩村田一本柳
9. 東1本柳古墳
10. 今井西原
11. 三河出大塚
12. 原大塚
13. 上桜井北
14. 市道
15. 儀用



第14図 道路の位置と周辺道路の分布

1.追分道添 2.南塙 3.下藤塚 4.池尻 5.宮平 6.西堀 7.小田井城址
9.傍モ10.上藤塚11.細佐根12.城の要14.内城

佐久考古 ^凸 第4号 正誤表

表紙 緑袖下 → 青袖下 実測者 川島雅人氏による。

- | | | |
|-----|--------------------------|---|
| 1頁 | 下より4行目 | 100m → 100m ² |
| 3頁 | 上より2行目
" 4行目
" 8行目 | 番地 → 2065
みやがわん → miyagawa
蔵量器 → 蔵青器
大鷹 → 大鷹 |
| | " 11行目 | 丸山鶴一郎 → 敏一郎 |
| | 下より6行目
4行目
2行目 | 厚さ5cm → 5cm
大鷹 → 大鷹
鉄錫 → 鉄金錫 |
| 6頁 | 上より7行目
1行目
13行目 | 昭和40年度 → 50年度
御代田 → 御代田町兜王
53年4月 → 53年5月 |
| | 下より2行目 | 1行ヶス(調査中) |
| 8頁 | 上より2行目
3行目 | 追分道添 → 追分道添
茶理剤 → 希聖剤 |
| 10頁 | 下より4行目
" 1行目 | 2万m ² → 4万m ²
補装 → 鋪装 |
| 12頁 | 継名 戻名
上より6行目 | 林彦 → 林幸彦
調査概要 → 調査の経過 |

(サ越タイプ印刷所が始めてのことと、考古沿字のないことから、みなれどあり、ここに訂正します。)

佐久考古^四号について

この会報について 學会では 1冊500円
で頒布します。150冊ですが、これの
誌代の1部を以て、オカ号から、
会員の希望であった 學会誌への刊行
へ、係が努力していますので、何卒ご協力
ご理解賜れば幸いです。

尚 オカ号に 与良、興水、竹内、三先生の
追加を含む計画を立てていますが、原稿等
につきまして何卒ご協力を賜ります
様よろしく お願い申し上げます。

昭和53年1月5日

佐久考古学会 佐久考古編集係

『下前田原古墳群・後原居館址』

著文集 B4・P100頁

著者 一木茂樹・吉田信彦・竹内昌浩編著
監修 今井重行・藤本千鶴子・高橋信子

『岩村田一本柳』 研究報告 B5・P100頁

著者 一木茂樹・吉田信彦

監修 今井重行・高橋信子

『樺名平・休石遺石』 A4・P100頁

著者 一木茂樹・吉田信彦・竹内昌浩・高橋信子

監修 今井重行・高橋信子・吉田信彦

書籍
パンフレット

活版印刷(上製・並製)

セッティング・印刷・写真製版より販売業

古文書・実測図などの複製にクリックシステム

・複数部の打刷に最適・短かな時間でできます

佐久市野水町野水 (株) 佐久印刷所

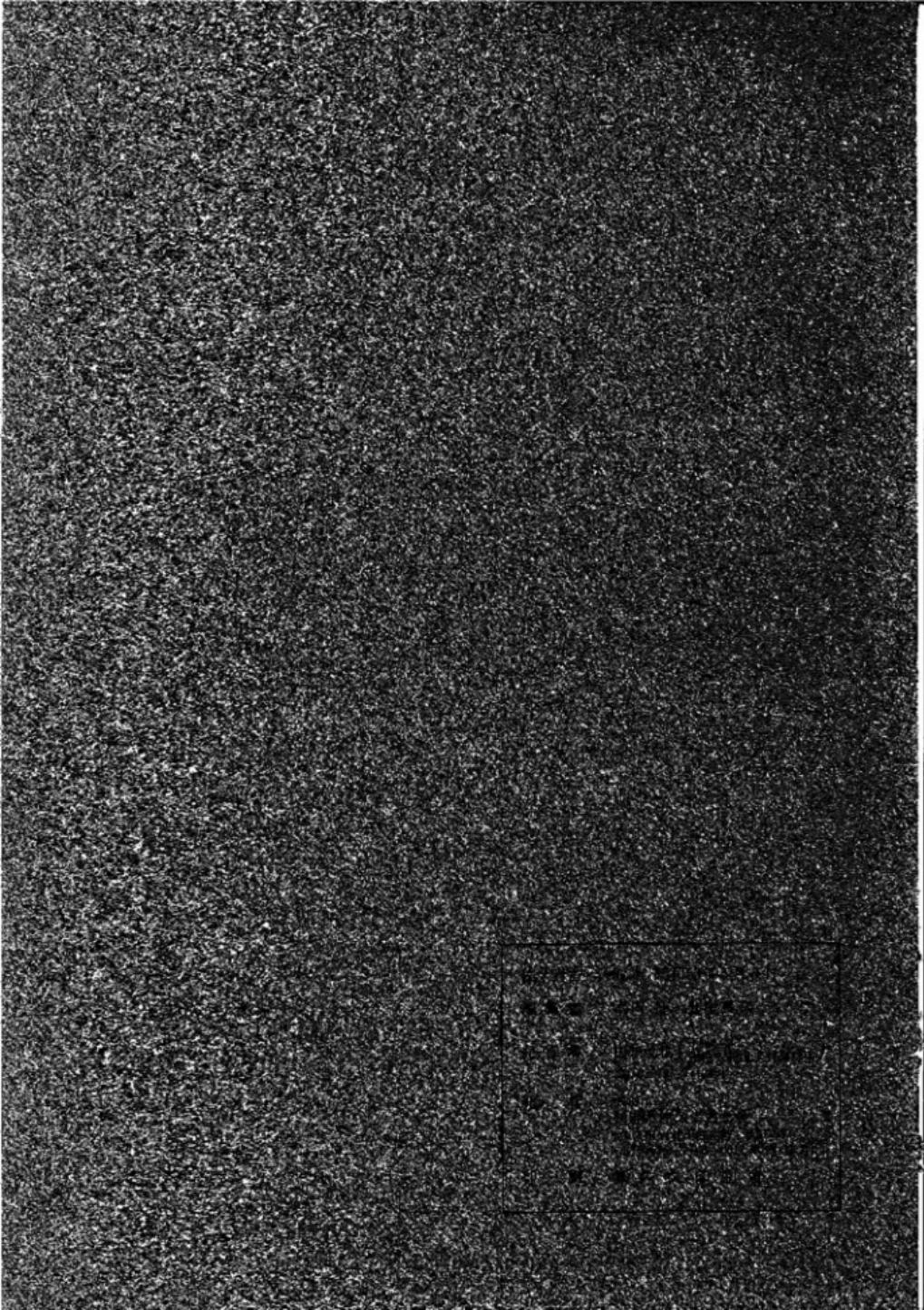
電話 (02676) 25007444

マイアフルダ

多喜舎

活版

オフィ



佐久に生きる



偲ぶ 恒 氏
竹内 氏
與利 氏
与水 氏
武良 氏
畠藤 金
忠山 氏
昌雄

1981. 5

佐久考古学会

竹内恒氏
ありし日の
興水利雄氏



竹内恒氏（中央）
(立っている方)



興水利雄氏(栃原岩陰遺跡にて)

ありし日の
与 良 清 氏
と
畠 山 忠 雄 氏
武 藤 金 氏



与 良 清 氏



武 藤 金 氏(上桜井北遺跡にて)



畠 山 忠 雄 氏(八幡神社にて)

序

会長 由井 茂也

佐久考古学会は、創立以来記憶から忘れることのできない先輩の幾人かを亡くしてきている。今、その物故者の順に挙げれば、奥水利雄、竹内恒、与良清、武藤金、島山忠雄の各氏である。ともに社会的には、郷間知名の方々であり、本会に於ては、リーダーとして貢献され、学習をはじめ、発掘調査の現場を通じ、多くの教訓と話題を残した親しい存在である。

私共は、その都度これら先輩の優れた業績を偲び、思顧の念から追悼号の企画を立ててはいたが、荏苒時か過ぎし、物故者を増してしまった。

今回は、会員の総意により、多年の企画を実現するため、特に物故者と親交深かつた、井出、白倉、花岡、佐藤、黒岩の各氏に依頼し、年譜等の細かな執筆を得て、又、会員の皆さんから寄せられた原稿については、以前の企画に寄せられたものも加えて益に、佐久考古No.5追悼号として発刊する運びに至った。

ここに、物故者諸先輩に本号を捧げ、追悼を新たにし、御冥福を祈ると同時に、会員各位のご協力と、特に編集員の御尽力に感謝し序に代える次第である。

1981年5月

目 次

序 文

竹内 恒氏をしのぶ	1
竹内 恒氏略年譜	1
竹内先生と私	2
竹内 恒先生を偲ぶ	3
竹内・興水両先輩に捧ぐ	3
興水 利雄氏をしのぶ	5
興水 利雄氏略年譜	5
興水 利雄氏を想う	7
興水 利雄さんを偲ぶ	7
竹内 恒と興水 利雄	8
与良 清氏をしのぶ	11
与良 清氏略年譜	11
与良 清先生を憶う	13
与良 清先生を偲ぶ	14
一つの想い出	14
武藤 金氏をしのぶ	15
武藤 金氏略年譜	15
武藤 金さんとの出会い	17
武藤 金さんを偲ぶ	18
武藤 金さんを憶う	18
畠山 忠雄氏をしのぶ	19
畠山 忠雄氏略年譜	19
畠山先生の想い出	21
畠山 忠雄先生を偲ぶ	22
押型文土器と畠山さん	22
あとがき	23

竹内 恒氏をしのぶ

竹内恒氏略年譜

明治36年11月26日	南佐久郡野沢町取出 329番地に誕生
大正12年3月6日	長野県立野沢中学校（現野沢北高校）卒業
大正13年9月30日	日本大学専門部法科中退
大正12年4月1日	南佐久郡臼田尋常高等小学校勤務、郷土史研究に専念
昭和8年3月31日	南佐久郡平賀尋常高等小学校訓導 ・校長市川雄一郎・小栗據治氏等と郷土史、古城址調査
昭和15年3月31日	北佐久郡中佐尋常高等小学校訓導
昭和19年3月31日	南佐久郡蒲積国民学校教諭 仏教禪の研究に専念
昭和19年3月31日	南佐久郡青沼国民学校教諭
昭和21年3月31日	南佐久郡臼田青年学校教諭
昭和23年3月31日	南佐久郡大沢小学校校長
昭和27年3月31日	南佐久郡大沢小学校長退職
昭和27年4月2日	南佐久郡中込中学校講師
昭和30年8月1日	南佐久郡臼田町中部中学校講師 南佐久郡誌編集委員専任
昭和31年3月31日	南佐久郡野沢小学校講師
昭和34年3月31日	南佐久郡野沢小学校退職
昭和41年4月1日	佐久市文化財調査委員、佐久考古学会長
昭和50年1月25日	逝去 正七位勲六等瑞宝章昇叙 戒名 古学院恒善一山居士

●主なる役職名

- ・日本考古学協会員
- ・長野県考古学会創立委員・佐久地区役員
- ・佐久考古学会長 創立時から逝去まで
- ・信濃史料刊行会参与
- ・旧中込学校保存会副会長
- ・佐久市文化財保護調査委員

・佐久市青少年育成協議会委員長

● 主な発表論文・著書

- 昭和41年 藤手刀を出した南佐久郡白田町英田地畠古墳（信濃18／4号）
昭和46年 長野県佐久市野沢平塚田遺跡緊急発掘調査報告書（佐久市教育委員会刊）
昭和47年 北近津・戸坂遺跡緊急発掘調査報告書（佐久市教育委員会刊）
昭和47年 佐久市岩村田東一本柳古墳緊急発掘調査報告（長野県考古学会誌第13号）

○ 青年時代から神の研究、参拝等の体験修養に専念し、生前に「一山居士」位允許
(白倉 盛男)

竹内先生と私

三石 延雄

私が、考古学に興味を持ったのは、小学校高等科を卒業して間もない昭和初年の頃であった。その頃の私には、考古学の勉強などする余裕などなく、考古学は私の永い間の夢であった。

昭和46年1月24日、佐久市野沢会館での佐久史談会の席で偶然竹内先生と席を隣り合せたのが、私の考古学への道が開けるきっかけとなつたのである。

5月のある日のことであった。私の手元に1通の封書が届いた。文面は簡単に5月24日より佐久市の東一本柳で古墳の発掘調査をするから出てくるようにと書かれていた。

24日の朝、一本柳に着いた私は現場がわからなく団地をぐるぐる回った事を記憶している。この一本柳の古墳調査が私の考古学への第一歩であり、今の学会の皆さんとの出会いでもあった。武藤さん、井上さん、佐藤さん、渡辺さん、土屋さん、白倉先生であり、発掘の指導をされたのは桐原先生であった事を記憶している。

発掘は初めてであった私は、出て来た遺物を振り出しちゃった。隣に居た武藤さんが「うごかしちめ一ぱだめだ」と言った。私は中で握っているのがむずかしく、こわいような気がして外に出て、一番無難である土ふるいにまわつた。ふるつた土を水で洗うと小さなガラスの小玉や鉄、時には水晶の切小玉まで入っていた。それ以来私は古墳の調査の際は土ふるいに回つた。

この年には、確か6月初めに八千鶴村の池の平の第1次調査があり、9月に第2次調査を行なつた。また、10月21日より佐久市西近津の調査があつた。

47年に入り、1月末に北近津遺跡の調査があり、3月に西一本柳遺跡の調査があつた。この間ほとんどの調査を先生は団長として指導をされた。先生は調査に当つては非常に厳しい人であった。土は、紙を1枚、1枚はがすようにかけと言われた。確に土は、何千年あるいは何万年かの遺構をそのままの姿で保護している。私

たちはこれを発掘するに当っては真剣に取り組まなければならぬはずである。又、先生は非常に厳格な面があり遺構の中に勝手に入るような事は許さなかった。たしか中道遺跡であつた、テントの中に黙つて入つて来た新聞記者を一喝されたことがあつた。

私が、先生と一緒に発掘をした最後は、昭和

48年5月臼田町の井上遺跡の第1次調査であった。それ以来私は先生と一緒に調査をする機会を失つた。然し、私が今日まで発掘にたずさわってきた中に、先生の精神は私の心の中に今でも生きているし、又、これからも私の発掘に対する心がまだの中に、先生の精神は生きづけることであろう。

竹内恒先生を偲ぶ

黒岩忠男

長野県考古学会設立のため、準備委員の1人として活躍していられた当時、準備のための会議の熱心さ、集まって来られる準備委員の先生方の研究心の逞しさ等を時々話してくれ、県考古学会に参加するよう熱心に勧めてくれました。おかげで私も創立以来会員として諸兄のお

仲間に入れさせていただきました。そして現職中の私にも発掘調査の声をかけてくれました。

現在、会員の皆様と楽しく研究活動ができる事を本当に嬉しく思つて居りますが、これは、竹内先生が熱心に考古学会へ入会することを勧めてくれた御陰と共に感謝しています。

竹内・興水両先輩に捧ぐ

渡辺重義

神津武八さんの紹介で佐久史談会に入会したら、そこに竹内さんが居た。月1度の会合で顔を合わせる間に、「おい県の考古学会に入れや。」と言うから、「考古学なんて何のことか判らないし、そんな難しいことは駄目だ。」と言つたら、「判つても、判らなくても入つて居れば判つて来るから入れよ。」こんなことで県の考古学会に入会した。

その後、佐久平ではあちこちで発掘調査があつたので、佐久でも支店があつた方がよからうというわけで、佐久考古学会が誕生した。佐久市の教育委員会でも面倒を見てくれて、調査がある度に佐久考古学会さんよろしく、という訳で調査主任が誰であつても調査のことは佐久考

古学会だった。

この中には、竹内会長の力が何時も存在して居た。何所の現場でも和気合々として楽しい勉強の場であった。竹内さんも人間だから多少のまずい面はあつた。よく私は現場で言い争いをした。次の日は、又2人で話合つて仕事を進めた。

南佐久の分布調査、高畠遺跡、入山峠事前調査等、古いものはどこを見ても竹内、渡辺の名が出ていて嬉しい。信越線復線化の銀入れ式の記念写真を見ると、残っている者は私1人である。

何時頃だったか、どこかの史談会で臼田町の興水さんという人が、北相木の洞窟で古い土器

が出て来たことを話題に講演があるというので出掛けた。今までの史談会では全く聞けない話だったので非常に興味が湧いて、私はすぐ奥水さんの信者となつた。爾来、私と奥水さんとの親交は続いた。又、この続いた裏には、奥水さんの親類が軽井沢に何軒もあること、そして恩師の高見沢進作先生と軽井沢で奥水さんに再会したことによる起因している。

或時、奥水さんがこういう話をした。「南軽井沢の湿地草原地蔵原がゴルフ場になるそうだが、あそこには動物の足跡が残っている可能性があるので時々行って見た方がいいよ。」と言つた。私は何千年前の動物の足跡が地下に残っている筈がないのに、この人の頭はどうかしているのかと思った。奥水さんの死後、数年を経て静岡や高崎の水田跡から弥生時代人間の足跡が検出され、性別、年令まで解明されたという報告を見て、奥水さんの先見の明に驚嘆し

た。

奥水さんは、よく車を走らせて各地の遺跡を見学している。「辺さんこの須ヶ岡へ行って來たよ。まさか龜ヶ岡式土器は大したものだねえ」と話してくれた。先祖のことを調べて時々山梨方面に行き、たくさんの系図を持って来てコピーして居たがあれはどうなつたろう。

奥水さんの最後を飾つたものは、何といつても塩くれ場遺跡の調査だろう。多大な私財を投じての発掘だけにその報告書を見ずに、しかも発掘現場地点にてその生涯を閉じたことは、死んでも死にきれないのでしょう。その責任の一端を担つた私達も只申し訳なさで一杯である。

佐久考古学会の存在を県内に高く昂揚してくれた両先輩よ、生前の非礼を許されよ。

合掌

輿水利雄氏をしのぶ

輿水利雄氏略年譜

- 大正3年2月20日 南佐久郡穂積村穂口（現八千穂村天神町）父忠一郎・母きさの長男に生まれた。
- 大正8年4月 穂積尋常高等小学校に入学。6年生のとき図書館で古代人の生活を書いた本を読み、閑谷の自家の畑から土器の破片ができるのに興味をもった。
- 昭和2年3月 穂積尋常高等小学校高等科第2学年卒業。百姓に学問はいらないという父の一言で、中学校入学を断念して農業に従事した。
- 昭和3年 当時東京帝国大学の新進考古学者の八幡一郎先生が、「南佐久郡の考古学的調査」のため来村。農業のかたわら付近の畑から土器や石器を集めていた輿水少年との師弟の出会いとなつた。
- 昭和8年 現役兵として浜松高射砲第一連隊千葉県四街道分遣隊に入隊。その後、満洲事変、支那事変に引き続き召集され、その間に戦地で父忠一郎氏の訃報に接した。ノモンハン事件後一時帰国。
- 昭和15年 除隊。3月15日、青沼村入沢の岩松りんさんと結婚。同月23日、満洲に向い新京（長春）で新居をもつた。満洲飛行隊司令部に勤務の傍ら、休日にはハルビン博物館に通つた。当時は青銅器研究にとりつかれていたといふ。
- 昭和19年8月23日 妻りんさん訪膜のため子供2人を連れて帰国。同年秋、満洲人と協同で軍事工場を設立。
- 昭和20年8月15日 ハルビンで終戦を迎えた。家には2年間音信不通であったが、その間引揚者保護に協力し、輿水さんの助力で無事帰国し得たと感謝している人も多い。
- 昭和22年10月 リハーサル一つで引揚者3千人のうちの班長として帰国。
- 昭和23年 村役場の事業として、引揚者婦人の授産所を自宅の2階に開設する。その後授産所が高岩に移つたので転職。南北佐久両郡の製材所に丸鋸を売つて朝早くから夜遅くまで働いた。知人と水田の共同耕作をして飯米の確保もはかった。
- 昭和27年 畑八村（八千穂村）中松井遺跡の発掘に参加。
- 昭和28年11月 芹沢長介氏が第一回馬場平遺跡の発掘をすることを知って、由井茂也氏を訪ね、ここで芹沢氏をはじめ戸沢充則、麻生優、吉崎昌一氏等を知つた。以後たびたび

- 川上村を訪ねて旧石器に対して深い興味をもつようになった。
- 昭和29年10月末 由井、芹沢、戸沢、麻生氏を池の平牧場（現八千穂村）に案内して、番小屋裏の斜面で片面ポイントと有柄石鏃を同時に採取した。これが池の平の旧石器発見の最初である。
- 昭和30年 小学校時代の同級生、井出三之助氏と共同して材木の売買を計画したが失敗して、家、屋敷を売って借金の返済に当てる結果となつた。
- 昭和31年 白田町下越の現在地に移り、友人の工場を借りて水管製造業を始めたが、5年後付近の山に原木が不足して閉業。この須場の平牧場塩くれ場付近で黒曜石片を発見。これが後年の池の平遺跡発掘調査の端緒となつた。
- 昭和36年 従業員20人程の弱電機の新工場営電機合資会社をつくった。その後、鉄工場2棟を増設、従業員50人ほどの合名会社とした。
- この頃も日曜、祭日を利用して遺跡をさがし、土器や石器を追いかながら、特にその時代の人の骨を求めていた。その執念がやがてみる時がくる。
- 昭和40年 数年前より北相木村東柄原で縄文早期押型文土器を発見して、これを追求していくが、この年仕事の関係で知り合った新村薰氏をさそって、柄原岩陰で表面採集をしてついに人骨を確認した。11月23日信州大学医学部第2解剖学教室の鈴木誠教授に連絡した。これが柄原洞窟遺跡、縄文早期北相本人の発見となつたのである。
- 昭和41年 佐久市東部地区埋蔵文化財緊急分布調査に参加。
- 昭和45年9月 佐久市野沢盛田遺跡緊急発掘調査に参加。
- 昭和46年6月 八千穂村池の平牧場塩くれ場方面の林道開発にあたり、永年の表面調査により期する所のあった氏は、八千穂村教育委員会を説いて、ついに発掘調査にふみきらせ、自ら調査団長となって、発掘資材の調達、調査品の宿泊等一切の設営に当り、私財を投じて秋には第2次の発掘調査を行い、塩くれ場、トリデロック、湯水地点の3ヶ所を調査し、佐久地方旧石器文化の解明に重要な資料を提供し、年來の宿願を果した。この年佐久市中道遺跡の発掘にも参加した。
- 昭和47年10月 佐久市教育委員会が根々井餅田遺跡の発掘調査に当り、調査団長に推された。この年、佐久市長土呂に北近津遺跡（2月）、同岩村田一本柳遺跡（3月）の発掘調査に参加。
- 昭和48年1月 肝臓病治療のため東京都豊島病院に入院、四月退院。
- 12月、白田町三分井上遺跡の発掘調査に病をおして顧団長としてその推進に当たった。
- 昭和49年1月 再び東京都豊島病院に入院。6月小康を得て退院。
- 8月9日、奥さんと次女と2人のお孫さんを伴ない、自身運転して、かつて団長

として精魂をつくして発掘調査にあたった、池の平塩くれ場遺跡の見分に向かい、思いで残る落葉松林の中で心臓発作におそれて眠るが如く逝かれた。60才6ヶ月のなお惜しみて余りある死であったが、それは興水さんならではの立派な最後であった。

(井出 正義)

興水利雄氏を想う

土屋 忠芳

興水利雄さん逝いて幾年。春風の如き温容な方であり、考古学、郷土史にかけた情熱と学識の深さは頭の下がるおもいであります。それにもかかわらず、平々凡々として私達とつき合って下さいって、殆んど無智であった私をあたたかく教導して下さった。過ぎ去つた日々を想いますと感無量であります。

柄原遺跡発掘の時は、日本中の学者が次々と訪れましたが、その方々を私が忙がしかつたり、ズボラで中々発掘に参加しなかつたので、頻度となく小宅までわざわざ連れて来て下さいって、時を同じうして、矢出川も表振ではありましたが、次々と新しい場所が発見されましたので、一緒に御案内しながら教えて戴きました。

又、新潟県の津南町で芹沢先生が発掘を行つ

ていた時には、現地まで車で私を連れて行って下さり、紹介して戴き、教えて戴きました。今思いますと、当時もう少し私が考古学なり、郷土史に知識があるか、せめてもう五年も早く学んでいたなら、多くのことを吸収できたものと今更ながら残念でなりません。

亡くなる前日、小宅を訪れいろいろ話して行かれた直後、あの様な急変になられ、本当に「神は最愛なる者を手許に連れて行く」と、言いますが、私のみならず、全ての人に敬愛され、また私達家族の者とも常に心を許して話合われていたのに、忽然として幽明境を異にしてしまわれました。

時はかえすすべもなく、生涯の師友たりし興水大兄の冥福を祈るのみです。

興水利雄さんを偲ぶ

黒岩 忠男

昭和45年11月頃のことであると思う。興水さんから森崎先生と東大の丑野さんが来るの、池の平へ行ってみようと電話があった。私も池の平には特に興味と関心があったので二つ返事で出掛けた。

塩くれば周辺からトリデロックへと表面調査をしているうちに、急に雨もよとなつたが、

更に前進して風穴があると思われる所が見える辺まで行つたが、雨が水雨に変わったので帰ることにした。

自動車まで逃げ帰つてほつと一安心。だが大変、舗装した急坂の下りは曲りが多く、その上水雨のため凍っている。タイヤは夏以来の普通タイヤ。チェーンも持参していない。右にツル、

ツル、左にツル、運転している興水さんは額に冷や汗たらたら。同乗者も真青！ やつとの思いで大石部落に辿り着きほっとした。

こんな事が、今でも興水さんとのお付き合いのうち一番強く印象に残っている。

竹内恒と興水利雄

五十嵐 幹雄

まず最初に両氏の敬称を略したことを御許願いたい。それは、両氏とはその生前親しく交際し、その学思を常に感謝している私にとって、いまは亡き2人は呼びすことによってその親しさが一入となるからである。

竹内恒との出会いは“信濃史料”の編纂がはじまり、考古篇の参与を依頼された人たちの集まりの席であった。

竹内恒は、若い時から考古学研究に従事し、南佐久郡教育会が八幡一郎氏に考古学的調査を依頼したとき、地元の担当者として先生とおつきあいをし、その後ずっと続いている。私は、昭和24年に八幡先生の許へ内地留学をし種々ご指導をいたしました。だから兄弟弟子のような関係で、初対面ではあったが何年も前からのおつきあいのような親しい間柄となり、竹内恒が亡くなるまでご交際をいただいた。

竹内恒は当時、南佐久郡誌編纂のための仕事をしていた。戦後各郡の教育会を中心になって新らしい郡誌編纂をはじめたのであり、その中で北佐久教育会はいち早く新郡誌を編纂し発行された。竹内恒はこのうち考古篇に対して強く批判し、南佐久では新らしい資料を使って充実したものを作りたいとの意欲をもち活発な調査研究を進めていた。

畠八村（現八千穂村）では、佐々木広雄氏が庶務を引受けた水上一氏を団長とする青年団の

みなさんによる文化活動がさかんであった。たまたま“中松井”的笠崎正雄氏の所有地で開墾をしたところ、縄文時代の古い土器が出土し、貴重な遺跡であることがわかったので、発掘調査を計画し竹内恒に依頼された。竹内恒は私も参加するように声をかけてくれた。

昭和27年10月26日から5日間八幡一郎氏指導のもとに発掘調査を実施した。私が佐久の調査に関係したはじめであった。中松井は清水町からだらだら坂を約10K余登ったところにある。いまなら自動車ということになるが、当時のことを往復全くの徒歩であった。朝2時間ほど歩いて現場に着き、夕刻宿へ帰るという、いまでは全く考えられない強行軍であった。ところがこの朝夕2時間を歩きながらの語り合いがたのしく、竹内恒の人柄を知り、彼もまた私を知ってくれた。これが機縁となって佐久の発掘、上小の発掘はお互に協力しあい、東京での学会への出席には行を共にした。この間仲良くもあり、またけんかもしだが私の研究生活にとってまことにありがたい人であった。

昭和40年の夏の或る日突然興水利雄が来訪した。名はきいていたが全くの初対面である。にこやかな笑顔におだやかな言葉で筋の通った話をされ、そのよき人柄を知ることができ一生のおつき合いとなつた。学校の先生かと思っていたところ、電機関係の工場を経営されているこ

ともその時ははじめて知ったのであり、他人の気持を大事に考えられることも企業人だからこそと感じ入った次第であった。

さて来訪の趣旨は、北相木村で柄原洞窟を見つけたので、竹内恒に話したがはつきりしないので、信大医学部の鈴木誠先生を中心とする信州ローム研究会に連絡し、調査計画を立てた。ところが竹内恒がそれは困るというが、どうしたものかという相談であった。他都のことであり、いかなるいきさつかを知る由もなく、返答をすることができないので、考古学に興味のある人は少なく、みんな貴重な同好者である。また発掘調査は一番よい学習の場であるから1人でも多くの人が参加できるようお互に努力しましょうなどと話合ってお別れした。話しあう間洞窟調査に対して非常な熱意を持っており、その気迫に圧倒されたことを覚えている。

いよいよ柄原洞窟の発掘が始まった。それは寒さも加わった12月初旬であった。いつごろ見学に行つたらよいかを竹内恒に問合せたところ、全く知らないし参加もしないという。そこで私は1人で見学を行つた。鈴木誠先生が洞窟の下の道路端で焚火をしておられたので種々御教示をいただき学習の成果を得て帰宅したが、鈴木先生の話の中に興水利雄の配意に感謝の意を表されていることを知り、興水利雄の心労を知ることができた。この調査報告は信州ローム第9号に詳しいが、佐久からの参加者は興水のほか、新村薰氏、由井茂也氏の3人であり、地元教育会からの参加者はない。

その後、竹内恒と会談した時、この一件についてつぎのように語ってくれた。

興水利雄がみつけて俺にも知らせてくれた。

話を聞くとどうも貴重な遺跡であるとともに調査がむずかしいように考えた。だから各方面と連絡をとりスタッフも揃えしっかりした調査体制をつくらねば調査は失敗に終る。それには先立つものは金である。実は教育会にはその資力がないので地元北相木村に協力を頼うことになるが、それには手間どると思いそう急ぐ必要もないで、充分準備をしようと話しておいた。ところが興水利雄はそれが待てなく信大へ持込んってしまった。そこで信大の調査となつたが、信大は地元の連絡者を興水とし、教育会には何の連絡もない。たしかに信大にはスタッフが揃つており、参加者への旅費、日当などの心配もなく、都内の調査をしてくれるのはありがたい。地元の受け入れ態勢ができていないと参加の機会が少なくなる。都内にも多勢の同好者が居り、それらの人々のよい勉強の機会である。発掘調査は学問的成果をあげると共に、地元の研究者をも育てなくてはならない。それができなくなつてしまふ。さらにもっと大切なことは、切角の出土品が持ち去られてしまう。地元の人が見たくてもそれができなく、ただ出たという話を聞くだけに終つてしまう。こうなれば全く中央の研究者のために地元の物販がその先棒をかいだことになり、勞あつて益のないことだ。そうならないように俺は考え協力しなかつたのだということであった。このことは興水利雄が私を訪れてきた時の話からも知ることができていた。

昭和40年の柄原洞窟の調査はよい成果があり、貴重な遺跡であることがわかり調査は続けられることになった。興水利雄から竹内恒が勤かないので地元からの参加者が少なく、困った

ものだとの通知を受けた。

さきにも書いたが、私はこの両者の間をどうこうする力も立場もないことをよく知っていたが、竹内恒につぎのような電話をかけたことを覚えている。

郡内の調査とはいって、だれがやろうといいでないか。テーマを持ち、経費をもって調査をしてくれるのは有難いと考える。通知があろうと無からうと、見学し協力を申し立てて勉強の機会にうまく利用したらどうか。そして報告書が出たら分けてもらい、使わせていただくお願をしてはどうか、などと先輩に対し随分生意気なことを言った。

しかし、竹内恒は「俺はいかない、そして出土品が地元から流れるのを監視する。」などといわれた。一本氣である特色をみせつけてくれた。

一方興水利雄からは地元の研究者がばつばつ参加してくれるようになつた。しかし金があるわけではないから個人参加の形をとっている。また、資料は調査のすみ次第かえして貰うことになったとの連絡をうけ、大変よいことだと思つていた。その後柄原調査は回を重ねたが興水利雄はその都度、下準備にとび歩き、全くの裏

方をつとめていたことを鈴木誠氏や小松慶氏からきいたが、いまこの2人も亡き人であり、柄原洞窟調査にかかるさびしい思い出である。

市町村合併などにより南北2つの佐久は1つの佐久となり、考古学研究者のみなさんにより佐久考古学研究会ができ、有力な会員が多数となり立派な活動をされている。竹内恒も興水利雄も私もそうだが、大学等で正式に考古学を勉強したのでなく、ただ物好きで考古学を勉強したものである。まことに幼稚であったかも知れない。だからといって竹内恒や興水利雄の功績を忘れてはならない。佐久考古学会の今日の活動の基盤はこれらの人々の力であったと私どもじいている。

竹内恒は調査の時に若い研究者を招く努力をし、その人を育ててくれた。例えばいま筑波大学で日本の土師器研究の第一人者として活躍する岩崎卓也氏は、東京高等師範学校生の頃よく佐久の調査に招かれ大事にされた人である。

興水利雄が各地から柄原や川上を訪れる若い研究者の面倒をよくみたことなど、佐久考古学史に特筆大書されなければならないと思う。

両人の冥福を祈りつつ筆をおく。

与良 清氏をしのぶ

与良清氏略年譜

明治40年 4月1日	小諸市甲2,601番地、与良長十郎の長男に生る
大正2年 4月	小諸幼稚園入園
大正3年 4月1日	小諸尋常高等小学校入学
大正9年 4月1日	長野県野沢中学校入学
大正13年 4月10日	父長十郎没
大正14年 3月6日	長野県野沢中学校卒業
大正14年 3月31日	北佐久郡大里尋常高等小学校代用教員
大正15年 3月31日	同校訓導
昭和9年 3月31日	北佐久郡小諸尋常高等小学校訓導
昭和11年12月12日	堀内 順と結婚
昭和13年 3月31日	北佐久郡三井尋常高等小学校訓導
昭和13年 6月17日	長女敦子出生
昭和14年 5月19日	母かう没
昭和16年 3月27日	二女朋子出生
昭和16年 3月31日	北佐久郡大井尋常高等小学校訓導
昭和20年 8月5日	三女宏子出生
昭和23年 8月9日	二男義昭出生
昭和24年 3月31日	北佐久郡岩村田小学校教諭
昭和26年 3月21日	四女規子出生
昭和29年 4月1日	北佐久郡軽井沢中学校教諭
昭和30年 4月1日	北佐久郡浅間町岩村田中学校教諭
昭和31年 4月1日	小諸市西中学校教諭
昭和35年 4月1日	小諸市大里小学校教諭
昭和36年 4月1日	小諸市芦原中学校教諭
昭和38年 3月31日	小諸市芦原中学校退職
昭和38年 4月2日	北佐久郡浅科村中津小学校講師

昭和39年7月1日	小諸市東中学校講師
昭和39年9月11日	小諸市坂の上小学校講師
昭和39年12月5日	北佐久郡浅科村御牧小学校講師
昭和41年3月1日	小諸市東中学校講師
昭和43年11月15日	小諸高等学校非常勤講師
昭和45年8月26日	小諸高等学校・小諸商業高等学校兼任講師
昭和46年4月1日	小諸高等学校非常勤講師
昭和49年3月31日	小諸高等学校退職

社会教育歴

昭和24年4月1日～42年3月31日	『北佐久郡志』編集専門委員
昭和40年～47年	『信濃史料』索引作成
昭和43年12月1日～53年1月15日	小諸市文化財審議委員長
昭和45年1月1日～53年1月15日	『小諸市誌』編纂専任委員
昭和47年8月17日～53年1月15日	小諸市立火山博物館協議会委員長
昭和50年4月1日～53年1月15日	『長野県史』刊行会参与
昭和51年9月13日～53年1月15日	長野県文化財保護指導委員
昭和53年1月15日	小諸市小諸病院において死去、正七位勲五等瑞宝章を受る。

与良 清先生のお人柄、学問については、すでに、「信濃」（第30巻第6号）、「千曲」（第19号）において先学の方々により述べられている。

ここでは、与良先生に教えを受けた1人として述べさせて頂きたい。

先生には、坂ノ上小学校4年の時、1年間担任として教えて頂いた。特に社会科では、郷土の歴史をまじえての授業であり、小学校4年生の目にも非常に新鮮な授業であったと記憶している。また、昼休みとか放課後には資料室で土器の接合をよくされていた。それらの土器は今から考えれば加曾利E式土器だったと思う。陽のあたる窓際で黙々と接合されている先生の姿が今でも印象的に残っている。私自身もちょうどこの頃から、土器とか石器に興味をもつようになり、日曜日には先生の御迷惑を省みず、お宅に伺ったこともあった。そうした際にも、先生は一つの土器片についても丁寧に説明をして下さった。郷土遺跡の敷石住居址の調査が行なわれた頃でもある。

その後、大学に入學し、考古学を志すことになったのも先生の教えが大きく影響しているように思う。また、卒業後の進路についても、いろいろと御心配をおかけしてしまった。

郷里にもどり、これから先生にいろいろ教えを乞おうという時に、先生の訃報に接することになってしまった。

先生の教えを道標とし、先生の学思に対して少しでも報いるために努力していかなければならないと思う。

最後に、与良先生の年譜は、小諸市編纂専任委員の小沢武一先生が編集され、「信濃」、「千曲」に掲載されたものである。本誌掲載に際しては、小沢先生の御快諾を頂いた。末文ながら記して深謝したい。

(花岡 弘)

与良先生を憶う

由井 茂也

佐久考古学会顧問の与良清先生が亡くなられました。あまりに突然の出来事でおどろいてしまいました。1月の例会で埋蔵文化財白書の作成を決めた時は、与良先生にも是非参加していただきたいという希望がありました。先生の御指導が会員全体に影響をもち心組みがちがってくるからです。

ところが先生は近頃、おからだのぐあいが悪いというお嘆があるときかされ、すくなくなりました。それから幾日も経たず私達は先生急逝の悲報に接しなければならなかつたのです。日夜不眠でご看護なされた御家族様の御愁傷に対し、お慰めする言葉もありませんが、私達考古学会も大きな柱を失つてしましました。

与良先生のことは、早くからお聞きしていましたが、川上村と小諸市という地理的隔りから、接する機会はほんとうに少なかつたと思います。それでも佐久史談会や考古学会でお会いするようになると、旧知の友のように親しくおつきあい願いました。

先生は、会の中では歴史考古学とでもいうべ

き分野にも広い学識をもち、先生のお力や口添えがなければならないものがたくさんありました。先生は、すでに好評の小諸市史考古編を執筆されていますが、この膨大な資料は先生が自分の足で探し、手で掘り、目で確認した、実に貴重な研究の結果であります。それは、小諸市史であるが同時にわが郷土の後学の為に残してくれた不滅の遺産であると思っています。

先生は、郷土史家としても高名を馳せておられます。先生の歴史観の底には、考古学的実證があつたからで、内容の豊富さに魅力があつたのだと思います。先生は、どなたのお話にも出ますが、すばらしい実践力があつて、自然保護や文化財保護の運動には地域を越えて御活動されました。先生がおどろくべき勉強家であり、努力家であったということは、先生はまた損生を重んじ健康なお体をもっていたからだと思います。あの小柄な体でドタ靴をはいて山坂を登ってこられる、遺跡でのあの姿を今も眼の前に思い浮べます。先生はきっとそうした健康を過信して御無理をされたのではないでしょうか？取り返しがつかない残念なことをしてしま

いました。

それから私には、個人的な小さな思い出が一つあります。去年の秋だったと思います。先生から小諸城大手門構築のお話をおききました。(実は私の不勉強で大手門を錯角していましたが、今回白倉先生から御案内していただき、始めて御説明をきき豪華な構築とその美観に圧倒されました)

大手門は仙石權兵衛の構築であるが、莫大な経費についてその資源は金山経営らしいが、はつきりしていないと云うことありました。私が川上村御所平の古文書の中に「仙石右馬之輔」という人が「川上金山奉行として又ノ沢に

あらせられる」「このご仁は權兵衛様ご次男か又は甥なりと言う」、という記録があるお話を致しますと、先生は大変喜ばれて早速お調べになりたいと言われました。その後、お話をする機会をまたず先生はお亡くなりになってしまった。最近私は、同じ記録が塩尻村の古文書にも出ていることを教えてもらいました。これはほんの一、二行の記録ですが、金山の記録というものが殆んど残っていないので、川上村にとっても貴重な歴史資料だと思います。

それにつけても、先生を惜み、思い出すこと切であります。ここに謹んでご冥福をお祈りする次第であります。

与良清先生を偲ぶ

黒岩 忠男

与良先生も県考古創立以来の会員でした。たしか昭和43年か4年頃だと思いますが、松本の総会の帰りに、竹内・与良・藤沢の先生方と松本駅から汽車に乗り、総会のこと、小諸市の加増遺跡・郷土遺跡等の発掘調査の件につき話しに花が咲き、何時しか藤ノ井駅に着き、早速汽車を乗り替えて、さつきの話の続きを夢中にな

っていると、なんだか車内が急に暗さを増し騒音が大きくなり、「おかしいなあ。信越線にトンネルがあったかい。」と本当に不思議に思っているうちに汽車は炳捨駅に着いてしまい、大笑したり、困惑したりしたことがあります。与良先生は、ぱつぱつ話す話し方をされました、本当に話し上手な先生でした。

一つの想い出

島田 恵子

私が今まで生きてきたなかで、最初の出会いが最後の出会いとなってしまったのが、与良清先生でした。

昭和49年の細田遺跡の発掘現場で、先生と同

じグリッドに入りならんと半日スコップを握りました。もの静かで、あたたかいお人柄が伝わってくるようでした。なぜかあの日の発掘現場の雰囲気は今でもこころに残っています。

武藤 金氏をしのぶ

武藤金氏略年譜

- 明治38年 8月22日 長野県南佐久郡岸野村字相浜、碓氷与惣吉氏の3男に生る。
- 明治45年 4月 同村尋常高等小学校入学
- 大正7年 3月 寻常高等小学校を卒業する。以来家事の農業と石工を業として専念する。
- 昭和9年 同郡平賀村字後家、武藤金作氏の4女よし江と婚約整い、碓井家より養子入籍
武藤に改姓、以後3男、3女を得て家業に励んだ。
- 昭和28年 平賀小学校 P T A副会長に任命される。
- 昭和37年 P T A評議員を退き、P T A活動により長野県P T A連合会長（中村直人）より感謝状を受く。
- 昭和40年 佐久史談会に入り会員となる。
- 昭和41年 野沢郷土史研究会員となり郷土史研究に研鑽され豊富な識見と体験を発揮し活躍する。その中で戦後20年代末に台風によって決壊された現青沼小学校南を流れる谷川の石垣堤防は、故人武藤金氏の生涯の事蹟ではなかろうか。知る人ぞ知る後世に伝えん。
- 武藤氏は考古学にも深い認識をもたれ埋蔵文化財保護に常に積極的に参加され
その豊富な体験を遺憾なく発揮して其の真価を究め永く保存に止めた功績は大きい。
- 昭和46年 4月 佐久市新子田 戸坂遺跡発掘調査（以下発掘調査略）
5月 佐久市岩村田 東一本柳古墳
5月 南佐久郡八千穂村 池ノ平遺跡
10月 佐久市長土呂 西近津遺跡
10月 佐久市前山 中道遺跡
- 昭和47年 1月 佐久市長土呂 北近津遺跡
3月 佐久市岩村田 北一本柳遺跡
8月 佐久市西屋敷 下前田原古墳
- 昭和48年 7月 佐久市岩村田 上ノ城遺跡
10月 佐久市砂田 西一里塚遺跡（餅田と併行）

昭和48年12月	南佐久郡臼田町三分 井上遺跡
昭和49年1月	佐久市野沢 三塚遺跡
4月	北佐久郡御代田町 馬瀬口下原1号墳
6月	佐久市今井 今井西原遺跡
8月	佐久市野沢 市道遺跡
10月	佐久市平賀 後家山古墳
10月	佐久市鳴瀬 細田遺跡
11月	佐久市跡部 町田遺跡
昭和50年 5月	佐久市野沢 鶴田遺跡
昭和51年 5月	北佐久郡軽井沢町 県遺跡
7月	佐久市前山 後沢遺跡
10月	発掘調査の功績により佐久市教育委員会より感謝状を贈られる。
昭和52年 8月	佐久市桜井 上桜井北遺跡
10月	佐久市伴野 休石遺跡
12月	佐久市根岸 榛名遺跡
3月	北佐久郡御代田町 下藤塚遺跡
	平賀氏城跡保存会長として、「平賀氏城跡」を編集、発刊する。
11月	南佐久郡佐久町 宮ノ本遺跡
昭和54年 2月	佐久市岩村田西本町 清水田遺跡
4月	佐久市岩村田 北西ノ久保遺跡
9月	佐久市瀬戸 和田上南遺跡
10月	佐久市長土呂 芝宮A遺跡
10月	佐久市新子田 蛇塚B遺跡
11月	佐久市長土呂 周防畠遺跡
12月	佐久市香坂 兵士山遺跡
昭和55年 3月	佐久市長土呂 芝宮B遺跡 調査団長となる。
昭和55年 4月 6日	永 畿 故藤昌院金窓淨念居士 俗名 数多くの発掘調査に從事され多くの功績を残したが、遂に病に倒れ幽命を異にし知食となる。茲に追悼の意を表して略譜とす。 武藤 金氏の冥福を祈り安らかに眠れ 合掌

(佐藤 敏)

武藤 金さんとの出会い

島田 恵子

武藤 金さんとの最初の出会いは、私が初めて佐久平の発掘調査を見学に行った、昭和48年11月の上ノ城遺跡の現場であった。

あの独特のヒゲとボクは……。に親しみを感じ1日武藤さんの側で初めての発掘作業のお手伝いをしたのである。

「臼田で近い内に発掘があるから、また出掛けて来なさい。」と言われて別れたのであったが、それから2週間位してジーゼルの中でバタリお会いしたのであった。この2度目の出会いがなければ、果して考古学を学ぶ現在の私が存在したのだろうかと時々考える所以である。と同時にあのヒゲがなかったならジーゼルの中で会っても忘れてしまって声をかけなかつたであろう。それは、当の武藤さんが声をかけた私を想い出すのにしばらくの時間を要したからである。小説から中込まで向い合いの席に座つて話したのであったが、なにを話したかはもう想い出せない。

その後、細田遺跡、後沢遺跡、上桜井北遺跡等の発掘調査でご指導をいただいた。現場での武藤さんは、常に調査団の和を念頭においてその推進役を努めていた。作業協力の地元の方々とも、いつもなごやかに勉強しながら調査が出来たのも、武藤さんのお人柄と努力の成果であろう。

昭和53年4月、武藤さんは病魔におかされ入院した。6月には私が交通事故の後遺症の2度目の手術を受けるために入院し、1週間程入院生活を共にした。お互の病室を行き来し、私の

病室でも武藤さんは人気の的であった。回診の終った午後は、病院の付近のお寺まで散歩に行き、木陰で休みながら健康になつたらまた発掘に行く日のことを楽しそうに話していた。

退院後は、「平賀氏城跡」の発行を保存会長としての責務のもとに立派に成し遂げたのである。その後は周囲の者が体を心配し、休むように配慮しても聞き入れることなく、亡くなる寸前まで発掘調査に情熱を傾むけていた。

また、この間には展示会のための準備をおこない土器復原作業は、武藤さんの手によってそのほとんどが完成した。一般市民への啓蒙に終始気を配っていたからである。

退院してから亡くなるまでの2年間、武藤さんの考古学に対する執拗なまでの執念は心がいたむ思いであった。病む体をいたわることなく活動をつづけるのだった。「もっともっと長生きしてほしいから体を大切にして下さい」となんども言った私に対しては、亡くなる寸前まで以前のあの父娘のような親しさで心を開いてはくれなかつた。「武藤さん明日も現場に来て下さい」と言われることを喜んでいたからである。しかし、ようやく快復した体も発掘調査に参加するようになってから毎日疲れが目立ち、おとろえてゆくのが目に見えていたので、私にはとても武藤さんの喜ぶ言葉は口から出なかつた。

「どうしてあんなに急いで逝かなければならなかつたの！」天国にいる武藤さんに向ってこう叫ばずにはいられない。

佐久考古学会にとつても、私にとつても武藤

さんの死は大きな痛手であった。しかし、武藤さんの遺してくれた数々のご教示や考古学に対する真摯な情熱は、私のこころの中に生きつづ

けてゆくであろう。

「武藤さんどうかおやすらかに」

武藤金さんを偲ぶ

黒岩忠男

「調査が始まるから出てこねかい。」こんな声が道の向こうから、電話の受話器から聞こえる様な気が何時もしている。

陽に焼けた顔! 何時もニコニコしている顔、髪が後にほんの中訳程度にしか無い頭に真夏の発掘調査でも帽子はかぶらず、手拭で鉢巻きをしている姿。気取り気のない素朴な人柄の武藤さん、こんな武藤さんを本当に好きでした。

入院先の佐久病院から外出許可もまだないの

に相変わらず頭に鉢巻をして、私の家までのこのこやつて来て、「へえ、こんねに良くなつたに、又、発掘と一緒に行きやしちゃう。」と本当に嬉しそうな顔をして言った時の姿が今でも目に見えます。

第2回目の入院前日迄、1日も休まず発掘現場で作業をし、75才の年齢を感じさせない肉体力と精神力を頭が下りました。

武藤金さんを憶う

林幸彦

「僕は秋が好きだ。」といつも口ぐせのよう武藤さんは言っていた。「どうしてですか?」と問いかけても、そのわけを話していただけなかつた。四季の中で春は草木の芽がふき、人間にしてみれば幼年から青年の時であり、夏は草木を含めて生物がいっせいに成長する時期であろう。してみれば、秋はそれらがいっせいに実を結ぶ季節である。しかし、目の前には、厳しくつらい冬がせまっており、その時に備えて草木は、種を守るべく強い殻をおおい、人は食物や燃料を貯える時もある。換言すれば、有事に備えて己を鍛え磨く時ともいえよう。武藤さんにしてみれば、もっともっと深い思慮、体験のはてに言われた言葉であったと私は思う。いつか同じ様な心持ちで、この言葉の重みが私

にも理解できる日が訪れんことを願う。亡くなつてもう一年が経つしまつた。私は右も左もわからなかつた、上の城遺跡で武藤さんと初めてお会いした。それから8年、私が役所の仕事や現場で難関にぶつかった時、多くの方々に迷惑をかけてしまった時々にいつも叱咤激励していただいた。なにかにつけて武藤さんが身をもって示してくれた人の生きざまはいまも心に鮮明にきざみつけられている。現場で草書きの手を休めれば夏草の向うから、ネズミ色のコートに黒いナップザックをショット、胸をはつて頭にやつとこさ手拭をひっかけた、武藤さんが「やあ、元気でいたか!」って来てくださるようなそんな思いにかられる。

畠山忠雄氏をしのぶ

畠山忠雄氏略年譜

- 明治44年6月29日 長野県佐久市大字伴野1540ノ2に於て、畠山三寅・ゑつ御夫妻の長男として誕生。
- 大正15年3月25日 南佐久郡岸野村立岸野尋常高等小学校高等科2年卒業
- 昭和4年3月20日 長野県立北佐久農学校本科2年卒業
- 昭和9年3月20日 東京皇典講究所神職養成部2年卒業
- 昭和9年3月20日 皇典講究所より雅楽ひちりきの修了証を受く
- 昭和9年3月20日 国学院大学より剣道初段を允許さる
- 昭和9年3月31日 長野県北佐久郡御牧小学校代用教員を拝命す
- 昭和9年12月20日 南佐久郡岸野村大字根岸字宮ノ協村社根原神社社掌に補さる
同岸野村大字根岸字龍ノ山村社平井神社社掌兼補・同岸野村大字根岸字正源村
社社掌兼補
- 昭和10年 北佐久郡南御牧村大字矢島字宮ノ脇村社八幡神社社掌兼補
- 昭和10年8月～12月 三岡村真願学園に於て神職講習を受く
- 昭和15年10月6日～30日 長野県派遣神職として満州小古洞に神社創設のため諏訪大神御分社を奉
持して出張奉仕す
- 昭和13年3月31日 初等科訓導北佐久郡御牧小学校勤務
- 昭和14年3月31日 北佐久郡中津小学校訓導に任せらる
- 昭和15年3月31日 中津小学校青年学校指導員に補せられる
- 昭和17年3月31日 北佐久郡岩村田国民学校訓導・本科正教員に任せらる
- 昭和18年6月27日 神祇院、長野県、大日本神社会長野県支部主催神職講習会に於て修了証を受く
- 昭和21年3月31日 北佐久郡御牧国民学校訓導を命ぜらる
- 昭和24年9月 小学校教諭2級普通免許状を受く、同中学校教諭2級普通免許状を受く
- 昭和27年 南御牧村大字矢島字宮協鎮座諏訪八幡神社宮司に任せらる
- 昭和27年1月5日 浅科村西中学校教諭に補せらる
- 昭和30年10月 佐久地方方言の研究を出す
- 昭和30年12月11日 剣道五段を允許さる

- 昭和32年5月2日 北佐久郡立科村立立科西小学校教諭に補せらる。教頭職務
- 昭和32年5月2日 北佐久郡浅科村蓬田八幡神社宮司に任せらる、本務。蓬田に転任す
- 昭和32年5月30日 小諸市山浦西浦神社宮司兼任、同北佐久郡立科村字山源訪神社宮司兼任
- 昭和32年5月30日 北佐久郡春日村上神源訪神社宮司兼任、同春日村春日社源訪神社合殿宮司兼任
- 昭和32年6月10日 北佐久郡立科村字山源訪神社兼任、立科村山辺源訪神社宮司兼任、同北佐久郡立科村牛鹿源訪神社宮司兼任
- 昭和32年6月25日 北佐久郡浅間町今井新海神社宮司兼任
- 昭和32年7月1日 北佐久郡浅科村甲宮山源訪神社宮司兼任
- 昭和32年 月15日 北佐久郡春日村根神社宮司兼任
- 昭和32年9月30日 北佐久郡誌第4巻の執筆者の1人として執筆
- 昭和34年4月1日 北佐久郡東村立三井小学校教頭を命ぜられる
- 昭和37年4月1日 北佐久郡望月町立協和小学校教頭を命ぜられる
- 昭和37年 長野県考古学会発足、会員となる
- 昭和42年7月20日 北佐久郡誌資料集の編纂委員の1人として執筆
- 昭和43年3月31日 職に依り本職を免じられ退職、通算34年に渡る教師生活の幕を閉じる
- 昭和43年4月10日 北佐久郡浅科村文化財保護委員会顧問となる
- 昭和43年9月30日 近代書道開拓者、比田井天来・小翠の書編集委員として活躍
- 昭和43年11月 東信神社総代・神職研修会に出席
- 昭和43年11月6日 神宮大麻領布成績優良につき表彰さる
- 昭和44年5月 北佐久郡浅科村土合1号墳の発掘調査をし、45年長野県考古学会誌第9号に報告
- 昭和45年 長野県考古学会幹事任期2年、其の間東信地区会との連絡、後輩の指導等にあたる
- 昭和45年7月 佐久考古学会発足同時に佐久考古学会員となる。
- 昭和45年11月30日 上田会場の神社総代・神職研修会に出席
- 昭和45年9月 佐久市野沢藍田遺跡緊急発掘調査に参加し、報告書の地理的環境分野の執筆を担当する。
- 昭和46年4月1日 北佐久郡浅科村公民館長に任せられる
- 浅科村体協副会長・五郎兵エ記念館建設調委員長・防犯協会理事等兼任
- 昭和46年8月22日 神社庁主催神職教養講習会に出席その課程を修了
- 昭和46年9月11日 県神社庁創立二十五周年にあたり35年勤続の表彰を受ける
- 昭和46年11月9日 佐久市大字猿久保幸神社宮司を兼任。同三河田字土堂源訪神社宮司を兼任。同新子田八幡神社宮司を兼任。同横和神社宮司を兼任

- 昭和46年2月20日 神社總代・神職研修会に出席
- 昭和47年2月 神社庁主催神職教養神社建築講習に出席
- 昭和47年3月 北佐久郡浅科村久保畠古墳の出土遺物の調査、長野県考古学会誌第18号に報告する。
- 昭和47年10月2日 神職祭式講習に出席全課程を修了
- 昭和47年10月20日 多年神明に奉仕の故をもって県神社庁・県神社總代連合会の席上表彰を受く
- 昭和48年4月1日 任期満了に伴い浅科村公民館長退任
- 昭和48年8月 神社庁主催神職教養講演会に出席
- 昭和50年 旧「望月牧」跡に残る須恵器窯址調査を集約、一覧表にして発表
- 昭和51年 昭和初年浅科村御牧ヶ原須益出土の鉄鎌につき、無銘小型梵鎌であるが和鎌の初期形態を示す顕著な様式的特徴をそなえた点を究明し、国重要文化財の指定のため努力す
- 昭和52年 浅科村人権擁護委員に就任
- 昭和55年7月30日 永眠

(黒岩 忠男)

畠山先生の思い出

桐原 健

畠山先生には、「信濃史料第一巻」の調査時にお会いしている筈なのだが、申し訳ない次第ながら記憶がない。お世話になったのは開発地の埋文分布調査の折で、45年には北御牧村、46年は小諸市と一緒に歩いてくださった。46年にはこの他に土合一号墳の保護協議と雨境峠から春日湯沢までの調査にご協力をいただいている。

分布調査の折は与良清先生も居られて、北御牧の時など両羽神社の鞍馬人調馬師の像をのぞきこんでは渡来人と牧場の関係に思いを馳せ、関連して浅科村蓬田の高良神社は高麗ではないかなど談ぜられた。足をのばして比田井の大宮神社に詣り、「ここにある王塚古墳を掘りたいなどの話があるが、もし、ご遺骨があつたら彦

狹島王のお墓だとする伝承がバーになりますから、止めさせるようにいたしましょう。」などと笑われた。あれやこれやで、これは楽しい踏査だった。

雨境峠からの古東山道調査は先生の発意で行なわれたもので、6月12日、折悪しく雨天だったが望月町の大草教育長、同町財産区議長の小林さん、それに土屋長久さんとの5人で出発した。雨境部落の下から開拓道路に入り、浅田切—寺久保—本沢と唐沢の合流点—本沢過上一大栗と通つて春日湯沢に出た。この時の踏査で確認したことは中与惣塚から鳴石を通る様になっている。大栗から鳴石までは1時間半、湯沢・寺久保間2時間、寺久保から鳴石までは3時間ということだった。

土合1号墳の保存では、当時公民館長だった先生が一番熱心だった。佐久で最も副葬品の豊富な古墳だというだけではなく、牧場との関係、

東山道との関係を物語る貴重な郷土の文化財なんだと力説される先生だった。

畠山忠雄先生を偲ぶ

黒岩 忠男

畠山先生も、県考古学会創立以来の会員でしたが、発掘調査の現場でご一緒したのは、佐久市篠田遺跡の調査の時だけでした。

先生は、昭和45年、46年と県考古学会の幹事を1期務めましたが、その間役員会・幹事会等の様子、県内各地区の研究活動の様子をコピーして私達に配布してくれたことを覚えています。

当時は、佐久地区にも例会等はなく時々思ついた時に会をもつたにすぎない時代だったので、畠山先生からの県下の状勢を楽しみにして嬉しく拝見することを思い出します。

先生は、寡黙の人でしたが、仲間づくりとか、又、後輩の指導、面倒を大変よくみてくれた先生でした。

押型文土器と畠山さん

渡辺 重義

畠山さんが遺跡パトロールをしている頃である。堂々たる巨体にロイド眼鏡、お得意のスクーターに乗って八幡から軽井沢までとぼして来た。「どこかで古い土器が出ている所があるつう話だが案内しろや。」私もオートバイに乗って弁財遺跡に案内した。ここからは茅山式土器が出土している。「うん、好い場所だなあ、これからも何か出土するかも知れねえから時々見廻ってくれや。」と言って立ち去らうとした時、私は道から5m位の切通しの所で土堤をくずして居た。ボロリと6cm角位の土器が1片出て来た。今まで見たことのない文様なので、私

は一気に斜面を飛び降りて畠山さんの所へ持つて行つた。土器を見た瞬間あの象のよう目のカット見開き「辺さん、こりゃあ押型文土器だよ。たまげたなあ、辺さん大手柄だよ軽井沢で縄文早期の土器を見付けたのは。こりゃあよかったです。」畠山さんは我が事のように喜んでくれた。そして将来の証拠とするため記念写真を撮つた。私はそれまで、押型文土器など全く知らなかつた。畠山さんはこの時から10年前に、望月町の土林から出土した山型文土器のことでも既に知識を得て居たのである。

あとがき

編集委員長 井出 正義

故人となられた佐久考古学会の先輩、竹内、興水、与良、三氏の追悼号を企画してからもう三年になる。その間さらに武藤、島山両氏が相ついで逝去され、一層のさびしさを感じることになった。

昨年、五氏の追悼号として企画を改めて以来は、会員多数の協力が積極的に結集され、4月5日の原稿締切日には予定原稿のすべてが提出され、17日の編集会議で最終的な打ち合わせがなされた。

故人各氏について、年譜と追悼文を各一編、他に会員の自由投稿による思い出の記を一、二編とする。これが乏しい会計をやりくりする佐久考古学会の精いっぱいの企画であった。しかし、県史の桐原健先生からは、特に心あたたまる思い出の文をいただくことができました。郡外会員の五十嵐幹雄氏からは、大先輩でなければ語ることのできない貴重な研究者の人間的交渉の一断面を語ってもらうことができました。会員一同にかわって厚く御礼申し上げます。

会員多数の協力が見事に結集したこの追悼号の作成が、今後の佐久考古学会の歩みの上に大きな節目となり、発展の力となることを信じます。

さいごに、この追悼号のために鳥田恵子会員に編集作業いっさいに格別の御努力をいただき、また、表紙は福島邦男会員に作成していただいたことを付記して感謝いたします。

1981年5月27日

佐久考古 No.5
(追悼号)

発行者 由井茂也

発行 長野県佐久考古学会
(〒385佐久市岩村田住吉町104/7)
電話02676-8-0617 木内捷方

編集者 井出正義 黒岩忠男 佐藤敏
木内捷 福島邦男 烏田恵子

印刷 株式会社 佐久印刷所